兵庫県文化財調査報告　第428冊

篠山市

東古佐遺跡
発掘調査報告書

―主要地方道西脇篠山線道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

平成24（2012）年３月

兵庫県教育委員会

東古佐遺跡　発掘調査報告書

兵庫県文化財調査報告　第428冊

兵庫県教育委員会

23教Ⓣ1－032 A4

東古佐遺跡
発掘調査報告書

―主要地方道西脇篠山線道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

平成24（2012）年３月

兵庫県教育委員会

例　言

1．本書は兵庫県篠山市東吹・網掛・東古佐に所在する『東古佐遺跡』の発掘調査報告書である。
なお、本書は兵庫県文化財調査報告第428冊にあたる。
2．今回の発掘調査は（主）西脇篠山線道路改良事業に伴うものである。なお、同事業は兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所が実施したものである。
3．今回の本発掘調査は、平成14年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。調査は同事務所職員山上雅弘・池田征弘が担当した。調査期間は平成14年５月24日～８月９日、調査面積は1089㎡である。
4．平成13年度に実施した確認調査については山本三郎が担当した。
5．遺構実測・写真撮影などの現場での作業は各職員が担当し、遺構図の製図および遺物の実測・製図は兵庫県立考古博物館職員および嘱託員が担当した。
6．写真は遺構を現地調査員が撮影し、遺物については株式会社地域文化財研究所に委託して行った。
7．本書の第１図は国土地理院発行の１／25,000地形図「篠山」を１／50,000に縮小して使用した。
8．本書で使用した標高は東京湾海水準（T．P.）を基とし、方位は国土座標第Ⅴ系の座標北を示す。座標値に付いては世界測地系である。
9．遺物の番号は通し番号とした。鉄製品はF、木製品はW、石製品はSを冠し土器との区別を行った。土器は種別によって断面の表現を変えた。須恵器を白抜き・土師器を黒塗り・瓦器網掛けで示した。
10．調査で使用した遺物・写真・図版などの資料は兵庫県立考古博物館において保管している。
11．現地調査に際しては以下の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝いたします。
立命館大学　青木哲哉・㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　伊野近富
篠山市教育委員会　河野克人・三田市教育委員会　山崎敏昭

本文目次

第１章　調査の経緯 ……P１
　第１節　調査に至る経過 ……P１
　第２節　調査の体制 ……P２

第２章　地理的環境・歴史的環境 ……P５
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境

第３章　調査の成果
　第１節　調査概要 ……P９
　第２節　弥生時代～古代（下層の遺構） ……P９
　第３節　中世 ……P10
　第４節　小結 ……P14

第４章　出土遺物
　第１節　弥生時代～古代 ……P14
　第２節　中世 ……P17
　第３節　出土遺物の検討 ……P23

第５章　まとめ ……P35

分析　放射性炭素年代測定 ……P37

挿図目次

第１図　遺跡の位置
第２図　井戸の調査風景（北東から）
第３図　表土の掘削作業（南東から）
第４図　現地説明会の風景（北東から）
第５図　調査区位置図
第６図　調査中の東古佐遺跡（東から）
第７図　東古佐遺跡の周辺
第８図　周辺の遺跡
第９図　暦年較正結果

表目次

表１　瓦器法量表１
表２　瓦器法量表２
表３　瓦器法量表３
表４　遺物観察表
表５　遺物観察表
表６　遺物観察表
表７　遺物観察表
表８　遺物観察表
表９　遺物観察表
表10　遺物観察表
表11　遺物観察表
表12　測定試料及び処理
表13　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

図版目次

図版１　調査区位置図
図版２　調査区全体図
図版３　調査区断面図
図版４　SB１・SB２　平面図・断面図
図版５　掘立柱建物　平面図
図版６　柱穴　平面図・断面図
図版７　SE１・SE２　平面図・断面図
図版８　SE３　平面図・断面図
図版９　SE５・SE６　平面図・断面図
図版10　SE７　平面図・断面図
図版11　SE14～SE16　平面図・断面図
図版12　SE17・SE20　平面図・断面図
図版13　SK４　平面図・断面図
図版14　土坑　平面図・断面図
図版15　溝・土坑　平面図・断面図
図版16　下層遺構　平面図・断面図
図版17　出土遺物　弥生～古墳１
図版18　出土遺物　弥生～古墳２
図版19　出土遺物　弥生～古墳３
図版20　出土遺物　弥生～古墳４
図版21　出土遺物　中世１
図版22　出土遺物　中世２
図版23　出土遺物　中世３
図版24　出土遺物　中世４
図版25　出土遺物　中世５
図版26　出土遺物　中世６
図版27　出土遺物　中世７
図版28　出土遺物　中世８・木製品１
図版29　出土遺物　木製品２
図版30　出土遺物　木製品３
図版31　出土遺物　木製品４
図版32　出土遺物　石製品

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景　上．近畿自動車道舞鶴線篠山I.C上空から（南西から）
　　下．遺跡上空（南から）
写真図版２　遺跡全景（真上から）
写真図版３　遺跡全景　上．東から　　下．西から
写真図版４　第１面　調査区全景　上．東から　　下．西から
写真図版５　第１面　掘立柱建物・柱穴　上．SB１・SB２（東から）
　　下．調査区西側柱穴群（東から）
写真図版６　第１面　SB１柱穴断面　①P17（北から）　②P21・P22（北から）　③P25（南から）
　　④P37（南から）　⑤P40・P41（南から）
写真図版７　第１面　柱穴断面　①P234（北東から）　②P62（北東から）　③P84（北から）
　　④P87（北東から）　⑤P89（南から）　⑥P76（南から）
　　⑦P174（西から）　⑧P173（西から）

写真図版８　第１面　井戸１　上．SE１・SE２（西から）　　下．SE１（北から）
写真図版９　第１面　井戸２　上左．SE１水溜（北から）　　上左．水溜曲物（北から）
下．SE２断面（南から）
写真図版10　第１面　井戸３　上．井戸群東側検出状況（東から）
下．井戸群東側検出状況（南西から）
写真図版11　第１面　井戸４　上．SE３（南から）　　下．SE３水溜（南から）
写真図版12　第１面　井戸５　上．SE７（南から）　　中．SE５（南から）　　下．SE５断面
写真図版13　第１面　井戸６　上．SE17（東から）　　下．SE17水溜（東から）
写真図版14　第１面　井戸７　①SE６断面（南から）　　②SK10断面（南から）　　③SE20（東から）
④SK４（南から）
写真図版15　第１面　井戸８　上．SE14～SE16（西から）　　中．SE14断面（南から）
下．SE15･SE16断面（南から）
写真図版16　第１面　溝　　上．SD１（東から）　　中．SD１（南から）　　下．SK９（南から）
写真図版17　第２面　調査区全景　上．東から　　下．西から
写真図版18　第２面　土坑・土器　上．SK18（南から）　　中．　SK18（東から）
下左．須恵器杯29出土状況（東から）
下右．須恵器壺41出土状況（東から）
写真図版19　第２面　土器　①弥生土器甕19出土状況（北から）　　②弥生土器甕18出土状況（北から）
③弥生土器甕23出土状況（北から）　　④弥生土器壺10出土状況（北から）
⑤弥生土器甕20出土状況（北から）　　⑥土師器甕48出土状況（東から）
⑦土師器甕50・51出土状況（東から）
写真図版20　第２面　溝　　上．SD３（東から）　　下左．SD３断面西（南から）
下右．断面東（西から）
写真図版21　弥生～古墳時代　出土遺物１
写真図版22　弥生～古墳時代　出土遺物２
写真図版23　弥生～古墳時代　出土遺物３
写真図版24　弥生～古墳時代　出土遺物４
写真図版25　中世　出土遺物１
写真図版26　中世　出土遺物２
写真図版27　中世　出土遺物３
写真図版28　中世　出土遺物４
写真図版29　中世　出土遺物５
写真図版30　中世　出土遺物６
写真図版31　中世　出土遺物７
写真図版32　中世　出土遺物８
写真図版33　中世　出土遺物９
写真図版34　中世　出土遺物10
写真図版35　中世　出土遺物11
写真図版36　中世　出土遺物12
写真図版37　木製品１
写真図版38　木製品２
写真図版39　石製品

第１図　遺跡の位置

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

１．調査経過

兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所は（主）西脇篠山線道路改良事業を計画した。このうち今回の調査区付近では隣接地に東古佐遺跡の存在が知られ、北側の丘陵には蛭子群集墳・護摩ヶ谷群集墳、南側には薬師山古墳群・網掛古墳・東吹西山古墳群などが知られていた。

このため、（当時）兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では上記土木事務所の依頼（平成13年12月４日付 丹波（柏土）第2161号）により平成13年度に当該地区を確認調査した。調査は平成13年12月19日～12月20日の２日間で、対象地に２×２ｍのグリット９か所（36㎡）を設定し、埋蔵文化財の有無を確認した。掘削作業は重機と人力で行い、さらに面検出後は人力で面および断面の清掃をおこなった。その後に写真・図面などを作成した。

この結果、遺構･遺物を検出し、２面にわたる遺構面の存在が明らかになり、上層では中世、下層では庄内期を中心とする土器が出土した。さらに調査地点は地形的に東から西に下る地形であるが遺構の集中から見ても西側は遺物の出土量が減少し遺構の密度も稀薄になる傾向が認められた。この成果によって、調査地区のうち西側は周知の遺跡である東古佐遺跡の西限域にあたることが確認された。

これを受けて、兵庫県丹波県民局県土整備部篠山土木事務所より平成14年３月28日付 丹波（柏土）第2702号に基づく依頼を受け、（当時）兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が本発掘調査を実施した。なお、調査期間は平成14年５月24日～８月９日で、調査面積は1,089㎡である。

２．調査の経過

調査に当たっては表土を重機で掘削し、包含層掘削および遺構面検出・遺構掘削・清掃などを人力で行った。なお、遺構面検出後、足場写真などによって現場を撮影し、断面図などの作成をおこなった。

調査は東から開始し順次西側に作業を進めた。また、第１面調査後に人力によって掘削を再度行い、下層面の調査を実施している。上下２面の測量に際しては、第１面が６月28日、第２面が８月２日の両日に航空測量（株式会社河南測量設計）を実施している。

また、現場の記録保存については個別遺構の実測を調査担当者および調査補助員が行った。図の縮尺は１／10・１／20・１／50など実測対象によって適宜判断した。また、個別遺構の写真撮影についても調査担当者が足場などを使って大型及び小型カメラで撮影を行った。デジカメについてはこの当時まだ活用されていなかったため使用していない。出土した遺物については取り上げ後、現場事務所で水洗い、ネーミングなどを行い出土単位ごとに整理して台帳を作成した。

なお、調査期間中に現地説明会（６月23日）を実施して80名の見学者をえた。

第２節　調査の体制

１．現場調査の体制

確認調査

遺跡調査番号　2001212
調査期間　平成13年12月19日～12月20日
調査面積　36㎡
調査担当者　調査第３班　班長　山本三郎

第２図　井戸の調査風景（北東から）

本発掘調査

遺跡調査番号　2002089
調査期間　平成14年５月24日～８月９日
調査面積　1089㎡
調査関係者
調査担当者　調査第３班　主査　山上雅弘
　　主任　池田征弘
現場事務員　北山由紀子　　西山はるみ
現場補助員　谷後恒美
調査請負　株式会社石井緑化造園
航空測量　河南測量

第３図　表土の掘削作業（南東から）

第４図　現地説明会の風景（北東から）

２．整理作業の体制

整理作業は平成22・23年度の２カ年にわたって実施した。

平成22年度は遺物の水洗い・ネーミングおよび遺物の接合や、金属製品以外の実測を実施した。金属製品については保存処理を実施している。さらに、土壌サンプルの分析鑑定を実施している。

平成23年度は金属製品の実測・図面補正・トレース・遺物復元及び写真撮影・写真整理・木製品の保存処理、報告書のレイアウト及び編集を実施した。

平成22年度

実測	主任技術員	島田留里
	企画技術員	森園悦子
接合・復元	主任技術員	眞子ふさ恵・島村順子
	企画技術員	三好綾子・又江立子
	図化技術員	宮野正子・荻野麻衣

平成23年度

実測・トレース	主任技術員	島田留里
	企画技術員	高瀬敬子
	図化補助技術員	久保夏美
接合・復元	主任技術員	島村順子
	企画技術員	三好綾子
	図化技術員	奥野政子・荻野麻衣
	図化補助技術員	平宮可奈子
	日々雇用職員	吉田優子

第５図　調査区位置図

第６図　調査中の東古佐遺跡（東から）

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

篠山市は平成17年の町村合併によって篠山町・丹南町・今田町・西紀町の旧多紀郡４町が１市になったが、東古佐遺跡はこのうち旧丹南町に所在している。地理的には今田町を除く旧３町は篠山盆地と呼ばれる標高200m前後の盆地と周囲の標高500～600m前後の丘陵地帯が占める。

調査地周辺は標高199m前後で篠山盆地の西寄りに位置する。篠山盆地には加古川の支流である篠山川が盆地中央を流れるが、この川は遺跡付近では北約500～600mにあって西側に流下し、丹波市山南町へと流れ、加古川へと通じている。

一方、遺跡周囲は段丘化した地形を呈し、篠山川の河床からは10m前後の比高差を測る。さらに、調査地の周囲は標高220m前後の小丘陵が北・東・南側を取り囲むが、調査地はこのうち北・東側丘陵の裾部に位置する。ところでこのような島状の小丘陵は盆地内に散在して立地する。この丘陵裾に多くの遺跡分布が認められるが、東古佐集落もこの１例であろう。島状の丘陵裾には広く安定した高燥地がないため、この地域の集落立地は島状の小丘陵ごとに分断され、現集落もこの景観の面影を残すものが多い。

ただし、遺跡周辺では篠山川の河床が周囲の平地より低いことから用水に苦労したようで、例年水枯れに悩まされた。特に東古佐は上流にあたる東南側を丘陵が塞ぐ地形であるため、耕作に伴う用水の確保はもっとも不便な場所であったようだ。そのことは古くから水枯れに苦しんだ伝承が伝わることからも窺い知ることができる。さらに、かつての遺跡周辺（明治期まで）では耕作のための用水を溜池（東古佐では南側に青池がある）に頼っていたが、この水のみでは賄えないため、湧水や井戸からの汲み上げ水なども利用した。しかし、この引水作業がかなりの重労働であり耕作が困難であったという。このような問題を解消するために東吹・吹新・宇土・杉・西吹・東古佐・網掛の７集落によって「吹耕地整理組合」が大正２年（1913）に設立され、耕作地の耕地整理を行うとともに、渡り瀬橋の下流に揚水機を設置した。これによって大正６年から耕作地への配水が実施され、大正13年におこった旱魃にも完全な収穫が得られたことが伝えられている。

第２節　歴史的環境

篠山盆地では近畿自動車道舞鶴線などに伴う調査によって1980年代から大規模な発掘調査が目立った。ただ、遺跡周辺での発掘調査は限られており、遺跡周辺の概要を知ることができる成果はあまり多くない。

ここでは今回の調査に関係する弥生時代～中世を中心に概略を述べておきたい。

弥生時代については東古佐遺跡周辺では多くの成果が認められないので篠山盆地全体の概要を述べておきたい。早い時期のものでは四ノ坪遺跡（丹南町岩崎）や口坂本遺跡（西紀町口坂本）で前期新段階の土器が出土したことがいわれている。中期～後期では竜円寺遺跡・西木ノ部遺跡・板井・寺ケ谷遺跡・内場山遺跡・上板井遺跡・藤岡山遺跡などがあり遺跡数も増加する。また、弥生時代後期から古墳時代に続く集落遺跡としては小枕遺跡（小枕）や北野遺跡（丹南町大山）が代表的である。

第７図　東古佐遺跡の周辺

第８図　周辺の遺跡

１．東古佐遺跡	２．護摩ヶ谷古墳群	３．護摩ヶ谷中世墓	４．東古佐近世墓
５．中池ノ坪遺跡	６．東古佐遺物散布地	７．蛭子山古墳群	８．護摩ヶ谷南遺跡
９．東吹西山１号墳	10．東吹西山２号墳	11．東吹西山３号墳	12．東吹西山４号墳
13．薬師山古墳	14．網掛古墳	15．網掛２号墳	16．大平山２号墳
17．大平山１号墳	18．八柱神社裏山古墳群	19．網掛城跡	20．網掛城跡古墳
21．長者ヶ谷古墳群	22．薬師山１号墳	23．薬師山２号墳	24．薬師山３号墳
25．西吹遺跡	26．西吹城跡	27．谷山遺跡Ｂ地点	28．谷山遺跡Ａ地点
29．谷山遺跡	30．東城山遺跡	31．竜円寺遺跡	32．谷山城
33．岩崎城跡	34．岩崎遺跡	35．岩崎四ノ坪遺跡	36．岩崎１号墳
37．岩崎２号墳	38．宇土古墳	39．向井山１号墳	40．向井山２号墳
41．向井山３号墳	42．向井山４号墳	43．権現山遺跡	44．飛の山城跡
45．飛の山古墳群	46．諏訪山１号墳	47．諏訪山２号墳	48．諏訪山３号墳
49．諏訪山４号墳	50．諏訪山５号墳	51．西岡屋遺跡	52．ヤケヤノ坪遺跡
53．柴崎遺跡	54．国史跡篠山城跡	55．篠山城旧三の丸跡	56．篠山城下町
57．東中道ノ坪遺跡	58．吹城跡	59．城山１号墳	60．城山２号墳

弥生時代～古墳時代にかけての遺跡周辺の詳細は不明であるが、古墳については周囲に多く存在することが知られている。周知の古墳では、北側の丘陵に蛭子群集墳・護摩ヶ谷群集墳、南側には東吹西山１・２号墳・薬師山古墳群・網掛古墳・網掛２号墳・大平山２号墳・東吹西山古墳群などの古墳群が知られ、周囲の小丘陵上には多くの群集墳が築造されている。

護摩ケ谷古墳群は割山（護摩ケ谷古墳群）と西側の蛭子山（蛭子群集墳）の群集墳で構成され23基の存在が知られている。このうち護摩ケ谷５号墳（全長23m）と16号墳（全長20m）が前方後円墳の可能性が指摘され残りの古墳は直径９～15mの円墳で、主体部は木棺直葬と推定されている。また、遺跡南側の長者ケ谷１号墳は昭和62年の発掘調査によって直径11.5～13mの円墳で、墳丘上に列石と埴輪列を伴う木棺直葬墳であることが判明した。時期は５世紀後半とされ棺内及び墓壙内からは太刀（２）・鉄剣（１）・鉄鏃（21）が出土している。このように、遺跡周囲には多くの古墳が存在することから当該期の集落遺跡も広い範囲で存在したことは疑いがないが、その様相は明らかにできない。また、古代の遺跡については篠山盆地北側の山陰道沿いに展開する遺跡群（郡衙推定地である東浜谷遺跡や、長柄駅の比定地である下小西の坪遺跡、官衙関連遺跡である西岡屋遺跡など）が知られているが、遺跡周辺の調査成果に目立ったものはない。

周辺での中世集落に関わる調査は近年増加しつつある。おもなものを次に略述しておきたい。

中世の遺跡では調査区の東側に東中道ノ坪遺跡が平成９年（1997）に調査が実施され、12世紀末～13世紀前半の集落が検出されている。八上上遺跡は波多野氏の本拠として知られる八上城跡の北麓に立地する遺跡で、13～14世紀の中世集落が検出されている。初田館跡は武庫川水系の谷中分水嶺付近に位置する戦国時代の居館跡である。この居館の下層遺跡から12～13世紀初頭ごろの瓦器・黒色土器などを含む遺物群が出土している。内場山城跡でも戦国時代の山城跡とともに12世紀代の中世墓などが検出されている。さらに、西紀ノ部遺跡・板井寺ケ谷遺跡においても12世紀の中世集落が検出されている。特に西木ノ部遺跡は平安時代末～鎌倉時代（12末～13世紀）の集落が検出されている。

なお、12世紀頃の遺跡周辺は成勝寺領の「福貴御園」といわれ、その後大覚寺領に伝領され「吹荘」と称したといわれるが、詳細は不明な点が多い。

戦国時代の山城では周囲に遊谷城跡・藤井館跡・西吹城跡・網掛城跡・吹城跡・吹出城跡・岩崎城跡・谷山城・佐幾山城・禄庄城などが所在する。これらの山城のうち、丹波街道に面する谷山城に関しては山頂から小規模な郭が連続するものでやや大規模といえる。これに対して、西吹城跡・網掛城跡・吹城跡・吹出城跡・佐幾山城などでは郭の削平があまく、自然地形と区別が難しい。さらに、他のものも小規模で虎口や郭構造に特徴が認められないことから、これらの城郭群は在地勢力が築城した遺構と考えられる。

一方、亀山（現亀岡）から八上城跡の麓を通り古市へ通じる丹波街道、さらに氷上郡に通じる山陰道沿いの城郭群では先の谷山城が大規模であり、淀山城や内場山城跡のような横堀・帯曲輪を巡らすなどの特徴的な遺構が散見され、遺跡周辺とは対象的である。

【引用文献】

丹南町1994「丹南町史」上・下巻
兵庫県教育委員会2002「東中道ノ坪遺跡」
兵庫県教育委員会1993「西木ノ部遺跡」
兵庫県教育委員会2003「八上上遺跡」

第３章　調査の成果

第１節　調査概要（図版16・写真図版17～19参照）

調査では、弥生時代後期～古墳時代（前期と後期）の自然流路・土器溜り、古代（８～９世紀）の柱穴群、中世の集落（13世紀～14世紀前半）などが検出された。中でも、中世の集落関連の遺構・遺物が圧倒的に多く、広い範囲で見つかっている。なお、それぞれの時代の遺構面は中世段階が上層、古墳・古代が下層から検出される。このため中世の遺構面を第１面、古代以前の遺構面を第２面として検出した。

〔土層について〕（図版３参照）

調査地周辺では耕作土直下から中世の遺構面が検出された。井戸・掘立柱建物などの中世集落関係の遺構が検出されるのは図版３土層断面図では３層上面にあたる。３層以下は基本的に水平堆積であるが、断ち割りを行ったＴ２・Ｔ３・Ｔ４の各地点では腐植土層と締まりのよいシルト質土層が互層に堆積している。これらの層は基本的に還元層であり湧水も認められない。

一方、調査区の東側（調査区東端より65mの範囲）では第３層が確認されない。この範囲では数m～10m前後の単位で、土層が東側に沈む傾斜した堆積が観察される。さらに、中世遺構が検出された第４・25層およびこの下層についても比較的軟弱な土層が見られた。この範囲では土砂に水分が多く、下層は湿地性の堆積層の特徴を示す。また、第４・25層の下、約１m前後のところからは多くの地点で湧水が確認されている。なお、後述する大半の井戸はこの軟弱地盤の範囲に掘削されており、検出面の下１mのところで湧水層が確認されている。

このように西側とは全く異なる堆積の範囲は図版１で示したとおり、調査区の北東方向から南西方向へ向かって広がっており、堆積層の観察からかつて北東から南西方向へ流れた旧流路の埋没した痕跡であることが指摘されている。この旧流路は北東側の丘陵の鞍部から丘陵裾を回りこむように南西方向へ流れていたと推定される。

この軟弱な堆積層は東側と北側の間の丘陵鞍部に延びているが、篠山盆地にかつて存在した埋没河川の名残と考えられる。この埋没河川の東肩は調査区の範囲では検出できなかったが、状況からすると丘陵裾付近まで続く可能性がある。

一方、調査区の中央付近（図版２下層包包含層検出範囲）では第３層直上と第２層の間に層厚さ10㎝前後の包含層が検出された。削平が著しく断面図には図示していないが暗褐色土で中世遺物などを多く包含していた。出土遺物には中世遺物の中でも古い時期の遺物が出土している。ただし、この一群は時期的な混じりもあり一括資料として評価することはできないが、一応は古い段階の包含層として取り扱い報告を行っている。おそらく、水田耕作などによって削平されているが元来は調査区全体を覆っていた可能性がある(1)。

第２節　弥生時代～古代（下層の遺構）

１．弥生時代～古墳

この時期の遺構は土器溜りとして検出できた土坑および溝がある。主なものはSK18・SK19・SD３である。竪穴住居跡などは検出されていないが、北側の現集落側に本体が存在する可能性があり、調査区は集落の南限域に位置すると思われる。

土器溜りは自然流路の西端に沿って出土するもので、第38層の直下などから多数の土器が出土している。これらの遺物は自然流路が埋没する過程で流路内や流路岸の土坑に投棄されたものと推測される。

〔遺　　構〕

SK18

不定形で東西方向に長軸を持つ溝状の土坑である。長さ3.5m、幅1.5m、深さ0.15mの規模を持つ。土坑の長軸は前述の旧河道の方向を向いている。また、SK18や弥生時代の土器が集中的に出土する周辺は、旧河道の西肩部分にあたり、１～４・11などの土器にはまとまりがあるが、その他の土器には破片が多い。おそらく、この時期前後まで旧河道周辺は湿地に近い場所であった可能性が高い。ただし、多数の弥生土器が出土しているが古墳時代の土器細片も混じるため、遺物群に一括性は望めない。

SD３

北東から南西に流れる溝である。規模は長さ3.0m、幅0.4～0.7m、深さ0.2mである。

２．古　　代

調査区西寄りの柱穴には８～９世紀頃の土器を伴う柱穴が数基検出された。ただし、明確にこの時期と判別できるもので建物の並びを復原するには至っていない。また、上記の旧河道周辺からは古代の土器の出土がないため、遺構が立地するのは調査区の中央に限られる。

３．中　　世

調査区全域に遺構が広がるが、地形から見ると現集落が立地する北側に、この時期の集落の中心も存在する可能性が高く、調査区は遺跡中心部から南の外縁部にあたる地点と推定される。検出された遺構は13～14世紀代の掘立柱建物７棟、井戸12基、土坑、溝などである。このうち柱穴は調査区の西端を除いてほぼ全域に濃密に分布するが、復元できた建物は調査区の制約もあってSB１～７の７棟に止まる。このため、実際にはさらに多くの建物が存在した可能性が高く、周辺一帯が集落域に含まれると思われる。

一方、建物の軸方位、溝や井戸の方向はすべて西に傾いており、現在の地割とは軸線を異にしている。この西に傾くという点は調査区内の中世遺跡は共通するが、近代の旧水田の地境もこれに近い軸方位で検出されている。調査区周辺の地割は大正２～６年（1913～1917）にかけて耕地整理（丹南町史編纂委員会『丹南町史下巻』1994年）が実施されて現在の地割となったことが判っている。このことから、中世から近代までの周辺の地割は前者のものと考えられ、概ねN－10°―W前後（SD１を基本とした。）の方位軸を持っていたものであることが調査によって確認できた。

〔掘立柱建物〕（図版４～６・写真図版５～７参照）

掘立柱建物は調査区の東端から40m前後、西端から25m前後の範囲で集中して検出された。ただ、多くの柱穴が見つかった割には復元できた建物が７棟、構造が把握できたのは、そのうちの３棟（SB１～３）に限られた。さらに、面積が最大のSB１で45.4㎡（但し検出範囲内）、SB２で24.9㎡、SB３で14.4㎡などと小規模なものが多い。そして、全体的に検出された柱穴の深さが10～20㎝前後のものが多いことからすると、上面の削平によって失われた柱穴が多いことも原因して、正確な様相把握ができていない可能性がある。

SB１・SB２

調査区東寄りで検出された掘立柱建物で２棟が重なって見つかった。但し、東西方向の調査区の制約があるため、どちらの建物も全容を確認できなかった。柱穴の切合いではＰ９（SB１）をＰ８（SB２）が切るためSB１→SB２という順になる。

SB１は検出区内では東西３間×南北３間（6.3×7.2m）の建物であるが、南辺にP41・42が約0.3m伸びて庇となる。建物の軸方位はN－６°－Wで、SD１・２と同様で西に傾く軸方位を持っている。

建物西辺のP21・42や東辺のＰ５・７・９、南壁のP18・30は前後の間隔や方向から、本建物の柱穴として復元した。ただし、調査区の東西側については幅が0.4～0.8m前後と狭い上に、建物がさらに伸

びる可能性が充分考えられるため、本建物の構造は明確にはできなかった。建物の柱穴は平面円形で、直径20～30㎝前後であるが、深さは10～20㎝前後のものが多い。おそらく上層をかなり削平されていると推定される。埋土は暗褐色シルト質土でＰ４にはわずかに柱材が遺存していた。

SB２は３間×２間（5.8×4.3m）の東西棟で、軸方位はSB１と同一方向である。四周の柱を検出したが、北辺の束柱や東辺の側柱の１基などが検出できなかった。SB１同様、上位面の削平が著しく消失したものと思われる。北辺の側柱１基と西辺の柱１基が検出できなかったが、内部の束柱も検出されるため総柱と評価してよい建物である。柱穴は平面円形で、直径20～30㎝前後であるが、深さは10～20㎝前後のものが多い。

SB 3

井戸１の西側で検出された建物で、梁行２間×桁行３間（3.2×4.5m）の規模を持つ。建物方位はN－85°－Eを向く東西棟である。梁行西辺の柱穴および東側の束柱が検出できなかった。柱穴は概ね円形ないし楕円形のものが多く直径は30～40㎝前後である。柱の深さは20㎝前後のものも含まれるが、総じて周辺の柱穴と同様に浅いものが多い。周辺には多くの柱穴が検出されたため、復元した建物のほかにも多くの建物が存在すると考えられるが、SB１・２同様で、周囲には復元できない建物が多く存在すると考えられる。

SB 4

調査区西側で検出された建物で、南北１間以上×東西２間（３以上×５m、東面庇付）の規模をもつ。ただし、調査区外に伸びるため建物の南側については全様が不明である。建物方位についても梁・桁の区別が付かないため不明であるが、東西棟と仮定すればN－80°－Eを向く建物となる。

SB 5

調査区の西側で検出されたもので、SB４の西隣で検出された建物である。３間×１間以上（7.2m、南北は不明）が検出された。建物の大半が調査区南外側であるため詳細は不明。建物方位についても梁・桁の区別が付かないため不明であるが、東西棟と仮定すればN－82°－Eを向く建物となる。

SB 6

調査区の西端、SE16の南側で検出された建物で、２間×１間以上（５m×1.4m以上）が検出された。建物の大半が調査区南外側であるため詳細は不明。建物方位についても梁・桁の区別が付かないため不明であるが、東西棟と仮定すればN－75°－Eを向く。

SB 7

調査区の西端、SB６の西隣で検出された建物で、３間×１間以上（6.5m、南北辺は不明）が検出された。建物の大半が調査区南外側であるため詳細は不明。建物方位についても梁・桁の区別が付かないため不明であるが、東西棟と仮定すればN－81°－Eを向く。

〔柱　　穴〕（図版６・写真図版６・７参照）

中世の柱穴は大半が円形で直径30～40㎝前後を測るものが多い。深さは10～15㎝程度のものが多く、全体的に上面を削平された可能性が高い。遺構図に図示した柱穴はP67・P87・P89・P76・P173・P174が断面、P84、P234が平断面図である。P67・P87・234は内部から瓦器椀が、P234は青磁碗が出土している。これらは完形に近い個体がそのまま埋納されており、状況から地鎮めと推測される。このほかP89・P76・P173・P174には柱材が遺存していた。大半が柱の根の部分で芯のみが残されていた。

柱穴の分布は掘立柱建物で記述したとおりであるが、さらに詳細に見るとSB１・２（A）、SB３（B）、SB４・５周辺（C）、SB６・７（D）の４グループが確認でき、各グループの間では少し柱穴の密度が疎らになる。このことからみると、調査区内には４つの建物グループがあり、それぞれが屋敷地の単位であったことが推測される。また、これに付随する形でＡには建物の東側にSE４・７・17など、Ｂにはやはり東側にSE１・２周辺があり、ＤにはSE14～16（Ｃは不明、調査区外か）などの井戸群が隣接しており、建物群との関係が示唆される。

〔土坑・溝〕（図版13～15・写真図版16参照）

SK 4

平面楕円形で内部に多量の礫を充填していたが、この礫に混じって丹波焼の甕・土師器皿・須恵器鉢・石鍋などが出土している。礫は人頭大のものから拳大のものまで大小のものが乱雑に詰め込まれていた。土坑の規模は長軸長1.7m、幅0.95m、検出面からの深さ0.32mを測る。底部はやや丸く、断面は船底状となっている。土坑底から柱穴２基が検出された。

SK 8

直径0.85m、深さ0.5mの円形土坑である。小規模で浅い土坑であるが、中位より下部は直径0.5mほどとなる構造である。井戸のSE３・５・６などに隣接して検出されていることや、下部で円筒形の堀方をもつ点からすると、井戸の可能性もあるが湧水層に達していないため土坑で報告した。

SK 9

溝状の浅い土坑である。検出範囲での規模は長さ6.8m（検出範囲）、幅0.6～1.6m　深さ0.1～0.2mの規模を測る。検出された形状も部分的に不定形で、範囲も不明確な箇所があるなど一定の形状を持たない。

SK10

１辺1.19m前後の方形を呈する土坑である。

SK11

調査区中ほどで検出された円形土坑である。直径0.7～0.8m、深さ0.1m前後の規模で埋土には炭が若干混入していた。

SK12

調査区西寄りで検出された楕円形土坑で、長軸1.1m、幅0.65m、深さ0.2mの規模を測る。

SD 1

調査区の東端で検出された溝で調査区を南北に横断して検出された。幅1.2～1.5m、深さ0.3～0.4mを測る規模で、N－10°―Wの方向に南流している。西側のSD２や掘立柱建物１と同様に西側に軸方位を持つ。このことから中世段階の周辺地割がこの方位であったことが推測される。

SD 2

調査区の東端で検出された溝で、調査区を南北に横断して検出された。検出長さ6.7m、幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.15mの規模である。SD１と同様集落の西側を限る区画溝の可能性がある。溝の軸方位はN－20°―Wで、底のレベルからすると南流する可能性がある。但し調査範囲での高低差は微細なものであるので、流れの方向については結論できない。

〔井　　戸〕（図版７～12・写真図版８～15参照）

井戸は12基検出された。大きくは円形（SE１・３・７・14・15・16・20）を呈するものと、方形（SE２・５・６・17）を呈するものがある。（ただし、SE13は近世に下るもので、部分検出のため形状は不明）

SE 1

調査区中央の南側に検出された井戸である。南半分は調査区外となる。掘方は平面楕円形で、規模は最大径３m、深さ1.35mを測る。井戸底に曲物を２段組んで水溜めとする。掘方の掘削はロート状におこなわれ、上層は広く、下部は曲物の範囲のみを掘削していた。

水溜となる曲物は側面に円礫を挟んで安定させており、上端には木枠材（W21～W24）を方形に組んで水溜の仕切りとしていた。この木枠の周囲には直径３～５㎝程度の円礫を敷き詰めて水処理のための工夫がなされていた。さらに、埋土の堆積からすると井戸上層（水溜より上側）は廃棄時に井戸側を破壊したと推定され、掘方に角礫が散乱する。状況からすると石積みの井戸側であった可能性がある。

内部からは丹波焼甕の破片が出土しているものの、小片であることと井戸上層から多く出土している

ことから考えて、井戸が廃棄される時点で混じったものの可能性が高い。

SE 2

SE 1 の北側に検出された井戸である。平面方形で最大長1.6m、深さ1.55mの井戸である。内部は井戸廃絶時に井戸側を抜き取ったと思われ、東辺の側板のみが斜めに倒れかかるように残されていた。

この側板は壁に沿って検出されている状況を見ると、元々は井戸側の内面に側板を方形に巡らせていたものと推定される。埋土からは瓦器椀・皿、須恵器鉢などが出土しているが、いずれも混入と考えられる。

SE 3

SK 4 の東隣に検出された。平面円形の井戸で底に曲物を据え水溜めにしていた。最大径1.6m、深さ1.45mを測る。井戸 1 同様、上層は廃棄時に井戸側を除去するために掘削が行われ、瓦器椀などの土器が出土している。水溜内側の底部からは板材が出土したが、これらの板材は上から転落したものと推定される。周囲や内部に礫が観察できないので素掘り井戸であった可能性が高い。

SE 5 ・ 6

平面方形を呈する井戸でSE17と共に近接して見つかった。SE 5 は長辺1.5m、短辺1.2m、深さ0.6mで、内部に須恵器甕・瓦器椀が捨てこまれていた。内部から土師器皿・瓦器椀・白磁皿・丹波焼擂鉢・須恵器甕片などの土器が出土している。SE 6 は 1 辺1.2m前後、深さ0.4mを測る。内部からは瓦器椀などが出土している。

これら 2 基の井戸は掘削深度が他の井戸に比べ極端に浅く、井戸底には若干の水の湧出が認められるものの、湧水層には達していないことから、井戸の掘削を途中で放棄した可能性がある。一方、規模・形状などからすると隣接のSE17は最後まで残され、井戸として機能したのであろう。

SE 7

調査区の東寄り、北側の壁際で検出された井戸で、北半分は調査区外に伸びている。検出範囲では長軸3.0m、深さ1.6mを測る。上部に方形の木枠を組み、西側を石組みで補強していたと推測される。石組みは多くが抜き取られ破壊されていたが、内部に若干の石材が残されていた。検出面より1.0mほどで湧水が認められ、この湧水のあたりから特に壁面が軟弱で、調査中も崩落を繰り返した。埋土に混じって土師器皿・堝、丹波焼甕などが出土している。

SE14～16

調査区の西端で検出された井戸で、いずれも素掘り構造である。 3 基は近接するが、SE15・16は切り合っており、SK16→SK15の順と考えられる。

井戸の規模はSE14が長軸長3.4m、深さ1.1mで、SE15が長軸長3.0m、深さ1.0m、SE16が長軸長1.5m、深さ0.9mをそれぞれ測る。いずれも湧水層には達しておらず、埋土は井戸底までよく締まったシルト層が堆積している。おそらく井戸掘削を行ったものの湧水層に行き当たらなかったことから、放棄したのではないかと推測される。

SE17

調査区北側の壁際で検出された井戸である。規模は 1 辺1.4m、深さ1.4mで、壁面を垂直に掘削する。井戸底に角材を組み合わせた方形の木枠（W25～W28）を据えて、内部に丹波焼甕（148）の破砕した破片を敷き詰めていた。木枠は両端に組み合わせのための枘を切る。材は井戸 1 の木枠とほぼ同規模であるが、枘の長さ 3 ～ 4 ㎝ほどと井戸 1 に比べやや簡略なものである。甕片は 1 個体の甕を破砕したものであるが、底部片を含まないものであった。このため、もともと井戸側として利用された甕を転用し破砕してこの井戸の水溜めとしたことが推測される。

さらに、掘方が狭小であることを考えると、この井戸が素掘り井戸であるとは考えにくい。おそらく井戸側にはSE 2 のように側板が存在した可能性が高い。このためこの井戸でも廃棄時に破壊され、側板などの井戸部材は抜き取られたのではないかと思われる。

SE20

調査区の東端で検出された井戸で、直径1.5前後、深さ1.2m以上を測る。井戸底は検出していないがおそらく掘削深度が井戸底に近いものと推定される。ただし、湧水が激しくさらに瞬時に壁が崩落したため井戸底までの充分な調査が実施できていない。埋土についても軟弱なシルト質土で、井戸底では泥土状の堆積が認められた。また、井戸底には植物遺体などが多く含まれていた。

内部からは土師器皿（202）、呪符木簡（W18）、木片（W19・W20）、板材（W35）などが出土した。木簡W18には「南無大日如来」の墨書がある。板材はW35のほかいくつかの端材が出土したが腐朽が著しいものばかりであった。ただし、W35を含めこれらの板材の出土からすると、元々この井戸は板材の井戸側をもった木枠構造の井戸であったことが推測される。おそらく井戸廃棄の段階で板材の大半は持ち去られたものと考えられる。

第3節　小　　結

調査の結果、篠山川西岸に立地する弥生時代後期末・古墳時代・古代・中世の各時代にわたる集落遺構を検出した。古墳時代は庄内期と後期段階、古代は８～９世紀前後、中世は13世紀～14世紀前半前後の時期の遺構が出土している。

また、これらの時代に先行して調査区東側には古篠山川の支流が流下し、付近はこの河床に位置していたことも判明した。河川は弥生時代後期にはほぼ埋没していたようである。さらに中世の段階になると篠山川の河床が下がり、近代には用水不足に苦しむ場所であったことが伝わっている。おそらく、中世集落に伴う井戸もこのような水不足を補うために掘削されたのであろう。なお、井戸はこの旧河道が通る場所に集中している。その一方で西側でもSE14～16のように井戸掘削を試みているが湧水層に行き当たらないために掘削をあきらめたものもあった。

註

１．立命館大学 青木哲哉氏のご教示による。

第４章　出土遺物

第１節　弥生時代～古代

下層から出土した遺物には弥生時代～古墳時代のものが含まれるが、層位で分離できるものではなく、混在した状態で出土している。また、一部中世の下層包含層からの混りもあるため、中世のものは整理段階で分離して報告した。

１．弥生時代（図版17・18・写真図版21・22参照）

［土　　器］

この時期の土器には壺（１・２・６・８～12）・甕（４・５・７・18～23）・高杯（３）・蓋（14～16）・鉢（17）などがあり、大半が包含層出土である。古墳時代の土器に混じりが著しい。SK18の土器溜りからは１～６・10～12が出土している。

壺１は厚手の個体である。口縁部を二重口縁状にし、体部は球形になる。外面に縦ハケ、内面は粘度紐の接合痕跡が顕著である。壺２はラッパ上の口縁部を持つ、小型の壺である。器表に小規模な黒斑が観察される。３は高杯で脚部の破片である。中実で４方向の円形透かし穴をもつ。４は甕で口縁部をくの字に外反させ、体部はやや長胴となる。外面に右上りの平行タタキ痕跡が残される。５は同じく甕で二重口縁となる。内面胴部にケズリ調整、外面には体部上半に縦ハケ、中位に横ハケを施す。６は壺で口縁部がすぼめた頸部から直立気味に立ち上がり、上端でラッパ状に開き、端部は外方に面を持つ。胴は肩部が上位に位置するが、球形に近い器形となる。７は甕で口縁部を丸く立ち上げ、端部は丸くおえる。厚手の個体である。外面は縦ハケ、内面は縦方向に指ナデで器面を調整する。８は壺で二重口縁壺であるが、摩滅が著しく調整は不明である。10は壺で下ぶくれの器形となり、口縁部外面に２条の疑凹線を施す。外面はタテ方向のミガキ。内面にはナデと指頭痕跡が観察される。体部の粘土紐接合痕跡が顕著で、黒斑が胴部下半に観察された。11は壺で下膨れ状の体部を持ち、口縁部には６条の疑凹線、体部は縦方向のミガキ調整を施す。体部下半に異なった胎土を使用しており、文様を意識していると思われる。

壺12は玉葱形の体部からラッパ状に開く口縁部。端部を上方につまみ丸くおえる。外面上半は縦方向のミガキ、下半は横方向のミガキ調整が施される。13は高杯で器表が荒れ、調整は不明である。14～16は蓋ですべて同一の器形で壺蓋と思われる。天井部につまみを持つ。17は鉢で手づくね成形のもので、内面に指頭痕跡が顕著に残される。

18は甕で直立して立ち上がる頸部をもち、卵頭形の器形となる。外面にタタキ痕跡、内面はケズリなどで丁寧にタタキ痕跡を消す。全体に体部の摩滅が著しい。19は甕でやはり摩滅の著しい個体である。外面右上がりのタタキ痕跡、内面は調整不明。口縁部を欠損する。

20は甕で土師器壺の底部細片外面に縦ハケ調整を施す。また、黒斑が胴部下半に観察される。21は甕でラッパ状に開く口縁部、体部はやや長胴形になる。外面タテ刷毛、内面口縁部付近は横ハケ。粘土紐接合痕跡が顕著である。22は甕で二重口縁を持つ。内面胴部にケズリ調整、外面には縦ハケが観察される。23は甕では二重口縁を持つ。外面は全体的にタテ刷毛、内面は部分的に横ハケ調整を施している。

［石 製 品］（図版32・写真図版39参照）

石器は、８点について報告する。Ｓ１はサヌカイト製の縦長剥片で、背面に大きく自然面を残す。加工・使用の痕跡は認められない。Ｓ２・Ｓ３は石斧である。Ｓ２は両刃で丁寧な研磨加工を施している。Ｓ３は石斧の未製品である。Ｓ４は砥石で使用による破損後に廃棄されたようである。Ｓ５～７は砥石である。石材は全て異なるが、良く使用されている。Ｓ８は破損が著しい石鍋（一部）で、写真図版のみ報告する。

２．古墳時代（図版19・20・写真図版23・24参照）

この時期の土器としては須恵器については杯身（29・33～35・36・39）・杯蓋（24～28・30～32）・高杯（38）・高杯蓋（37）・鼈（40）・壺（41）・甕（42）があり、土師器については小型丸底壺（45～47）・甕（48～52）・甑（43）・円筒埴輪（44）などが出土している。このほか井戸１に混入した土師器鉢（104）がある。

須恵器杯蓋は天井部と体部の境に稜を持つ24～26・28と、やや強い屈曲を持つ27、丸く折れる30～32がある。

24は低平な天井部で、口縁端部が内傾し面を持つ。25はやや丸く隆起する天井部を持ち、天井と口縁の境には凹線状の稜をもち、口縁端部は内傾して面を持つ。26は水平な天井部で口縁端部に内傾する面を持つ。27はやや丸く隆起する天井部を持ち、天井部と体部の境は単なる屈曲となる。28はやや水平な天井部を持ち、口縁端部が内傾する面を持つ。30はやや膨らむ天井部が丸く屈曲しながら下り、天井部と体部の境は屈曲となる。31は水平な天井部を持ち口縁部を丸く尖り気味におえる。32は丸く天井部が膨らみ体部へと湾曲しながら下る。口縁端部はやや尖り気味におえる。

杯身は個体数が少ない。29は器壁が薄く口縁端部に内傾した面を持つ。外面底部は回転ヘラ削り、上半は横ナデ調整を施す。たちあがりは直立気味で端部に内傾する面を持つ。33は底部が平たくやや厚手の個体である。たちあがりは基部が厚手でやや内傾する。34は内面にカーブするたちあがりを持つ。35は底部から体部の上方まで回転ナデを施し、底部にヘラ記号が観察される。

36・39は杯身である。かえりのない、杯Gである。

37は高杯の蓋で、扁平なつまみをもつ。38は高杯の脚部片である。三角形の透かし穴がみられ、２条の波状文と１条の沈線文を持つ。

40は鼈である。口縁部を欠くがややラッパ状に開く口縁部を持つと推定される。底部は粗い手持ちヘラ削りを施すが、肩部には沈線が１条観察されるのみである。41は壺の底部片である。肩部に粗い波状文と数条の沈線が施され、底部にはタタキ痕跡が残される。42は須恵器甕片である。口縁部を縁帯状に肥厚させ頸部をくの字に折る。外面の体部にはタタキ痕跡が観察される。

43は甑である。破片であるため復原実測を行ったが法量はやや不安が残る。外面には縦方向のハケ目が施され、内面にはケズリ調整が観察される。底部の穿孔は破片のため詳細は不明である。

44は円筒埴輪の断片である。タガおよびその直下のあたりと考えられる。タガの下には粗い縦ハケが観察される。

45～47は小型丸底壺である。45・46は内外面は器表が荒れ調整は不明である。45は口径6.8㎝と小型の個体である。46は口縁が直立的で球形の体部を持つ。47はラッパ状に開く口縁部と球形の体部を持つ。外面には縦ハケ調整が観察される。

48～52は甕である。48はハの字に開く口縁部で内面にはケズリ調整を施す。49は口縁端部を丸く肥厚させる、外面にわずかにハケ目が観察され、内面は頸部より下に横方向のケズリ痕跡が観察される。50はややすぼまった口縁を持つ個体である。51は外面にハケ目痕跡、内面には板ナデ状の仕上げ調整が施される。52は外面に縦ハケ、内面には斜め方向のハケ目が観察される。

３．古　　代

この時期の遺物も明確な遺構に伴うものは少ないが柱穴から比較的多く出土している。この時期の遺物はＰ185の土師器杯81・82、須恵器杯Ｂ（83）P186の杯Ａ（84）、P196　杯Ｂ（85）SE14の須恵器杯Ｂ（179）、同杯（180）などがある。須恵器杯A81は体部が直線的に立ち上がる。時期は奈良時代であろう。同杯82は外開き気味で回転ナデの痕跡が明瞭に残され、平安時代のものと考えられる。須恵器杯Ｂ83・85・179は奈良時代後半～平安時代のものである。須恵器杯180は杯の口縁部片であるが詳細は不明である。

第２節　中世（図版21～31・写真図版25～38参照）

今回の調査で最も多くの遺物が出土した時期である。特に調査区の東から中ほどにかけて集中して出土しているが、この点は遺構の分布に比例したものとなる。中世の遺物は瓦器椀・皿、須恵器鉢・椀・甕、土師器皿・堝・甕、白磁碗・青磁碗、丹波焼甕、木製品の曲物・下駄・漆碗、石製品の石鍋などがある。

１．柱　　穴（図版21参照）

掘立柱建物に関係する柱穴出土遺物は多くはないが次のとおりである。SB２のP６から瓦器椀(53)、SB３のP99から瓦器椀（72）およびP82瓦器椀（59）、SB４のP140から土師器小皿（79）、SB６のP213から瓦器椀（87）、SB７のP227から瓦器椀（88）が出土している。

このほか柱穴からは次のような遺物が出土した。P56から瓦器椀（54）、P62から土師器小皿（55）・同皿（56）、瓦器椀（57・58）、P84から青磁碗（60）、P85から土師器小皿（61・62）、P86から瓦器皿(63)、P87から土師器皿（64）・瓦器椀（65～68）、P92から土師器小皿（69）・同皿（70・71）、P104から瓦器皿（73）、P108から須恵器鉢（74）、P110から瓦器椀（75・76）・土師器堝（77）、P118から瓦器椀（78）、P171から土師器小皿（80）、P185から土師器杯A（81・82）・須恵器杯B（83）、P186から須恵器杯A（84）、P196から須恵器杯B（85）、P199から土師器小皿（86）、P234から瓦器椀（89）、P239から土師器小皿（90～92）・同皿（93・94）、P256から瓦器皿（95）、P263から土師器小皿（96）が出土した。

出土した遺物にはさまざまものが含まれるが、このうちP185の土師器杯A（81・82）・須恵器杯B(83)、P186の土師器杯A（84）、P196の須恵器杯B（85）は古代のものである（前項参照）。

そのほかの中世の遺物ではP110の瓦器椀75・76のように13世紀前半のものと、その他の簡略化が進んだ13世紀後半以降のものが存在するようである。ただし、瓦器では外面にミガキ調整が観察される個体は認められないので、全体の中心時期は概ね13世紀後半～14世紀前半にかけての遺物が大半を占めているようである。

２．井　　戸（図版22～26・29・30参照）

今回の調査で出土した遺物の大半を占めるのが井戸から出土した遺物である。土器類では埋め戻し時に土砂に混じった遺物群が多く含まれ、木製品では井戸側や水溜めのための木枠材や曲物などが中心である。

SE１

出土した土器には土師器堝（97・98）、瓦器椀（99～103）、白磁皿（110）、青磁碗（111）、須恵器鉢(105・106)・丹波甕（107～109）がある。木製品には木札片３点（W15～17）と井戸側の木枠材４点(W21～24)、水溜に使われた曲物５点（W10～14）がある。

土師器堝は口縁部を玉縁状に仕上げ、体部をくの字に折る。外面に平行タタキ調整し、内面には円形のあて具痕跡が確認される。

瓦器椀は体部がやや丸みを帯び、高台径（102・103）は小さいが台形に近い断面形を呈する。口縁部外面を横ナデ調整するが、外面にはミガキ調整が観察されない。外面体部下半には指頭痕跡が顕著に残る。内面には間隔の粗いミガキ調整が観察され、見込みには雑なジグザグ状の暗文（102・103）が施される。

須恵器鉢は105が口縁部上面をやや拡張し、106は上下に拡張した上で上面を丸くナデる。丹波焼甕107～109はN字状口縁が退化して上面が軽く凹線状になる。器形からすると稲荷山窯跡などに併行する製品である。110は白磁皿の体部片、111は青磁碗である。このほか、土師器鉢104は古墳時代のものである。

木製品も多く出土しているが、大きくは井戸側ないし水溜めのためのものと、その他のものに分けら

れる。W10～W14は井戸下層に据えられた水溜めのものである。

W13は直径47.0㎝、深さ29.0㎝の円形の曲物で１枚の薄板を曲げて、樹皮（桜の皮）などで閉じ合わせ、外面の上下に補強のための薄板を重ねている。さらに閉じ合わせ部に薄板を縦方向に差し込んで、合せ部を補強する。さらに、内面には円形に折り曲げるための細かな切り目が観察される。さらに上端付近には直径２㎜前後の穿孔が数箇所観察される。

W10～12についても同じ構造を持つが、高さ5.2～9.6㎝程度の浅い製品であるため、上下や合わせ目の補強材は用いられない。

木札W15～W17はいずれも断片である。このうち、W16・W17の頭部の両端に切り欠きが認められるもので、呪符木簡や付札の可能性もあるが墨書などは確認できない。

木枠材W21～24は両端に枘を切ったもので、表面にはチョウナ痕跡が顕著に観察される。井戸の水溜めに据えた曲物の上に木枠材として据えられていた。この上に井戸側の木枠が乗せられていたものと考えられる。

SE 2

出土した土器には上層遺物である土師器小皿（114～116）・同皿（117･118）・瓦器椀（119）と、確実に井戸内部から出土した瓦器椀（120～135）・瓦器皿（136）・須恵器皿（137）・同鉢（138）がある。

土師器小皿はすべて手づくね成形で平底になる。土師器皿117･118はやや器高が高く口縁部をナデて尖り気味におえる。

瓦器椀は体部が直線的に外開き気味（120・128）になるものが少数で、大半が丸く内湾しながら立ち上がるもので占められる。法量は口径10.7～14.0㎝、器高4.2～4.5㎝、高台径4.5～5.7㎝で口径11㎝代前後のものが中心を占める。高台径を明らかにできるものは６個体であるが、135以外は５㎝以下のもので占められる。

口縁部のナデ調整が１段のもの（120・121・124・127・129・132～135）と２段以上のもの（122・123・126・128・131）があるが、歪みが認められるものが多く仕上げは簡略化されている印象が強い。内面は全体を横方向にナデ調整し、底部については一定方向のナデ調整を施している。ただし、127では底部から上方向に向けて板状の工具を用いて板ナデ調整している。また、ミガキ調整が外面に観察されるものはなく、見込みにはジグザグ状暗文および、省略が進んだ133のようなものも認められる。また、体部のミガキも間隔が広く121・127では形式的に施した程度にまで簡略化が進む。もちろん、ミガキ調整は分割がなく全て全周するもので、勢いよく施している。高台は130のように断面台形を意識するものもあるが、総じて退化しており痕跡程度のものが多い印象である。瓦器皿は底部から丸く立ち上がる体部を持ち、口縁部を丸くおえる。内面及び外面体部にかけて横ナデ調整を施す。ミガキの痕跡は観察されない。

須恵器小皿137は糸切り皿で体部が外開きで直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。須恵器鉢138は口縁端部が上方にやや拡張されるもので、器壁は厚さ４～５㎜前後とやや薄い。

SE 3

瓦器椀（112・113）および水溜めに使用された曲物（W29）がある。瓦器椀は体部が丸く内湾気味になるもので、内面にのみ粗いミガキ調整が施される。ミガキの間隔は広く省略化が進む。口縁部付近は横ナデ調整が施されるが体部下半は未調整で、指頭痕跡が観察される。112は横ナデ調整によって体部中位が屈曲する。口縁端部は112がやや尖り気味であるが、113は丸くおえる。

SE 5

土師器皿（151～153）・瓦器椀（154～162）、須恵器鉢（164）・同甕（165）・青磁皿（163）がある。

土師器皿はいずれも手づくねの製品で、152は口縁端部を外反させながら、尖り気味におえる。京都系土師器の可能性がある。153は器壁が５～８㎜前後と厚手の個体である。

瓦器椀は体部が丸く内湾気味の154・157～162と直線的な155・156がある。法量は口径10.9～12.9㎝、

器高4.7～4.8㎝、高台径4.7～5.7㎝で、口径の中心は11㎝代前後にある。内面のみに間隔の粗いミガキ調整が施される。見込みの暗文は154・155のようにジグザグ状暗文が退化したものや、160のように渦巻状のものがある。

須恵器甕165は胴部の破片である。葉脈状の原体を用いて外面をタタキ調整しており、硬質に焼成された個体である。

SE 6

瓦器椀（139～141）がある。体部は直線的な139と中位で軽く、くの字に折れる140、丸く立ちあがる141がある。ミガキ調整は内面のみで見込みの暗文は平行暗文である。

SE 7

土師器小皿（166）・同皿（167）・同堝（170・171）・瓦器椀（168・169）・須恵器鉢（172・173）・同甕（174・175）・瓦質土器火鉢（176）・青磁碗（177）がある。このほか丹波焼甕（149）があるが、SK４で報告する。

土師器小皿166は手づくね皿で、外面に指頭痕跡が観察される。体部の立ち上がりがほとんど認められずコースター状の器形を持つ個体である。土師器皿167も手づくね成形の製品で、内面にハケ状の調整痕跡が顕著に観察される。体部上半のナデ調整によって口縁部が大きく外反した器形となる。外面体部下半は未調整で指頭痕跡が顕著に観察される。土師器堝170はやや硬質の製品で口縁部を直立させて肩部が張り、体部が直立気味でやや丸底になる個体である。口縁部は玉縁状に肥厚させ、外面には密な平行タタキ痕跡が観察される。

瓦器椀168・169は器表が荒れているが、内面のみにミガキ調整が施され、体部は丸く立ち上がる。

須恵器鉢172・173は口縁部を上方に肥厚させる個体で、172はさらに端部をナデて丸く仕上げる。須恵器甕はどちらも口縁部の小破片で詳細は不明である。外面にタテ方向の平行タタキ文が観察される。

瓦質火鉢176は外開きの体部を持ち、口縁部を玉縁状にする。ただし、器表の摩滅のため調整などの詳細は不明である。

青磁碗177は龍泉窯系の青磁碗である。外面に線描きの蓮弁文が表現される。

SE14

須恵器杯（180）・須恵器杯B（179）がある。この他、木製品の下駄（W30）・井戸側材として転用された部材（W31～33）がある。ただし、須恵器杯180は口縁部の小片、須恵器杯B179は底部の小片で、いずれも古代のものである。

下駄W30は指し歯下駄である。鼻緒の穿孔が頭部の中央と歯の間の両端にある。厚手で稚拙な作りの製品である。頭部の右側が著しく磨耗するため左足用のものであったことが推測される。また、上面は磨耗が著しく欠損が各所に認められることから見ると、長期にわたって使用されたものと推定される。W31・32は建具などの材を井戸側材に転用したものと考えられる。大小はあるがどちらも弧状の板材部分と断面方形の柄を持つ。W33についても形状は酷似するが、板部の縁が弧状をなさず、柄の部分も作りが雑な印象である。また板部の弧状になる部分の縁は面取りしている。

SE15

土師器堝（183）・丹波焼甕（181）・青磁碗（184）がある。このほか、木製品の部材W34がある。土師器堝183は口縁部の小片である。鍔を欠損するが形状からは15～16世紀に下る製品と考えられる。丹波焼甕181はN字状口縁部の退化した形態で、内面上端が凹線状になる。青磁碗184は外面に簡略化した蓮弁文が確認される。W34は板材であるが腐朽が著しく詳細は不明。板面にチョウナ痕や穿孔が認められるため、やはり建築材や建具の部材を転用したものであろう。

SE16

丹波焼甕（182）がある。このほか、木製品の木地椀（Ｗ１）・不明木製品（Ｗ５・６）・転用材（Ｗ７～９）、および竹製品（Ｗ２～Ｗ４）がある。Ｗ７は建具ないしは建築部材の転用材でＷ８は桶の転

用材と考えられる。W９は井戸側の桟などに使われた部材と思われるが、長さ30.6㎝ほどのところで切断されている。

丹波焼甕182は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部はN字状口縁部の退化した形態で、内面上端が凹線状になる。

木地椀W１は口縁部の破片で、口径15.2㎝、口径3.0㎝と小型の製品である。腐朽が著しいので器表の状態は判別できないが、漆椀であった可能性も残されている。丸く内湾しながら立ち上がる体部をもち、口縁下を少し屈曲させる。W２～W４は竹製の製品の部材である。いずれも竹の表面側を図示した。W２は材の中ほど付近の４箇所に間隔を置いて直径２～３㎜の穿孔が認められる。図の上端のみが端部で、他の端部はすべて欠損部である。W３も同様に間隔を置いて３箇所に穿孔がある。端部はすべて欠損部となる。一方、W４では残存部の端に４箇所（１箇所は端部に痕跡が残る）の穿孔が菱形に穿たれ、図の上方には削り取られているが節の痕跡が残される。

W５は両端に穿孔を持つ材で、端面はすべて生きている。材の表面には仕上げの削りが施される。W６は中ほどやや下側を一段窪ませ、貫通しない直径１㎜前後の穿孔を５箇所持つ。元々は本部材と直行方向に別の部材を接合させていたものと思われる。

W７は大型の板材で片面のみ円弧状の切込みを入れ、片面方向に面取りを施している。図示した板面の右側には擦痕が顕著に入り、貫通しない直径１㎜ほどの小穴が端面に沿って確認される。これらの小穴は板面に他の部材を接合した痕跡とも考えられるが詳細は不明である。W８は図の下端が柄のような形状になるものである。板面には直径１～２㎜前後の小穴が７箇所観察される。W９は図の上端に枘を削り出す角材で、桟などに使用された建築部材と思われる。表面には粗いチョウナ痕跡が残される。

SE17

土師器小皿（185・186）・土師器皿（187）・瓦器椀（188～196）・須恵器鉢（197・198）・須恵器甕（199）・丹波焼甕（148・SK４でも破片が出土）がある。このほか、井戸の木枠材（W25～28）の４点がある。

土師器小皿は体部が小さく外方に立ち上がるもので､底部は糸切底になる。土師器皿187は手づくねで斜め上方に広がる体部を持つ。口縁部は１段ナデで端部をやや尖り気味におえている。

瓦器椀は体部が直線的（188～190）に開くものと、丸く内湾気味（191～196）のものがある。法量は口径11.0～12.0㎝、器高4.0～4.5㎝、高台径3.9～5.6㎝である。188・189については口径が不明であるが、他のものは口径11㎝代のもので占められ、高台径には３～４㎝代の190・191・196と５㎝代の192～195の２種がある。

口縁部のナデ調整は１段のもので占められ、器形は全体に歪みが認められるものが多い。内面は全体を横方向にナデ調整し、底部については一定方向のナデ調整を施す。ただし、189・190・195では底部から上方向に向けて板状の工具を用いて板ナデ調整の痕跡が観察される。最終的な調整であるミガキ調整は外面に観察されるものはなく、内面見込みにはジグザグ状暗文および、省略が進んだ192のようなものも認められる。また、体部のミガキは間隔が広く195のように口縁部には施さず、全体的にも形式的に施した程度にまで簡略化が進んだものが含まれる。もちろん、ミガキ調整には分割がなく全て全周するもので、勢いよく施している印象が強い。ただし、体部が直線的に立ち上がる189・190では比較的ミガキ調整が密で、189では内面のナデ調整が顕著に観察される。一方190ではヘラ状工具による細線が底部から口縁部にかけて粗く施される。また、ミガキ調整に分割線は確認できないが全体を観察できる192～195ではミガキの区切りが不規則な場所に観察される。

高台は195のように断面台形を意識するものもあるが、総じて退化しており痕跡程度のものが多い印象である。

須恵器鉢197・198はいずれも口縁部の小片である。どちらも口縁部を肥厚させ上方向にやや拡張する個体で、内面がやや凹状になる。甕199も口縁部の小片で、口縁部を湾曲させて外反し、外面に面を持つ。

丹波焼甕（148）は砕いて井戸底に敷き詰めていたものである。甕は口径44.4㎝で底部を欠損している。体部下端には焼成時の焼台として置かれた陶片が釉着する。口縁部はN字状が若干退化したものであるが三本峠北窯跡の遺物群に併行すると考えられる。粘土紐の貼り付け痕跡は顕著に観察され、内面頸部には縦方向のナデ痕跡が観察される。

SE20

出土した遺物は土師器皿（202）、木製品である呪符木簡（W18）・木片（W19・W20）・板材（W35）がある。

土師器皿202は手づくね皿である。体部上半を横ナデ調整し口縁端部をやや尖り気味におえる。

木製品のW18は呪符木簡で「南無大日如来」の墨書が認められ、頭の両端に切込みがある。法量は長さ23.3㎝、幅2.2㎝ を測る。木簡の下半の損傷が激しいため判読できないが、下半にさらに墨書文字が続くことは確実と考えられる。木片W19はW18に酷似した板材片であるが損傷が著しく、呪符木簡の可能性が高い。W20についても同様であるが小破片であるため詳細は不明である。板材W35は長さ99.9㎝、幅14.7㎝、厚さ2.1㎝の大型の板材である。状況から考えて井戸側材として使用されたものと思われるが、両面に擦痕が観察されることから、建築部材を井戸側材として転用したものと考えられる。

３．土坑・溝（図版23・24・26参照）

SK 4

土師器皿（146・147）・須恵器鉢（142～145）・丹波焼甕（148～150）・石鍋（Ｓ８）などが出土している。

土師器小皿146は歪みが著しいがコースター状の器形をもつ個体である。皿147は薄手のつくりで体部下位を屈曲させ、口縁部を外方に開く器形を持つ個体である。口縁端部のナデ調整は丁寧ではないがいわゆる京都系土師器の皿の範疇で考えられる。

須恵器鉢142～145はいずれも口縁部を肥厚させる個体である。ただし、いずれも口縁部を単に上方に拡張し肥厚させるだけではなく、その後に端部をナデて丸みを帯びる器形に仕上げている。この結果、142・145では口縁端部が丸くなり内面に軽く内湾した形状となるが、144では口縁端部のナデが強く、押しつぶされたような器形となる。さらに、143では端部のみが丸く押しつぶされ内面側に凹線状の窪みが形成されている。

丹波焼甕は148がSE17と、149がSＥ７と、150がSＥ５とそれぞれ同一個体の破片を出土している。148は肩部がくの字に折れて、すぼまりながら口縁部につながる。口縁部は上端を外反させて、端部を上方につまむ。149は胴部径が体部の中ほどよりやや上で最大になる個体で、全体的にはやや丸く屈曲する。石鍋Ｓ８は小破片で重さ74gを測る。

SK11

土師器小皿（200）・同皿（201）が出土した。土師器小皿200は糸切り底の個体で、小さく伸びる体部をもつ。全体に器壁は４～５ ㎜ 程度と厚手の個体である。同皿201は手づくねの製品で底部から湾曲して立ち上がる体部を持つ。

SD 1

瓦質土器火鉢（203）が出土した。器表が荒れており外面のミガキ調整などは観察できないが、状況からみると外面は平滑に仕上げられる。

４．下層包含層（図版27参照）

調査区中央付近には第３章で示したとおり、中世の包含層が部分的に検出された。この層からは遺存状態の比較的よい遺物群が出土している。一括性はないが比較的古い遺物が多数含まれているので、下層包含層と呼称して本稿ではまとめて報告しておきたい。

下層包含層の出土遺物のうち、図示した遺物には以下のものがある。土師器小皿（207～209・211）・

皿（206）・堝（207～209・211）、瓦器皿（212～214）・椀（215～222）、須恵器椀（223・224）・鉢（225～227）である。

土師器小皿204・205､同皿206は手づくねの製品である。土師器堝は甕型のものと堝型のものがある。甕型のものは口縁部をくの字に外反させ端部がやや丸くなる（207・211）ものと、端部上面に面を持つ（208）ものがある。全体的には外面に横方向の平行タタキを施し、体部は下膨れ状のプロポーションをもつ。内面はあて具痕跡を残すものの板ナデないしナデによって器面を粗く整えている。堝型のものは口縁部の小片であるがどちらも口縁端部を肥厚させ、209では内傾気味に上方向に拡張し、210では丸くおえている。

瓦器皿はいずれも器高の低い個体で、底体部の境は丸く湾曲して立ち上がる。口縁部を横ナデし、体部下半以下は未調整である。瓦器椀は口径の小さい（216～218）ものとやや大型の（220～222）がある。いずれも外面にはミガキ調整を施さないが、後者は高台がややしっかりした輪高台となり断面形状がハの字に踏ん張る形態である。また、口径14.2～14.6㎝、器高が5.3㎝、高台径が6.0㎝と大きい個体が多い。

須恵器椀223・224は今回の調査で唯一出土したものである。いずれも底部を欠くが体部は開き気味に立ちがある個体で、内外面を粗く横ナデ調整し、口縁端部も丸くおえている。他の出土した小破片で観察する限り底部に高台が観察されるものはないので、図化したものを含め須恵器椀は13世紀段階のもので占められていると推測される。須恵器鉢は225が口縁部を肥厚させ上方に拡張するが、226は口縁端部を内側に折り曲げる個体である。227は体部中位から上半を欠損する個体である。

５．包含層出土遺物（図版28参照）

このほか包含層出土の遺物には中世の丹波焼鉢（238）・擂鉢（236・237）、青磁碗（228・229）・白磁碗（230）染付碗（231）、瀬戸美濃焼ソギ皿（232・233）、棒状土錘（234）・管状土錘（235）や、近世の丹波焼鉢（239）などがある。

丹波焼擂鉢236は口縁部の破片で端部を尖り気味におえる。15～16世紀台の製品と考えられる。237は端部を内側に折り体部がやや直線的に立ち上がる個体で、古いプロポーションを持つ。いずれも内面に１本引きの卸目が観察される。鉢238は端部内面に凹線状の窪みを持つもので、16世紀代の製品と考えられる。

青磁碗228・229は細蓮弁文の碗で、いずれも高台外面に施釉が施されないものである。両者とも内面底部に陰刻による文様が観察される。白磁碗230は第Ⅳ類の碗である。染付碗231は小口径のもので碗C・E類の可能性があるが、底部が欠損するため詳細は不明である。瀬戸美濃焼ソギ皿232・233はいずれも口縁部の小破片で、折縁皿となる。16世紀後半の製品である。

土錘234は半分を欠損する、同じく235は完形のものである。いずれも小型の製品である。

６．近世の遺物（図版26参照）

今回の調査で出土した遺物の内、近世段階に下る製品も若干認められるが、２点を図示した。SE13から出土した染付け鉢の178と包含層出土の丹波焼鉢239である。

SE13

染付鉢（178）が出土している。底部片でハの字に踏ん張る高台を持ち、内面に１重圏線、外面の腰部に縦方向の文様が描かれる。

７．金属製品（図版28参照）

銅片（Ｆ１）１点、釘２点（Ｆ２・３）がある。Ｆ１はSE２、Ｆ２はSD１、Ｆ３はSE１からの出土である。Ｆ１は詳細不明で、Ｆ２・３はすべて和釘である。Ｆ２は頭部を平らに打ちたたき、内側に折り曲げる。

第３節　出土遺物の検討

弥生時代～中世の土器について検討してきたが、ここでは大きく１．弥生時代～古代、２．中世の２項目に分けて出土土器を検討する。

１．弥生時代～古代

弥生時代の土器は壺・甕・高杯・鉢・壺蓋などの器種が見られるが、高杯については細片のみの出土に限られ個体数も僅かである。壺の類には二重口縁を持つものが多く、10・11には口縁部に擬凹線が認められる。壺・甕は外面にハケ目調整ないしタタキ痕跡を残す個体が多い。おおむね布留期～古墳時代前期頃の土師器と考えられる。

須恵器は杯がTK47～MT15形式の個体（24・25・27～29）が最も古く６世紀前半ごろのもの、TK43前後の個体（30～35）、６世紀後半頃のもの、TK46前後（26）の７世紀中ごろのものなどがあるが、５世紀代の須恵器は出土していない。土師器小型丸底壺と甕がある。おおむね５～６世紀代の遺物と考えられる。

律令期の遺物は少数で細片が多いため詳細は不明であるが、おおむね８世紀後半～９世紀ごろの遺物が含まれていると考えられる。出土遺物の年代からは、中世までに空白の時期が存在するが、調査区の制約もあるため全体的にみると弥生時代後期末から９世紀代までの遺物が含まれると考えておきたい。

２．中　　世

次に、中世の出土遺物について器種ごとに見てゆきたい。

瓦　　器

瓦器には椀と皿があるが大半は椀で占められている。従ってここでの分析は椀が中心となる。瓦器椀では既述のように外面にミガキ調整を施したものは認められない。

瓦器椀を観察するとP110の75・76、P227の88、P234の89、下層包含層の220～222などでは椀形が腰の貼る深手の印象を持つ一群を抽出できる。これら個体では内面のミガキは細くかつ比較的密で、丁寧な作りである。口縁部のナデは１段のものが多い。高台は219・222では断面台形を呈し、他のものは逆三角形であるが高台高が高いものが多い。口径は89・221を除くと14㎝代、器高は88を除くと５㎝代となり、他の個体よりも大きくなる。従って、これらを一つのグループとして先ず抽出しこれをＡタイプとしておきたい。

残りの瓦器椀については椀形が直線的ないし体部中位にナデによる屈曲を持つものが多く、口径に対して器高の高いものが比較的目立つ。また、口径は13㎝前後の個体が中心を占めており、高台は逆三角形のものが多い。ただし、高台が全く退化して痕跡のような状態のものや消滅したものはない。そして、内面のミガキの省略が進み、形骸化したものもわずかである。暗文についてはＡタイプを含めてジグザグ暗文を基本とするが、比較的粗いものから渦巻き暗文に近いものまでがある。また、口縁部のナデも１段ナデが多いが２段ナデのものも含まれている。ただ、全体的にはこれらの瓦器椀には大きな形態差はないと考えられるので、一括してＢタイプとしミガキと暗文の状態から細分する。ただし基本的にミガキが密なものは暗文も密なジグザグ暗文を施すが、ミガキが粗いものは暗文の状態も粗くジグザグ文ないしは渦巻き文となる。このため、比較的ミガキおよび暗文が密なものをa、ミガキおよび暗文が粗いものをbとし、さらにミガキの間隔が開いて形骸化したものをcとして細分する。

以上の観点から各遺構の瓦器椀を観察してゆきたい。まずＡタイプに属する瓦器椀が出土しているのは柱穴と下層包含層で、遺物が多数出土した井戸からのものはない。

ＢタイプではSE２がBaタイプが大半を占め、121・127・133のようなBbタイプがわずかに含まれる。この３個体以外ではSE２から出土した瓦器椀はミガキが比較的密なものが多く130～132では密なジグザグが施される。椀形についても内湾気味でやや腰部のはるものが目につく。ただし高台は132のよう

にやや退化したものも認められる。

SE５では口径が11㎝前後と小さいものが多く、比較的暗文が粗いBbタイプが多くを占める。口径に比べて器高の高いものが目立つ印象で、暗文も渦巻き文に近い154・155・160などが目立つ。これらのことからするとSE５はSE２よりも下る一群と思われる。

SE17も比較的暗文が粗いBbタイプが多数を占める。口径に比べて器高の高いものが目立ち、暗文も渦巻き文に近い192・195があるなどSE５と同様の傾向を持つ。

篠山盆地における瓦器はかつて丹波型と呼称され地域的な特徴を持つことが指摘されていたが、山田清朝によって篠山盆地の瓦器には遺跡ごとに特徴があり、かつて指摘された特徴が必ずしもすべてに当てはまるわけではないことが指摘されている。本遺跡の瓦器椀についても山田が指摘する通り口縁部の肥厚が顕著なものや、端面をもつようなものは認められなかった。

次に篠山盆地における瓦器について、本遺跡の一群を評価するために初田館跡や八上上遺跡との比較を行っておきたい。まず、初田館跡であるが外面にミガキがない椀Bbないし椀Bcが本遺跡出土の瓦器椀に対応する。口縁部のナデでみると本遺跡で古タイプとしたAタイプも椀Bbとcの中間に位置し、Bタイプはすべて椀Bbのなかに含まれる。八上上遺跡ではⅡ期とされた瓦器椀にAタイプが近似し、Ⅲ期とされた瓦器椀にBタイプが含まれると考えられる。

これらの年代観はAタイプが13世紀後半、Bタイプが13世紀末～14世紀前半頃のものと考えられるだろう。そしてBタイプに中でもSE２がやや古くSE５・17が後出と考えられる。

土師器皿

大半が手づくね皿であるが小皿に糸切り手法のものが多く含まれる。皿は口径の大きなものが少なく、手づくね技法のもので占められる。

多くが13世紀代のものであるが、SE７の167は京都Ⅶ期（13世紀後葉～14世紀中頃）の土師器皿Nに類似する。（小森・上村1996）このほかSK４の147・SE５の152・153など14世紀代以降の京都系土師器の技法を模倣した個体も含まれる。

土師器堝

土師器の堝はP110の77、SE１の97・98、SE７の170・171、SE15の183、下層包含層の207～211がある。

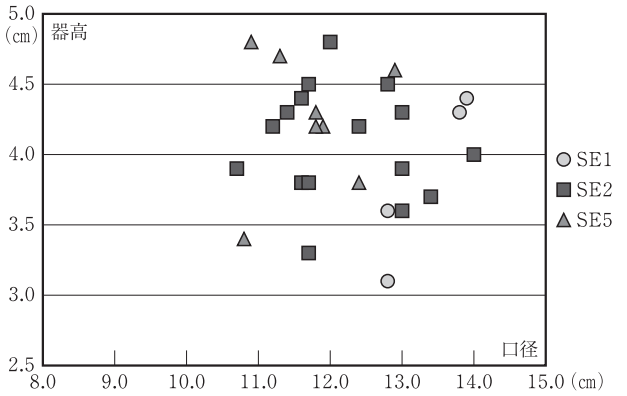


表１　瓦器法量表

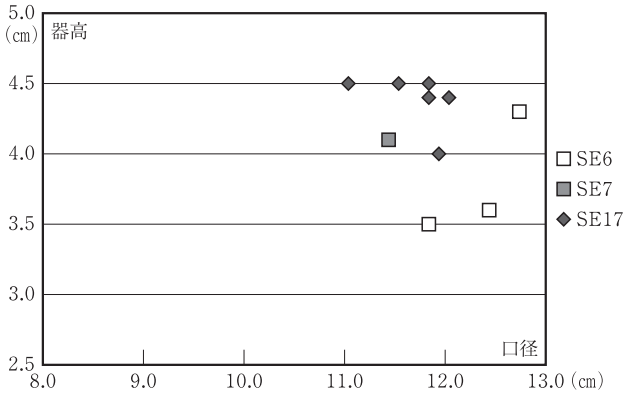


表２　瓦器法量表

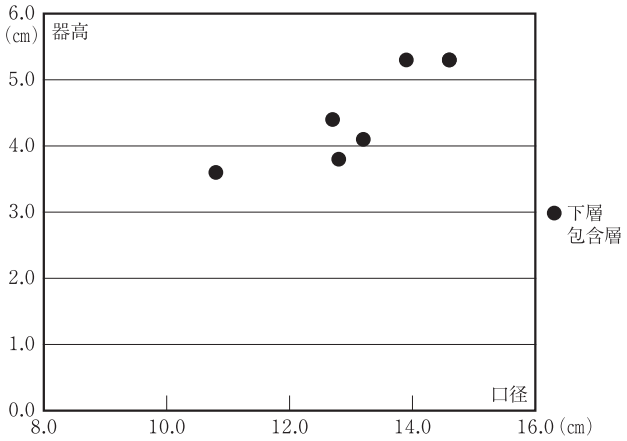


表３　瓦器法量表

堝型の体部を持つもののうち97・98は胴部が球形である。170は体部が同じく球形であるが、口縁部が直立する器形を持つ。細片のため詳細は不明であるが171も同様のタイプと考えられる。このほか209・210も堝型であるが器形は詳細不明である。おそらく97・98よりは後出の製品であろう。このほかにも甕型に近いものがある。甕型に近いもののうち77はやや長胴で、207・208・211は体部が球形に近い。いずれも13世紀前半頃の製品と考えられる。

この他、183は堝型であるが口縁部がやや退化し、口縁直下の鍔も小型化するもので中世後半（15～16世紀）に下る。

須恵器

須恵器は杯・椀・鉢・甕がある。杯はSE14の180、椀は下層包含層の223・224などわずかで、いずれも完形品ではなく口縁部の細片である。甕も個体数は多くない。SE５の165は胴部の破片のみである。このほかSE７の174・175、SE17の199などがある。このため、ここでは鉢を中心に検討しておきたい。

鉢は比較的多く出土した。P108の74、SE１の105・106、SE２の138、SK４の142～145、SE７の172・173、SE17の197・198、下層包含層の225～227、包含層の225～227などがある。このうちP108の74、SE17の197・198は小型の鉢である。これらを除くと鉢には４タイプがある。

AタイプはSE２の138で、口縁部を上方にやや拡張するが基本的に体部の器壁に比べ、口縁部の肥厚は著しくない。

BタイプはSE１の105、SE７の172・173、下層包含層の225である。口縁部が肥厚し断面が三角形に近い形状になる。内面が直線的になる173など細分できるがここでは一括して報告する。

CタイプはSE１の106およびSK４の142～144である。口縁端部が肥厚し、上下に拡張するが全体に外面上部を強くナデることによって、端部を内側に巻き込んだ器形になる。特に143は端部を内面に強く折るような形となり口縁内面に凹線状の窪みができる。14世紀代前半に下る製品と考えられる。

Dタイプは下層包含層の226で口縁が上方にのみ拡張するものである。

Aタイプが12末～13世紀前半、Bタイプが13世紀後半、Cタイプは14世紀前半頃、Dタイプは14世紀後半ごろと考えられる。

丹波焼

丹波焼の製品は甕と擂鉢がある。ただし、擂鉢はSE５出土の164以外は包含層からの出土で、このうち236は16世紀代に下る製品である。また、164は底部の破片である、このためここでは甕を中心に検討する。

丹波焼甕は井戸側として利用されたものと、破砕して水溜に利用したものがある。SE１の107～109、SE17の148、SE７の149、SE５の150、SE16の182がある。

SE１の107～109およびSE７の149から出土したものはすべて長谷川眞編年のⅣ期に属するもので、甕Bの系譜を引くタイプのものである。SE17の148、SE16の182はⅢ期の甕B１、SE５の150は甕B２の系譜をひくものであるが時期はⅦ・Ⅷ期頃のものである。また、擂鉢は包含層出土の236が15～16世紀のもので、237が14世紀代、この他、鉢の238が16世紀代のものである。

これらの時期はⅢ期が13世紀後葉～14世紀前葉、Ⅳ期が14世紀中葉～14世紀後葉、Ⅶ期が15世紀末～16世紀前半、Ⅷ期が16世紀後葉～17世紀前葉とされている。

ただし、SE５から出土した150は上層からの出土で混入の可能性が高い。従って、これはSE５の時期を決定する要素からは排除した方がよい。また、148～150の破片が出土したSK４についても150の小片が上層から出土している。このためSK４の150についても混入の可能性が高い。

貿易陶磁器

貿易陶磁器としてはP84から出土した青磁碗60、SE１の青磁碗111、SE７出土の青磁碗177、SE15の青磁碗184、包含層の青磁碗228・229などがある。このほか、白磁碗230と染付碗231がある。

瓦質土器

瓦質土器はSE７の火鉢176、SD１の203がある。いずれも斜め外方に開く体部を持ち、上面に端面を持つ。ミガキ調整の明瞭でない製品である。

【参考文献】

伊野近富1996「丹波六人部荘における土器様相　―原型・模倣型の視点から―」
『京都府埋蔵文化財論集第３集―創立十五周年記念誌―』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富1995「中世土器の編年（上）」『京都府埋蔵文化財情報　第57号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富1996「中世土器の編年（中）」『京都府埋蔵文化財情報　第59号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富1996「中世土器の編年（下）」『京都府埋蔵文化財情報　第60号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
伊野近富1984「大内城跡発掘調査報告」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
尾上　実1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古希記念論集　古文化論集』
山田清朝他1992「平安時代～鎌倉時代の土器について」『初田館跡』兵庫県教育委員会
山田清朝2003「第４章　まとめ」『八上上遺跡』兵庫県教育委員会
森島康雄2001「瓦器椀編年から見た京都系土師器皿の年代観―13世紀を中心に―」『中世土器研究論集』
森島康雄1987「西ノ辻遺跡周辺における中世土器の編年」
『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要Ⅳ』大阪府教育委員会
河野克人他1999「丹波焼　遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書」今田町教育委員会
村上泰樹他1993「国領遺跡（Ⅱ）」兵庫県教育委員会
村上泰樹他1987「河津館址」兵庫県教育委員会
小森俊寛・上村憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都埋蔵文化財研究所紀要』第３号

表４　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率			備考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
1	SK18	弥生時代	土師器	壺	(9.2)	(10.2)	腹径 12.4	1/10	—	30	厚手の個体で、口縁部を二重口縁部状にし、体部は球形になる。外面に縦ハケ、内面は粘度紐の接合痕跡が観察される。
2	SK18	弥生時代	土師器	壺	9.2	9.8	4.9	3/4	—	30	ラッパ上の口縁部部を持つ、小型の壺である。器表に小規模な黒斑が観察される。
3	SK18	弥生時代	土師器	高杯	13.0	16.9	腹径 13.0	1/2	1/2	80	脚部の破片。中実で４方向の円形透かし穴をもつ。
4	SK18	弥生時代	土師器	甕	14.8	(14.1)	(17.6)	完存	—	70	口縁部をくの字に外反させ、体部はやや長胴。外面に右上りの平行タタキ痕跡が残される。
5	SK18	弥生時代	土師器	甕	(16.2)	(9.6)	—	1/5	欠	20	二重口縁。内面胴部にケズリ調整、外面には体部上半が縦ハケ、中位が横ハケを施す。
6	SK18	弥生時代	土師器	壺	(14.6)	(16.7)	復径 (23.8) 底径決損	1/3	欠	20	口縁部がすぼめた頸部から直立気味に立ち上がり、上端でラッパ状に開き、端部は外方に面を持つ。胴は肩部が上位に位置し、球形に近い器形。
7	第２面 P275	弥生時代	土師器	甕	(14.6)	(15.2)	—	1/4	—	30	口縁部を丸く立ち上げ端部を丸くおえる。厚手の個体である。外面は縦ハケ、内面は縦方向に指ナデで器面を調整する。
8	第２面	弥生時代	土師器	壺	12.4	(6.9)	欠	1/2	欠	10	二重口縁壺。摩滅のため調整などの詳細は不明。
9	第２面	弥生時代	土師器	壺	16.9	(6.1)	欠	1/2	欠	10	
10	SK18	弥生時代	土師器	壺	(15.8)	(22.0)	腹径 21.52 底径 6.8	口縁 1/4	細片	40	下ぶくれの器形で、口縁部外面に２重の凹線を持つ。外面タテ方向のミガキ。内面にはナデと指頭痕跡が観察される。粘土紐接合痕跡が顕著。黒斑有。
11	SK18	弥生時代	土師器	壺	10.8	(18.0)	腹径 7.9	3/4	3/4	70	下膨れ状の体部を持ち、公園部には６条の凹線、体部は縦方向のミガキ調整を施す。体部下半に異なった胎土を使用。
12	SK18	弥生時代	土師器	壺	(17.3)	26.4	5.4	1/4	完形	40	玉葱形の体部からラッパ状に開く口縁部。端部を上方につまみ丸くおえる。外面上半は縦ミガキ、下半は横。
13	第２面	弥生時代	土師器	高杯	—	(7.9)	(9.0)	—	1/5	20	器表が荒れ、調整不明
14	第２面	弥生時代	土師器	蓋	(12.5)	(3.5)	—	1/3	3/5	40	壺蓋と思われる。天井部につまみを持つ。
15	第２面	弥生時代	土師器	蓋	(12.1)	(4.2)	—	1/3	1/2	40	壺蓋と思われる。天井部につまみを持つ。
16	第２面	弥生時代	土師器	蓋	(12.8)	(5.6)	つまみ径 4.1	1/2	完存	30	蓋の破片である。
17	第２面	弥生時代	土師器	鉢	8.5	5.7	2.7	1/3	完形	80	手づくね整形で内面に指頭痕跡が顕著に残される。
18	第２面	弥生時代	土師器	甕	(24.0)	(31.2)	復径 (28.3) 底径 6.6	1/4	1/4	25	直立して立ち上がる頸部、卵頭形の器形。外面にタタキ痕跡、内面はケズリなどで丁寧にタタキ痕跡を消す。全体に摩滅が著しい。
19	第２面	弥生時代	土師器	甕	(19.7)	(27.4)	腹径 26.2 底径 6.4	欠損	完形	70	摩滅の著しい個体。外面右上がりのタタキ痕跡、内面は調整不明。口縁部欠損。
20	SE２	弥生時代	土師器	甕	—	(6.0)	(2.5)	欠	完存	10	土師器壺の底部細片外面に縦ハケ調整。黒斑有。
21	第２面	弥生時代	土師器	甕	17.8	(15.8)	腹径 15.3 底径欠損	3/4	—	20	ラッパ状に開く口縁部、体部はやや長胴形になる。外面タテ刷毛、内面口縁部付近は横ハケ。粘土紐接合痕跡顕著。
22	第２面	弥生時代	土師器	甕	19.7	(11.5)	復径 (16.9)	1/9	欠	20	二重口縁。内面胴部にケズリ調整、外面には縦ハケが観察される。
23	第２面	弥生時代	土師器	甕	28.1	45.5	6.6	1/3	9/10	80	２重口縁甕。外面は全体的にタテ刷毛、内面は部分的に横ハケ調整。
24	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	(12.6)	4.0	—	1/2	—	90	天井部と帰りの境に凹線を持つ。天井部を回転ヘラ削りする。
25	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	12.4	4.8	—	1/2	1/2	50	天井部からかえりにかけて湾曲する器形。天井とかえりの境に稜を持つ。口縁端部は内傾して面を持つ。天井部は回転ヘラケズリ。
26	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	(14.0)	4.9	—	1/2	完形	70	天井とかえりの境に稜を持つ。天井部は回転ヘラケズリ。
27	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	12.6	4.9	—	1/4	2/3	40	須恵器杯蓋である。天井部回転ヘラケズリ。天井部とかえりの境が稜を持つ。
28	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	12.5	4.9	—	1/3	完存	60	須恵器杯蓋である。天井部回転ヘラケズリ。天井部とかえりの境は明瞭な稜を持つ。
29	第２面	古墳時代	須恵器	杯身	10.6	4.8	6.0	完存	完存	完存	須恵器杯身である。底部にヘラ記号有。
30	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	(11.9)	(3.9)	−	1/2	1/2	60	つまみなし。天井部外面を回転ヘラ削りする。
31	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	(14.0)	(3.8)	—	1/12	—	30	杯蓋の小片。
32	第２面	古墳時代	須恵器	杯蓋	14.1	4.8	—	完存	完存	完存	須恵器杯蓋である。天井部回転ヘラケズリ。天井部とかえりの境は不明瞭。
33	第２面	古墳時代	須恵器	杯身	11.5	3.7	—	1/2	完形	60	かえりを持つ。底部から体部下半まで回転ヘラケズリ調整。やや肉厚の個体。
34	第２面	古墳時代	須恵器	杯身	(12.8)	(3.3)	欠	1/4	欠	30	杯身の小片。
35	第２面	古墳時代	須恵器	杯身	13.1	4.2	—	1/8	2/3	60	かえりを持つ個体。底部から体部下半まで回転ヘラケズリ調整。やや肉厚の個体。
36	第２面	古墳時代	須恵器	杯身	(11.5)	(3.2)	(6.0)	1/20	完形	60	底部ヘラ切り。内面にヘラで記号様の線刻。
37	包含層	古墳時代	須恵器	蓋	−	(4.2)	−	−	−	80	天井に扁平なつまみを持つ。天井外面は回転ヘラ削り。
38	包含層	古墳時代	須恵器	高杯	—	(5.1)	—	—	—	細片	脚部に三角形の３方透かし、上下を凹線文区画し、内部に波状文と施文。

表５　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率			備考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
39	第２面	古墳時代	須恵器	杯身	(13.6)	(3.4)	−	1/4	1/4	60	開き気味の体部底部を回転ヘラ削りし、体部内外面を横ナデ調整。大部外面下半には沈線状の凹線を施す。
40	第２面	古墳時代	須恵器	𤭯	—	(12.1)	復径 (8.4)	1/3	完形	80	ラッパ状に開く口縁と推定される。胴部上位に穿孔を持ちつ、１条の凹線を持つ。同部下半から底部は回転ヘラ削り。
41	第２面	古墳時代	須恵器	壺	(6.5)	(10.7)	復径 (12.9)	欠	完形	70	肩が張り丸底の壺。肩部に自然雄が掛かる。肩部に波状文、胴部にカキ目状の平行線文。体部下半には左上がりのタタキ痕跡を残す。
42	第２面	古墳時代	須恵器	甕	(19.7)	(7.6)	—	1/3	細片	10	頸部をくの字に折り、口縁部を外反させて立ち上げ、端部を上下に拡張する。外面にタタキ痕跡、内面にあて具痕跡が確認される。
43	第２面	古墳時代	土師器	甑	(28.5)	(36.3)	11.6	1/10	細片	10	寸胴型の胴部、胴部両端に取っ手を貼り付け入る。外面に縦ハケ、内面縦方向のケズリ、口縁付近のみ横方向のケズリを施す。
44	第２面	古墳時代	土師器	円筒埴輪	—	(5.3)	—	—	—	細片	円筒埴輪細片である。部分的に透かし穴が残る。篦直下のナデ痕跡と縦ハケが観察される。
45	第２面	古墳時代	土師器	小型丸底壺	6.8	4.3	—	1/1	—	20	口縁部を内傾させ、すぼめたような器形を持つ。
46	包含層	古墳時代	土師器	小型丸底壺	9.2	13.8	14.0	9/10	完存	90	直立気味に立ち上る口縁部やや肩の貼る体部を持つ。但し、器表が荒れ調整は不明。
47	SE01	古墳時代	土師器	小型丸底壺	13.0	16.9	腹径 13.0	1/2	完存	80	口縁部を外反させ、体部は球形を呈する。外面に縦方向のハケ目調整を施す。底部に黒斑が観察される。
48	包含層	古墳時代	土師器	甕	(17.4)	(19.8)	腹径 20.7	1/4	1/2	40	球形の体部から口縁部が外方に開き、端部を丸くおえる。摩滅のため外面調整不明、内面はケズリ調整。黒斑有。
49	包含層	古墳時代	土師器	甕	15.4	(13.5)	—	3/4	欠	30	口縁端部は内傾した面を持つ。内面胴部にケズリ調整、外面には縦ハケが観察される。
50	第２面	古墳時代	土師器	甕	13.4	(15.4)	腹径 24.2	1/5	1/5	40	口縁部はくの字に折り外反させる。体部は球形。外面は摩滅し調整不明、内面には横方向のケズリ痕跡がわずかに観察される。全体に器表が荒れる。
51	第２面	古墳時代	土師器	甕	17.4	31.0	腹径 27.7	2/3	完形	70	球形の体部に、くの字に開き端部を丸くおえる口縁部を持つ。外面は肩部が横ハケ、中が縦ハケ、底部が不定方向ハケ、内面ケズリとハケ調整。黒斑有。
52	第２面	古墳時代	土師器	甕	(23.8)	(14.3)	腹径 22.2	3/4	−	20	球形の体部から口縁部が外方に開き、端部を丸くおえる。外面タタキ後、縦ハケ、内面はハケ目調整。
53	SB２ P６	中世	瓦器	椀	(12.6)	(5.0)	(5.7)	1/8	1/4	20	体部を外開きに立ち上げ、内面および口縁部を横ナデ。内面のみ粗いミガキ。高台は小さい三角形の輪高台。
54	P56	中世	瓦器	椀	—	(2.2)	(6.2)	—	1/10	細片	底部片。小さい三角形高台。調整は摩滅のため不明。
55	P62	中世	土師器	小皿	7.9	1.0	6.4	完形	完形	完形	手づくね皿。平底から短く体部が立ち上がる。口縁端部は尖らせ気味におえる。
56	P62	中世	土師器	皿	11.3	2.9	8.6	完形	完形	95	丸底気味の底部から外開き気味に体部を立ち上げ、口縁端部は丸くおえる。内面および外面体部上半を横ナデ調整。ゆがみ有り。やや摩滅。
57	P62	中世	瓦器	椀	12.7	4.4	5.6	完形	1/2	70	体部を内湾しながら立ち上げ、口縁端部を尖らせ気味におえる。内面のみ粗いミガキ。見込みに平行暗文。断面三角形の高台。やや摩滅する。
58	P62	中世	瓦器	椀	12.0	4.8	5.4	完形	完形	完形	体部を内湾しながら立ち上げ、口縁端部をまるくおえる。外面に粘土紐貼り付け痕跡。内面のみ粗いミガキ。見込みに平行暗文。断面三え角形の高台。
59	SB３ P82	中世	瓦器	椀	(12.6)	(3.2)	—	1/10	—	10	体部中位でくの字に折り、口縁部をわずかに外傾きさせる器形。調整は摩滅のため不明。
60	P84	中世	青磁	碗	(16.7)	(7.7)	6.1	1/9	完形	30	中国産の同安窯系の青磁碗である。内外面は濁った黄土色の施釉。内面に片刃彫の菊花文が描かれる。高台は削り出し輪高台で、露胎となる。
61	P85	中世	土師器	小皿	(7.8)	(1.5)	(5.0)	1/2	1/2	40	手づくね皿。平底の底部から丸く外開きの短い体部が立ち上がる。
62	P85	中世	土師器	皿	(11.0)	(1.9)	(7.0)	1/20	1/0	細片	手づくね皿。丸く外開きの短い体部が立ち上がる。摩滅のため調整は不明。
63	P86	中世	瓦器	皿	(8.0)	(1.7)	(7.0)	1/4	1/4	20	底部片。丸底の底部から短い体部を立ち上げ、口縁部を丸くおえる。摩滅のため調整不明。
64	P87	中世	土師器	皿	(12.8)	(2.4)	(10.0)	1/15	1/15	10	手づくね皿。体部中位でやや折れて外開き気味になる。口縁端部は尖らせ気味におえる。
65	P87	中世	瓦器	椀	—	(2.7)	(5.2)	—	細片	細片	底部片。丸く体部が立ち上がり、断面三角形の小さな輪高台を貼り付ける。内面体部にミガキ調整。
66	P87	中世	瓦器	椀	12.0	4.7	5.0	9/10	8/10	90	体部を内湾しながら立ち上げ、口縁端部を尖らせておえる器形。調整は摩滅のため不明。高台は断面三角形の輪高台。体部に直径５～８ミリの礫を含む。
67	P87	中世	瓦器	椀	(12.6)	(4.5)	(5.0)	1/5	1/2	30	体部を内湾して立ち上げ、内面および口縁部を横ナデ。内面のみ粗いミガキ、見込みに平行暗文。高台は小さい三角形の輪高台。外面に粘土の接合痕跡。
68	P87	中世	瓦器	椀	(11.9)	(4.1)	(4.6)	1/3	完形	40	体部を直線的に立ち上げ、内面および口縁部を横ナデ。内面のみ粗いミガキ、見込みに平行暗文。高台は小さい三角形の輪高台。
69	P92	中世	土師器	小皿	(8.1)	(1.5)	(7.1)	細片	細片	細片	ロクロ土師器、底部片。平底の底部から外開きの短い体部が立ち上がる。切りはなし手法は摩滅のため不明。

表６　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率			備考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
70	P92	中世	土師器	皿	(12.4)	(2.6)	—	2/3	完形	70	外開き気味で中位で屈曲する体部。口縁端部は丸くおえる。内外面を横ナデ調整し、底部は未調整。
71	P92	中世	土師器	皿	(11.2)	(2.2)	—	2/3	1/2	50	内湾気味に立ち上がる体部で口縁端部を丸くおえる。内外面を横ナデ調整し、底部は未調整。
72	SB３ P99	中世	瓦器	椀	(12.0)	(4.4)	—	1/8	—	10	体部を内湾しながら立ち上げ、口縁部直下を屈曲させる器形。調整は摩滅のため不明。高台は貼り付け痕跡のみが残される。
73	P104	中世	瓦器	皿	(9.0)	1.1	—	1/9	1/6	20	器高の低い個体である。低体部の境を丸く立ち上げ、口縁部をややとがらせ気味におえる。ミガキは観察されなかった。
74	P108	中世	須恵器	鉢	—	(2.9)	—	細片	—	細片	口縁部が肥厚し、端部を上方に拡張してややとがらせ気味におえる。
75	P110	中世	瓦器	椀	—	(2.0)	(7.2)	—	2/3	30	丹波型瓦器椀。内面のみミガキ調整、平行暗文。輪高台で、断面はハの字に踏ん張る。
76	P110	中世	瓦器	椀	(14.3)	(5.5)	—	1/8	1/8	15	丹波型瓦器椀。内面のみミガキ調整、平行暗文。
77	P110	中世	土師器	堝	(24.4)	(10.0)	—	1/4	—	10	外面に平行タタキ。口縁部をくの字に外反させ端部を外方につまむ。
78	P118	中世	瓦器	椀	—	(2.6)	5.7	—	完形	20	丹波型瓦器椀。摩滅のため調整不明。ハの字に踏ん張る輪高台。
79	SB４ P140	中世	土師器	小皿	(7.8)	(1.2)	5.4	1/3	1/4	15	体部を湾曲させながら外方に立ち上げ、端部を尖らせ気味におえる。手づくね皿。
80	P171	中世	土師器	小皿	7.4	1.1	6.0	完形	完形	完形	体部を外開きで直線的に立ち上げ、端部を尖らせ気味におえる。糸切り皿。
81	P185	古代	須恵器	杯A	(11.8)	(2.9)	(7.8)	1/10	1/2	40	体部は直立気味に立ち上がり、口縁部は丸くおえる。内外面を横ナデ調整し、底部はヘラケズリ調整。
82	P185	古代	須恵器	杯A	12.8	2.5	9.0	1/2	1/2	50	体部を屈曲させながら外開きに立ち上げ、端部をとがらせ気味におえる。底部はヘラ切り未調整。
83	P185	古代	須恵器	杯B	(13.8)	(4.1)	(9.4)	1/7	1/18	10	外開きで直線的に立ち上がる体部。やや内側に断面四角形の低い高台を貼り付ける。
84	P186	古代	土師器	杯A	(15.8)	(3.1)	(11.0)	1/2	1/2	50	外開きで直線的に立ち上がる体部。口縁端部はやや尖り気味におえる。内外面を横ナデ調整し、底部はヘラケズリ調整。
85	P196	古代	須恵器	杯B	—	(2.6)	(10.0)	—	1/7	10	断面が四角形の低い高台を持つ。
86	P199	中世	土師器	小皿	(7.8)	(1.1)	5.6	1/3	1/4	30	体部を湾曲させながら外方に立ち上げ、端部を丸くおえる。摩滅のため切り離し技法は不明。
87	SB６ P213	中世	瓦器	椀	—	(2.9)	(7.1)	—	1/6	30	丹波型瓦器椀。内面のみミガキ調整、ジグザグ暗文。輪高台で、断面三角形。
88	SB７ P227	中世	瓦器	椀	(14.3)	(4.4)	5.6	1/3	完形	30	丹波型瓦器椀。内面のみミガキ調整、平行暗文。断面三角形を呈する輪高台。
89	P234	中世	瓦器	椀	13.4	5.5	6.8	完形	完形	完形	丹波型瓦器椀。内面のみミガキ調整、平行暗文。断面ハの字に踏ん張る輪高台。内湾気味に立ち上がる体部、口縁端部は尖らせ気味におえる。
90	P239	中世	土師器	小皿	7.8	1.2	6.2	1/3	1/3	30	体部は小さく上方に曲げ、口縁端部を尖らせ気味におえる。口縁端部を丸くおえる。手づくね皿。粘土板の接合痕跡が残る。
91	P239	中世	土師器	小皿	7.8	1.8	5.9	完形	完形	完形	体部を外方向に開き、口縁端部を丸くおえる。ロクロ土師器、切り離し手法は摩滅のため不明。
92	P239. P263	中世	土師器	小皿	(8.6)	(1.1)	6.1	1/18	1/7	10	体部を外方向に開き、口縁端部を丸くおえる。手づくね皿。
93	P239	中世	土師器	皿	(10.8)	(1.9)	8.0	1/9	1/5	20	体部を外方に開き、口縁端部を尖らせ気味におえる。口縁部をナデ調整。手づくね皿。
94	P239	中世	土師器	皿	(12.8)	(2.3)	8.6	1/4	1/4	30	体部を湾曲しながら外方に立ち上げ、口縁端部を尖らせ気味におえる。口縁部を１段ナデ調整。手づくね皿。
95	P256	中世	瓦器	皿	7.5	1.5	4.8	完形	完形	完形	歪みの大きい個体。内外面を横ナデし手づくねで仕上げる。
96	P263	中世	土師器	小皿	7.7	1.4	5.0	1/2	1/2	50	内弯しながら立ち上がる体部。底体部の境は丸く立ち上がる。やや歪みがある。手づくね皿。
97	SK１・ SE１	中世	土師器	堝	(23.7)	(12.5)	—	1/7	欠	30	外面に平行タタキ。球形の体部から口縁部を外開きで立ち上げ、端部を肥厚させる。
98	SE１	中世	土師器	堝	(28.4)	(6.4)	欠	1/12	欠	10	陶器質、外面に平行タタキ、内面に当て具痕が残る。口縁部をくの字に外反させ端部に大きめの玉縁を持つ。
99	SE１	中世	瓦器	椀	(12.8)	(3.6)	欠	1/10	欠	20	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。内面のみミガキ調整を施す。
100	SE１	中世	瓦器	椀	(12.8)	(3.1)	欠	1/10	欠	20	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。内面のみミガキ調整を施す。
101	SE１	中世	瓦器	椀	(13.8)	(4.3)	欠	1/7	欠	20	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。内面のみミガキ調整を施す。
102	SE１	中世	瓦器	椀	(13.9)	(4.4)	(7.0)	1/12	1/2	40	暗文はジグザグ暗文。体部は外開きで直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。高台は断面台形。内面のみ簡略化したミガキ調整を施す。内面底部に重ね焼き痕跡。
103	SE１	中世	瓦器	椀	—	(1.7)	(5.6)	欠	1/4	10	椀底部片。内面底部ジグザグ暗文。内面にのみ粗いミガキ。高台は断面三角形の輪高台を貼付る。
104	SE１	古墳	土師器	鉢	(15.6)	(7.3)	欠	1/4	欠	15	漏斗状の形体を持つ鉢である。器表が荒れ調整は不明。
105	SE１	中世	須恵器	鉢	(28.6)	(3.7)	—	1/20	欠	細片	須恵器鉢の細片。上方に拡張する口縁部を持つ。
106	SE１	中世	須恵器	鉢	(28.4)	(2.6)	—	1/20	欠	細片	須恵器鉢の細片。上方に拡張する口縁部を持つが、端部はナデによって丸くおえる。口縁の内側に凹部を持つ。

表７　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法　量			残存率			備　　考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
107	SE１	中世	丹波焼	甕	(35.8)	(6.0)	—	細片	—	細片	口縁部の破片。退化した口縁部、内面上端に凹線。
108	SE１	中世	丹波焼	甕	(47.8)	(1.7)	欠	1/9	欠	細片	口縁部片。口縁部内面上端と外面に凹線をもつ。
109	SE１	中世	丹波焼	甕	(52.4)	(6.6)	—	細片	—	細片	N字状口縁。断面しゃくれ気味の口縁部で上面は凹線状､外面に１条の凹線。
110	SE１	中世	白磁	皿	—	(1.1)	(7.0)	欠	1/4	10	白磁皿の細片。
111	SE１	中世	青磁	碗	—	(1.9)	(5.4)	欠	1/2	10	青磁碗細片。内面に花文を印刻する。
112	SE３	中世	瓦器	椀	(12.6)	(3.5)	—	1/6	—	15	口縁部片、丸く内弯気味の体部。内面ミガキ調整。
113	SE３	中世	瓦器	椀	(12.6)	(4.1)	—	1/5	—	15	口縁部片、丸く内弯気味の体部。口縁部はやや肥厚する。内面ミガキ調整。
114	SE２	中世	土師器	小皿	(7.2)	(1.1)	(5.2)	3/4	完存	60	手づくね皿。体部は短く外開きに立ち上げ、口縁部を丸くおえる。
115	SE２	中世	土師器	小皿	(7.9)	(1.2)	(6.2)	1/4	1/4	30	体部を小さく立ち上げ、口縁端部を尖らせ気味におえる。ロクロ土師器。底部は切り離し後指おさえないしナデ調整する。
116	SE２	中世	土師器	小皿	(9.0)	(1.2)	7.2	1/9	1/9	15	体部を外方に開き、口縁端部を尖らせ気味におえる。口縁部内外面をナデ調整、底部未調整。手づくね皿。
117	SE２	中世	土師器	皿	(10.7)	(2.2)	(5.0)	1/4	1/2	30	手づくね皿。体部は外開きで口縁部をやや尖らせておえ、底部はやや丸く仕上げる。
118	SE２	中世	土師器	皿	(12.5)	(3.2)	欠	1/18	欠	細片	手づくね皿。体部は外開きで、底部はやや丸く仕上げる。
119	SE２	中世	瓦器	椀	(11.7)	(3.3)	欠	1/5	欠	20	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。内面のみ簡略化したミガキ調整。炭素未吸着、内外面に黒班あり。。
120	SE２	中世	瓦器	椀	(10.7)	(3.9)	—	1/6	—	15	やや内弯気味に開く体部。内面のみあらいミガキ調整。内面および外面上端を横ナデ調整する。体部下半は未調整。
121	SE２	中世	瓦器	椀	(11.4)	(4.3)	欠	1/4	欠	15	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。内面のみミガキ調整を施すが簡略化が著しい。炭素の未吸着部分がある。
122	SE２	中世	瓦器	椀	(11.6)	(3.8)	—	1/7	—	30	直線的に開き体部中位で屈曲する体部。内面のみあらいミガキ調整。内面および外面上端を横ナデ調整する。
123	SE２	中世	瓦器	椀	(11.7)	(3.8)	欠	1/5	欠	20	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。内面のみミガキ調整。
124	SE２	中世	瓦器	椀	(12.8)	(4.5)	欠	1/6	欠	30	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、上半を軽く丸くおえる。内面のみミガキ調整。
125	SE２	中世	瓦器	椀	(13.0)	(3.9)	欠	1/7	欠	30	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、上半を軽く丸くおえる。内面のみミガキ調整。
126	SE２	中世	瓦器	椀	(13.0)	(4.3)	欠	1/6	欠	30	丹波型瓦器椀。暗文不明。体部は湾曲して立ち上がり、上半を軽くくの字に折る。内面のみミガキ調整。
127	SE２	中世	瓦器	椀	(13.0)	(3.6)	欠	1/3	欠	30	丹波型瓦器椀。暗文は不明。体部は湾曲しながら立ち上がり、上半でくの字に折れ、口縁端部を尖らせておえる。内面のみ簡略化したミガキ調整を施す。
128	SE２	中世	瓦器	椀	(13.4)	(3.7)	欠	1/2	欠	30	丹波型瓦器椀。暗文は不明。体部は湾曲しながら立ち上がり、上半でくの字に折れ、口縁端部をやや内弯しておえる。内面のみ簡略化したミガキ調整を施す。
129	SE２	中世	瓦器	椀	(14.0)	(4.0)	—	1/12	—	細片	内弯しながら立ち上がる体部。内面にのみ粗いミガキ調整。内面および外面上端のみ横ナデ調整。体部下半は未調整。
130	SE２	中世	瓦器	椀	欠	(1.9)	(6.0)	欠	1/2	20	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は湾曲して立ち上がる。内面のみ簡略化したミガキ調整。高台は断面ハの字形の輪高台。
131	SE２	中世	瓦器	椀	(11.2)	(4.2)	5.5	1/3	完形	40	直線的に開き体部中位で屈曲する体部。内面のみあらいミガキ調整、平行暗文。内面および外面上端を横ナデ調整する。ハの字に踏ん張る高台。
132	SE２	中世	瓦器	椀	11.6	4.4	5.3	完存	完存	完存	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部はかるく湾曲して立ち上がり、端部を丸くおえる。内面のみ簡略化したミガキ調整。高台は小さく断面三角形の輪高台を貼付。ゆがみが有。
133	SE２	中世	瓦器	椀	12.0	4.8	4.5	完存	完存	完存	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は直線的に立ち上がり、端部を丸くおえる。内面のみ簡略化したミガキ調整。高台は小さく断面台形の輪高台を貼付。
134	SE２	中世	瓦器	椀	(11.7)	(4.5)	(5.4)	1/14	1/3	40	丹波型瓦器椀。暗文はおそらくジグザグ暗文。体部は湾曲して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。高台はやや大きく断面三角形。内面のみ簡略化したミガキ調整。
135	SE２	中世	瓦器	椀	(12.4)	(4.2)	(5.7)	1/3	1/3	30	直線的に立ち上がる体部。内面のみ粗いミガキ調整で見込みに平行暗文。内面および外面上半を横ナデ調整。体部下半は未調整。
136	SE２	中世	瓦器	小皿	(7.7)	(1.7)	(5.0)	2/3	1/2	30	手づくね皿。体部が内湾して立ち上がり、口縁端部を丸くおえる。
137	SE２	中世	須恵器	小皿	(8.7)	(1.7)	(6.2)	4/1	1/3	60	糸切り皿。厚手の個体で体部は短く外開きに短く立ち上げ、口縁部を丸くおえる。
138	SE２	中世	須恵器	鉢	(25.2)	(6.6)	欠	1/14	欠	20	須恵器鉢の細片。やや上方に拡張し、断面三角形の口縁部を持つ。
139	SE６	中世	瓦器	椀	(11.8)	(3.5)	—	1/7	—	細片	直線的に開く体部。内面ミガキ調整。内面および外面口縁部のみ横ナデ調整。
140	SE６	中世	瓦器	椀	(12.7)	(4.3)	(4.7)	1/6	1/4	15	外開きの体部で、上半でややくの字に折る器形。摩滅のため調整不明。

表８　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率			備考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
141	SE６	中世	瓦器	椀	(12.4)	(3.6)	(5.1)	1/12	1/4	10	大きく開く体部で、器高が低くなる個体。内面にミガキ調整、見込み平行暗文。小さな断面三角形の貼り付け輪高台。
142	SK４	中世	須恵器	鉢	(28.9)	8.6	—	1/8	—	10	口縁部を上方に拡張し、端部をナデによって丸くおえる。外面の水引痕跡はやや目立つ。
143	SK４	中世	須恵器	鉢	(28.4)	(4.1)	—	1/12	—	10	口縁部を上方に拡張し､端部をナデによって内側に折る。しゃくれたような断面形を持つ個体
144	SK４	中世	須恵器	鉢	(29.0)	(5.9)	—	1/9	—	10	口縁部は断面三角形で上端を丸くなでる。外面に凹線を施す。
145	SK４	中世	須恵器	鉢	(32.8)	7.8	—	1/12	—	10	口縁部を上下に拡張させ、上端面をナデてやや丸くおえる。
146	SK４	中世	土師器	小皿	(7.6)	1.4	—	完形	完形	95	コースター状の器形で薄手のつくり。手づくね。底部黒斑有。
147	SK４	中世	土師器	皿	(11.0)	(2.2)	6.0	細片	細片	細片	体部を外方に開き、口縁端部を尖らせ気味におえる。内外面を横ナデ調整。手づくね皿。
148	SK４・SE17	中世	丹波焼	甕	(44.4)	51.6	腹径65.3	完形	欠損	完形	退化したN字状口縁、胴部中位に肩部を持つ算盤玉形の器形。井戸側に使用したため底部は打ち欠く。体部下半に陶器片が釉着する。
149	SK４・SE７・包含層	中世	丹波焼	甕	(49.6)	(60.6)	腹径65.3	1/4	1/20	60	N字状口縁。最大径が胴部中位にあり､算盤玉の器形が僅かに残る。底部は井戸側に使用したため打ち欠いており欠損。
150	SK４・SE５	中世	丹波焼	甕	(60.0)	(13.5)	—	細片	—	細片	口縁部をくの字に折り、端部を尖らせてすんなりおえる。外面に緑色の自然釉。
151	SE５	中世	土師器	皿	(11.8)	(1.9)	(6.0)	1/9	1/9	細片	手づくね皿。丸底で短く丸い体部を持つ。内面および体部を横ナデする。
152	SE５	中世	土師器	皿	(12.8)	(1.9)	(7.6)	1/7	1/7	細片	手づくね皿。低い器高の個体で口縁端部を上方向につまむ。内面および体部上半は横ナデ。クサリ礫を含む。
153	SE５	中世	土師器	皿	(11.7)	(2.5)	(8.1)	1/4	1/3	40	外方に開く体部。内外面を横ナデ調整。内面にはナデによるハケ状の痕跡がの残される。底部は未調整。手づくね皿
154	SE５	中世	瓦器	椀	(10.9)	4.8	3.8	完形	完形	95	丸く内傾する体部。内面のみ粗いミガキ調整、見込み平行暗文。底部歪み有。断面三角形の貼り付け輪高台。
155	SE５	中世	瓦器	椀	(11.3)	4.7	5.7	9/10	完形	95	直線的に開く体部。内面のみ粗いミガキ、見込みジグザグ暗文。外面に粘土接合痕跡。炭素の吸着が悪く黒色化しない部分が多い。
156	SE５	中世	瓦器	椀	(10.8)	(3.4)	—	1/4	1/4	30	直線的に立ち上がる体部。内面のみ粗いミガキ調整。内面および外面上半を横ナデ調整。体部下半は未調整。
157	SE５	中世	瓦器	椀	(11.8)	(4.3)	—	1/2	—	30	丸く立ち上がる体部、上半でナデによる屈曲が顕著。内面に粗いミガキ調整。
158	SE５	中世	瓦器	椀	(11.9)	(4.2)	—	1/2	—	40	ラッパ状に開く体部。内面のみ粗いミガキ調整。外面は指頭痕跡顕著。
159	SE５	中世	瓦器	椀	(11.8)	(4.2)	—	1/5	—	10	丸い体部。内面を横ナデの後、斜め方向の条線。最後に粗いミガキ調整。外面粘土貼り付け痕跡。
160	SE５	中世	瓦器	椀	—	(1.4)	(4.7)	1/2	完形	15	底部片。見込みに渦巻き暗文。高台は小さな輪高台を貼り付ける。
161	SE５	中世	瓦器	椀	(12.4)	(3.8)	(5.1)	1/6	1/6	20	やや低い器高。外開きの体部。内面に粗いミガキ調整、見込みは部分的に暗文が確認される。高台は小さい三角形高台を貼り付ける。
162	SE５	中世	瓦器	椀	(12.9)	(4.6)	(5.5)	1/12	1/4	10	外開きの体部で、内面にミガキ調整。見込み平行暗文。内面および外面口縁部のみ横ナデ調整。断面三角形の貼り付け輪高台。外面下半炭素未吸着。
163	SE５	中世	青磁	皿	—	(1.1)	(8.2)	—	細片	細片	青磁皿の底部細片。内面に草花文を片刃彫りする。白濁した透明釉を施釉。
164	SE５	中世	須恵器	鉢	—	(6.5)	(14.5)	—	1/4	細片	底部片。内面の使用痕跡は顕著。
165	SE５	中世	須恵器	甕	—	—	—	—	—	胴部片	甕胴部の破片。外面に平行タタキが観察される。
166	SE７	中世	土師器	小皿	(8.0)	(1.4)	(5.1)	5/8	5/8	60	手づくね皿。丸底で体部は短く立ち上がる。内面は不定方向ナデの痕跡顕著。外面未調整。
167	SE７	中世	土師器	皿	(10.1)	3.0	7.4	3/4	完形	90	手づくね皿。平底で体部中位でくの字で折れ外反する。内面および外面上半は横ナデ。外面下半以下は未調整。歪みの大きい個体。
168	SE７	中世	瓦器	椀	—	(2.0)	4.8	—	完形	15	底部片。断面三角形の和輪高台。内面のみミガキ調整で平行暗文。
169	SE７	中世	瓦器	椀	(11.4)	(4.1)	—	1/7	—	15	底部欠損。丸く内湾する体部で端部はやや尖らせ気味におえる。内面にのみ粗いミガキ調整。外面に指頭痕跡が目立つ。
170	SE７	中世	土師器	堝	(20.5)	(11.8)	—	1/2	—	50	外面に平行タタキ。球形の体部から口縁部を直立して立ち上げ、端部を肥厚させる。頸部に顕著な指頭痕跡を残す。
171	SE７	中世	土師器	堝	—	(3.3)	—	細片	—	細片	口縁部の細片である。口縁部を湾曲して立ち上げ端部を玉縁状にする。
172	SE７	中世	須恵器	鉢	(26.7)	(4.0)	—	1/10	—	細片	口縁部を肥厚させて上下に拡張させる。上端部をナデて丸くおえる。
173	SE７	中世	須恵器	鉢	(29.3)	(5.8)	—	1/9	—	10	口縁部を肥厚させて上方の拡張させる。
174	SE７	中世	須恵器	甕	—	(6.3)	—	細片	—	細片	外面に平行タタキ。頸部から口縁部を直立気味に立ち上げ、端部を肥厚させる。
175	SE７	中世	須恵器	甕	—	(5.2)	—	細片	—	細片	外面に平行タタキ。頸部から口縁部を直立気味に立ち上げ、端部を肥厚させる。
176	SE７	中世	瓦質土器	火鉢	(38.0)	(7.1)	—	細片	—	細片	体部は外方に開いて立ち上がり、口縁を肥厚させ、上端に面を持つ。炭素は安定しているが　調整は摩滅のため不明。

表９　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率			備考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
177	SE７	中世	青磁	碗	(12.9)	(4.2)	—	1/8	—	20	口縁部片である。外面に鎬蓮弁を陽刻する。花弁に縦方向の細線を描いている。釉調は浅緑色を呈する。
178	SE13	近世後半	染付磁器	鉢	—	(4.6)	(9.1)	—	1/8	20	底部片である。白濁した施釉。外面に高台脇に回線、体部下半に縦筋文様、内面見込外周に圏線。ハの字に踏ん張るやや背高の高台。
179	SE14	古代	須恵器	杯B	—	(1.8)	(8.0)	—	細片	細片	底部片。断面台形の輪高台。
180	SE14	古代	須恵器	杯	(12.7)	(3.4)	—	1/7	—	細片	杯の口縁部片である。直立して立ち上がる体部を持つ。
181	SE15	中世	丹波焼	甕	—	(4.1)	—	細片	—	細片	口縁部の細片である。退化したN字状口縁でしゃくれたような形体を持つ。稲荷山期。
182	SE16	中世	丹波焼	甕	—	(13.3)	—	細片	—	細片	口縁部の細片である。退化したN字状口縁で、しゃくれた形体を持つ。稲荷山期。
183	SE15	中世	土師器	堝	—	(3.8)	—	細片	—	細片	口縁部の細片である。外面に退化した断面台形の鍔を持つ。
184	SE15	中世	青磁	碗	(16.7)	(3.0)	—	細片	—	細片	口縁部片である。外面に稚拙な蓮弁文を陽刻する。釉調は濃緑色を呈しやや濁る。
185	SE17	中世	土師器	小皿	(6.0)	(0.9)	(5.0)	1/12	1/4	20	糸切皿。短い体部を外開きに立ち上げ、端部をやや尖らせておえる。
186	SE17	中世	土師器	小皿	(7.0)	(0.8)	(6.0)	1/4	1/4	30	手づくね皿。器高が浅くコースター状の皿で、体部を短く、口縁端部は丸くおえる。
187	SE17	中世	土師器	皿	(11.0)	(2.2)	(6.0)	1/24	1/7	20	手づくね皿。外開きの体部と丸底の底部を持つ。口縁部はやや尖り気味で内外面を横ナデ。底部に指頭痕跡が観察される。
188	SE17	中世	瓦器	椀	—	(2.7)	(5.3)	欠	1/3	10	椀底部片。ジグザグ暗文。内面にのみ粗いミガキ。高台は断面三角形の輪高台を貼付る。
189	SE17	中世	瓦器	椀	—	(3.4)	(5.4)	欠	1/3	10	椀底部片。ジグザグ暗文。直線的に立ち上がる体部。内面は細かなハケ調整の後、ミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付る。
190	SE17	中世	瓦器	椀	(11.9)	(4.0)	(4.9)	細片	完形	60	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部をわずかに内傾させる。内面のみミガキ調整。高台は低い輪高台を貼付。ゆがみ有り。内面に縦方向の分割線が認められる。
191	SE17	中世	瓦器	椀	11.5	(4.5)	(3.9)	1/2	1/20	40	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は湾曲して立ち上がり、口縁部で軽くくの字に折る。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。ゆがみ有り。
192	SE17	中世	瓦器	椀	11.8	4.5	5.0	完形	完形	100	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は外開きで直線的に立ち上がり、口縁端部をやや内径させておえる。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。
193	SE17	中世	瓦器	椀	(11.8)	(4.4)	(5.0)	2/3	3/4	40	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は湾曲して立ち上がる。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。
194	SE17	中世	瓦器	椀	11.5	(4.5)	(5.2)	1/2	1/20	40	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は湾曲して立ち上がる。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。ゆがみが大きい。
195	SE17	中世	瓦器	椀	(12.0)	(4.4)	(5.6)	ほぼ完形	ほぼ完形	95	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。体部は湾曲して立ち上がり、上半を軽くくの字に折る。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。
196	SE17	中世	瓦器	椀	(11.0)	(4.5)	(4.3)	1/3	1/4	40	丹波型瓦器椀。ジグザグ暗文。湾曲して立ち上がる体部。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。部分的に炭素未吸着。
197	SE17	中世	須恵器	鉢	—	(3.5)	—	1/20	欠	細片	須恵器鉢の細片。上方に拡張する口縁部を持つ。
198	SE17	中世	須恵器	鉢	—	(2.5)	—	1/12	—	2	須恵器鉢の細片。上方に拡張する口縁部を持つ。
199	SE17	中世	須恵器	甕	(33.6)	(5.3)	—	1/12	—	5	口縁部片で厚手の個体である。口縁部は外面に面を持ち直下に平行タタキの痕跡が観察される。
200	SK11	中世	土師器	小皿	(8.3)	(1.3)	(6.3)	1/12	1/4	30	体部を小さく立ち上げ、口縁端部を尖らせ気味におえる。ロクロ土師器。底部は切り離しは糸切り手法。
201	SK11	中世	土師器	皿	(10.8)	(2.1)	(5.6)	1/5	1/4	20	内弯気味に立ち上がる体部で口縁端部をやや尖らせ気味におえる。内外面は横ナデ調整。
202	SE20	中世	土師器	皿	(13.0)	(2.3)	(6.0)	1/12	1/7	20	手づくね皿。外開きの体部と丸底の底部を持つ。口縁部はやや尖り気味で内外面を横ナデ。底部に指頭痕跡が観察される。
203	SD１	中世	瓦質土器	火鉢	(40.0)	(10.1)	(6.0)	細片	—	細片	体部を外開きに立ち上げ、端部を肥厚させて上端に面を持つ。ミガキなどの調整は摩滅により不明。
204	下層包含層	中世	土師器	小皿	7.8	1.2	—	3/4	1/12	細片	手づくね皿、体部を外開きに立ち上げ、端部を丸くおえる。
205	下層包含層	中世	土師器	小皿	(8.2)	(1.5)	(6.5)	1/3	1/3	細片	手づくね皿、やや丸底になる器形。体部を外開きに立ち上げ、端部を丸くおえる。
206	下層包含層	中世	土師器	皿	(15.0)	(1.7)	—	1/3	1/3	30	体部上半・口縁部を横ナデ調整。底体部の境は丸く立ち上がる。摩滅のため細かい調整は不明。
207	下層包含層	中世	土師器	堝	(25.8)	(9.2)	—	1/4	—	20	甕型の器形。口縁部を軽くくの字に折り、端部上面に面もつ。外面胴部に平行タタキ。
208	下層包含層	中世	土師器	堝	(22.8)	(8.6)	—	1/5	—	20	甕型の器形。口縁部をくの字に折り、端部上面に面もつ。外面胴部に平行タタキ。
209	下層包含層	中世	土師器	堝	(19.1)	(4.3)	—	1/12	—	細片	頸部を直立させ、端部を肥厚させる。体部外面に平行タタキ。
210	下層包含層	中世	須恵器	堝	(26.4)	(4.8)	—	1/12	—	細片	体部を直立気味に立ち上げ、口縁端部を玉縁状に肥厚させる。外面に平行タタキ、内面にあて具痕跡が観察される。
211	下層包含層	中世	土師器	堝	22.7	—	腹径 26.5	3/4	底部欠	50	口縁部をくの字に外反させ、端部上面に目を持つ。外面平行タタキ、内面にはあて具痕跡とハケ目調整が施される。

表10　遺物観察表

No.	出土地点	時代	種別	器種	法量			残存率			備考
					口径	器高	底径他	口縁部	底部	全体	
212	下層包含層	中世	瓦器	皿	(7.8)	(1.4)	(5.0)	1/2	完存	40	手づくね皿。器高が浅く体部は短く立ち上がり口縁部を丸くおえる。
213	下層包含層	中世	瓦器	皿	8.2	1.6	6.0	完形	完形	95	内面および口縁部を横ナデ、ミガキなし。炭素は安定的に吸着する。底体部～体部を丸く立ち上げ、口縁端部は丸くおえる。
214	下層包含層	中世	瓦器	皿	(9.3)	(1.4)	6.0	1/6	1/6	20	内面および口縁部を横ナデ、ミガキなし。炭素は安定的に吸着する。底体部～体部を丸く立ち上げ、口縁端部は丸くおえる。
215	下層包含層	中世	瓦器	椀	(12.7)	(4.4)	(6.0)	1/3	1/10	40	丹波型瓦器椀。体部は直線的に立ち上がり端部をやや丸くおえる。内面のみミガキ調整。高台は断面三角形の輪高台を貼付。
216	下層包含層	中世	瓦器	椀	(10.8)	(3.6)	—	1/5	—	10	内面のみ粗いミガキ調整。外面は上半のみ横ナデ、体部下半には指頭痕跡が顕著。外面下半および口縁端部に炭素の未吸着部分が認められる。
217	下層包含層	中世	瓦器	椀	(13.2)	(4.1)	—	1/5	—	10	内面のみ粗いミガキ調整。外面は上半のみ横ナデ、体部下半には指頭痕跡が顕著。
218	下層包含層	中世	瓦器	椀	(12.8)	(3.8)	—	1/3	—	20	丹波型瓦器椀。体部は内湾しながら立ち上がり端部をとがらせ気味におえる。内面のみミガキ調整。
219	下層包含層	中世	瓦器	椀	—	(1.8)	—	—	3/4	10	丹波型瓦器椀。体部は内湾しながら立ち上がり端部をとがらせ気味におえる。内面のみミガキ調整。
220	下層包含層	中世	瓦器	椀	(14.6)	(5.3)	(6.0)	1/3	2/3	40	丹波型瓦器椀。体部は内湾しながら立ち上がり端部をとがらせ気味におえる。器面が摩滅のため調整不明。輪高台、断面三角形。
221	下層包含層	中世	瓦器	椀	(14.2)	(5.3)	6.6	1/3	完形	60	丹波型瓦器椀。体部は内湾しながら立ち上がり端部をとがらせ気味におえる。内面のみミガキ、平行ジグザグ暗文。輪高台で断面逆三角形。
222	下層包含層	中世	瓦器	椀	(14.6)	(5.3)	(6.0)	1/3	2/3	40	丹波型瓦器椀。体部は直線的に立ち上がり端部をとがらせ気味におえる。内面のみミガキ調整、平行暗文。輪高台、断面四角形。
223	下層包含層	中世	須恵器	椀	(14.8)	(3.4)	—	1/10	—	細片	外反させて直線的な体部を持ち、口縁部は丸くおえる。
224	下層包含層	中世	須恵器	椀	(14.8)	(4.6)	—	細片	—	細片	口縁部がやや肥厚する。
225	下層包含層	中世	須恵器	鉢	(24.4)	(3.4)	—	1/9	細片	5	上下に拡張する口縁部を持つ。口縁部上端は丸くナデる。
226	下層包含層	中世	須恵器	鉢	(30.8)	(6.7)	—	1/12	—	細片	口縁端部を内傾させて拡張する。外面に自然釉。
227	下層包含層	中世	須恵器	鉢	—	(7.5)	(9.2)	—	1/3	20	外開きで直線的にたちがある体部をもつ。内面は平滑にナデ調整されるが、外面は水引痕跡が観察される。
228	包含層	中世	青磁	碗	—	(3.2)	—	—	1/3	20	外面に線描きの蓮弁文、内面草花文を陰刻する。
229	包含層	中世	青磁	碗	—	(3.3)	(6.3)	—	完形	20	外面に線描きの蓮弁。内面に草花文と思われる陰刻が施される。高台内面のみがケズリによって無釉。
230	包含層	中世	白磁	碗	(14.8)	(2.6)	—	1/7	—	細片	Ⅳ類碗である。玉縁口縁をもつ。体部下半は露胎である。
231	包含層	16世紀	染付磁器	碗	(11.8)	(4.6)	—	1/9	—	細片	中国産磁器。体部を外開きに開き、端部をやや尖らせ気味におえる。内面上下に二重区画線。外面は２重区角線と花卉文。
232	包含層	16世紀	瀬戸美濃焼	ソギ皿	—	(1.7)	—	—	1/7	15	折縁のソギ皿である。器壁が厚く大型のもので、灰釉を施釉する。
233	包含層	16世紀	瀬戸美濃焼	ソギ皿	(11.8)	(2.3)	—	1/3	—	1/3	ソギ皿体部を口縁部手前で折り、端部に玉縁状としやや上方につまむ。
234	包含層	中世	土製品	土錘	長さ 5.3	幅 2.3	—	—	—	50	棒状土錘、両端に直径５㎜の円穿をもつ。
235	包含層	中世	土製品	土錘	長さ 4.4	幅 1.1～1.5	—	完形	完形	完形	棒状土錘
236	包含層	中世後半	丹波焼	擂鉢	—	(4.9)	—	1/20	—	細片	口縁端部を尖り気味におえる。一本描きの卸目を持つ。内面に自然釉。
237	包含層	中世	丹波焼	擂鉢	—	(6.2)	—	1/20	—	細片	口縁端部を内傾させて尖り気味におえる。一本描きの卸目を持つ。内面に自然釉。
238	包含層	16世紀	丹波焼	鉢	(22.5)	(4.8)	—	1/18	—	細片	
239	包含層	近世	丹波焼	鉢	(25.5)	(4.3)	—	1/12	—	細片	幕末頃の陶器鉢である。肩部に自然釉がかかる。頚部を湾曲しながら立ち上げ、口縁端部を上方につまむ。

表11　遺物観察表

金属製品

報告No.	出土遺構	種別	器　種	法　量（cm）			備　考
				長	幅	厚	
F 1	SE 2	銅製品	不明	3.05	1.4	0.15	
F 2	SD 1	鉄器	和釘	6.1	1.05	0.65	
F 3	SE 1	鉄器	和釘	8.45	0.5	0.45	

木製品

報告No.	出土遺構	種別	器　種	法　量（cm）			備　考
				長	幅	厚	
W 1	SE16	木器	漆椀	口径（15.2）	器高（4.8）		
W 2	SE16	竹製品	不明	15.7	3.0	0.5	
W 3	SE16	竹製品	不明	18.1	2.3	0.4	
W 4	SE16	竹製品	不明	7.9	2.9	0.5～0.6	
W 5	SE16	木器	不明	16.2	2.7	0.6～0.9	
W 6	SE16	木器	不明	19.0	2.0	1.0～1.6	
W 7	SE16	木器	建築部材の転用材	33.1	10.6	1.2	
W 8	SE16	木器	桶の底板の転用材	30.7	4.8	1.2～1.4	
W 9	SE16	木器	木枠の転用材	30.6	4.3	1.6～2.1	
W10	SE 1	木器	曲物	直径 47.2	高さ 9.6	0.4	
W11	SE 1	木器	曲物	直径 47.2	高さ 9.0	0.4	
W12	SE 1	木器	曲物	直径 47.2	高さ 5.2	0.4	
W13	SE 1	木器	曲物	直径 47.0	高さ 29.0	0.6～1.2	
W14	SE 1	木器	曲物	直径 47.0	高さ 27.0	0.5	
W15	SE 1	木器	木札	20.0	2.1	0.4	
W16	SE 1	木器	木札	19.8	2.4	0.2	
W17	SE 1	木器	木札	17.5	2.1	0.2	
W18	SE20	木器	木簡	23.3	2.2	0.3	
W19	SE20	木器	木片	16.3	1.9	0.3	
W20	SE20	木器	木片	7.5	2.1	0.5	
W21	SE 1	木器	井戸枠	91.3	7.1	5.8	
W22	SE 1	木器	井戸枠	90.2	6.3	6.4	
W23	SE 1	木器	井戸枠	90.3	5.9	7.9	
W24	SE 1	木器	井戸枠	90.4	7.2	5.6	
W25	SE17	木器	井戸枠	89.3	7.0	5.1	
W26	SE17	木器	井戸枠	87.5	4.9	4.4	
W27	SE17	木器	井戸枠	88.1	6.9	4.0	
W28	SE17	木器	井戸枠	88.1	6.4	4.4	
W29	SE 3	木器	曲物	直径 50.0	高さ 24.5	0.5	
W30	SE14	木器	下駄	22.1	11.8	9.4	
W31	SE14	木器	部材	23.5	16.9	2.3	
W32	SE14	木器	部材	20.1	6.1	0.8	
W33	SE14	木器	部材	22.3	5.8	1.8～3.2	
W34	SE15	木器	部材	36.7	7.9	1.1	
W35	SE20	木器	井戸側板	99.9	14.7	2.1	

石製品

報告No.	出土遺構	種別	器　種	法　量（cm）				備考
				長	幅	厚	重量（g）	
S 1	包含層	打製石器	?	11.3	4.7	1.0	57.6	
S 2	SE 1	石製品	石斧	11.7	4.6	3.1	256.0	
S 3	SE17	石製品	石斧	14.8	5.5	（2.3）	292.9	
S 4	SE16	石製品	砥石	（9.2）	（3.25）	1.5	70.4	
S 5	包含層	石製品	砥石	6.9	3.8	1.2	46.3	
S 6	SE 2	石製品	砥石	7.1	3.6	1.3	50.5	
S 7	SK 4	石製品	砥石	14.3	6.7	4.5	798.7	
S 8	SK 4	石製品	石鍋				74.0	

第５章　まとめ

１．東古佐遺跡の変遷

篠山盆地の南西部に位置する本遺跡は篠山川の南岸に位置する段丘化した地形に立地する。集落の立地する場所は北及び東側に丘陵が隣接する裾部にあたるが、調査区東半分に埋没河川が存在するなど安定した場所とはいえない。丘陵裾部の地山をベースとする範囲は北側の現集落側に位置すると推定される。

弥生時代～古墳時代にかけては旧河道に面した湿潤な場所に多数の土器を投棄した痕跡が見つかった。住居址の検出はできなかったが北側の隣接地に集落本体が存在することを窺わせてくれる。また、丘陵上には多くの古墳の存在が知られており、調査区内からも埴輪片（44）が出土するなどした。これらは、東古佐遺跡集落の墓域と考えられる。

古代の遺物も少数ではあるが出土した。残念ながら建物の復元には至らなかったが前代同様、北側に集落本体が存在することが推測される。平安時代中期の遺物はほとんどなく、15世紀～近世までの遺物も数はごく僅かである。しかし、状況から考えると集落は立地や範囲の変遷を経ながら、継続的に維持されたものと思われる。東古佐遺跡の集落は少なくとも弥生時代後期から現在まで維持されてきたのであろう。

２．中世集落の遺物

中世段階の遺物について器種ごとに第４章で見たが、これらの年代観について確認しておきたい。先ず瓦器椀はＡタイプとしたものが13世紀前半代頃（伊野編年Ⅳ～Ⅴ期）、Ｂタイプの椀は13世紀後半から14世紀前半頃（伊野編年ではⅦ期の相当する）である。

丹波焼甕は13世紀後半と14世紀代のものが含まれる。長谷川編年のⅢ期（13世紀後葉～14世紀前葉）、Ⅳ期（14世紀中葉～14世紀後葉）のものが中心となる。須恵器鉢はＡタイプが12末～13世紀前半、Ｂタイプが13世紀後半、Ｃタイプは14世紀前半頃、Ｄタイプは14世紀後半ごろと考えられる。このほか土師器皿には14世紀に下るものが井戸の出土遺物に認められる。堝は甕型に近い形態のものが13世紀前半、堝型が13世紀代後半のものと､14世紀代前半のものがある。

以上のことから、下層包含層とした遺物包含層は混入を含むものの瓦器椀Ａタイプや土師器堝に甕型に近いものがあること。瓦器椀や須恵器鉢には後出のものが多く混じるが、13世紀前半の遺物群が一定量混じることは確実といえる。また、柱穴出土の遺物は建物の時期を決定できる遺物を欠くが、比較的下層包含層に近い時期の遺物が多く含まれている。このことから掘立柱建物は多くがこの時期に含まれる可能性が高い。

次に井戸や土坑であるが、先ずＳＥ２は須恵器鉢138が13世紀前半であり、瓦器椀はＢａタイプが多くを占める。

一方、ＳＥ５では口径が11㎝前後と小さいものが多く、比較的暗文が粗いＢｂタイプが多くを占めており、ＳＥ２よりも時期が下る一群と思われる。SE17も瓦器椀がＳＥ５に近い形態のものが多い。丹波焼甕148は長谷川編年のⅢ期（13世紀後葉～14世紀前葉）にあたる。このためＳＥ５・17はＳＥ２より後出のもので13世紀末～14世紀前半ごろの年代が想定される。さらにこれに近い時期のものはＳＥ７があるが、堝170は14世紀に下る可能性があるので、ＳＥ５・17よりは少し新しいと考えられる。

そして、ＳＥ１は丹波焼甕Ⅳ期および須恵器鉢Ｃタイプのものが含まれ、土師器堝も後出のものである。ＳＫ４も丹波焼甕Ⅳ期、須恵器鉢Ｃタイプが出土している。このため、ＳＥ１・ＳＫ４は14世紀中頃～後半の遺構と考えられ、本遺跡の中世遺構の中では最も新しいと考えられる。

３．東古佐遺跡と篠山盆地の中世集落

東古佐遺跡から検出された井戸は11基であるが、SE３・５・６・７・17などの井戸A群、SE１・２周辺の井戸B群、西端SE14～16の井戸C群、さらに東側に離れてSE20があり、大きくは４つのグループに分かれる。このうち井戸C群は掘削を途中で放棄しており、井戸として機能した形跡はない。このため主なものは井戸A・B群の２つのグループであるが遺物からすると、井戸B群でSE２→SE１、井戸A群ではSE３・５・17→SE７の順で変遷している。

つまり、これらの井戸は時期ごとに掘削が繰り返されたもので、少なくとも井戸の集中場所は長期間に渡って集落の水場として使われたと考えられる。

一方、掘立柱建物からは時期を決定できる遺物が出土していないが、柱穴から出土した遺物をみると13世紀前半～中頃までのものが多い。このため、下層包含層やSE２の時期までの建物が多い印象を持つ。これらから推測すると、建物は13世紀中ごろを画期として現集落の方に大半が移動したと思われる。ただし、井戸は水源の関係から移動せず、長く水場として維持されたと思われる。さらにSE13のような近世の井戸が存在することを考えると、北側の県道下に移動しながら近代まで井戸が掘削され続けた可能性が高く、調査区は14世紀頃から集落が移動し耕作地に代わったと思われる。

なお、集落はSB１・２周辺では建て替えが１回程度行われたが、下層包含層が残される周辺から以西は柱穴の密度が稠密で、時期的にも13～14世紀前半までの長期間維持されている。従って、SB３～７周辺は建物群が長く維持されたが、地盤の悪いSB１・２周辺（屋敷地A）は13世紀のうちに北側の現集落に移動したのであろう。

なお、今回の調査区の両端にはSD１・２が検出されているが、２つの溝は95mの間隔をおいて、それぞれN－10°－W、N－20°－Wの軸方位をもつ。限られた範囲の検出であるため、この軸方位に意味があるかどうかは検討の余地があるが、SB１・２でもN－６°－Wを向くなど、ほとんどの建物が西側に傾く軸方位を向く。このことから大正以前（第２章参照、耕地整理）の地割は西に６～20前後傾く軸方位を持っていたと推定される。

東古佐遺跡の東約500mでは同路線の県道拡幅事業で東中道ノ坪遺跡の調査が行われている。この遺跡も北側に立地する小丘陵の裾部に立地する。検出された集落は13世紀前半代を中心とするもので、掘立柱建物や井戸・溝・土坑などが検出されており、東古佐遺跡の下層包含層の時期に近いものと考えられ、柱穴出土の遺物にもこの時期のものが認められるので、集落の初期段階は併存した可能性が高い。ただし、東中道ノ坪遺跡では13世紀前半段階の短期間で集落は機能を終えている。しかしこれは、東古佐遺跡と同様に集落の移動に伴う現象である可能性が高い。いずれにしてもこの地域では、島状の小丘陵の山裾部に小規模な集落が形成されるが、13世紀前半頃に集落が拡大し、13世紀後半段階に再び丘陵際に縮小する傾向を両遺跡からは読み取ることができる。

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・尾嵜大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1．はじめに

篠山市東吹・網掛にある東古佐遺跡は、標高119m前後で篠山川の西500～600mに立地する。当遺跡より検出された試料について、各土層の時期の把握を目的として、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表12のとおりである。

試料№１（PLD－17276）は、№１～２地区のトレンチ、⑤層青灰色シルト質細砂より出土した自然木の断片である。最外年輪は確認されていない。№１～２地区は調査区の東寄りに位置し、篠山川の本流または本流に近い分流と考えられる自然流路が検出されている。⑤層の上にある③、④層が旧河道の埋土で、③層上面が古墳時代以降の遺構面である。

試料№２、№３（PLD－17277、PLD－17278）は、№10～11地区のトレンチより採取した土壌で、試料№２（PLD－17277）が地表下1.7mの⑦層黒灰色シルト、試料№３（PLD－17278）が地表下1.2mの⑤層黒灰色シルトである。№10～11地区は、②層上面が古墳時代以降の遺構面である。

試料№４（PLD－17279）は、№14～15地区のトレンチ、⑫層黒灰色シルトより採取した土壌である。

表12　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前　処　理
PLD－17276	試料№１ 地区：№１～２　トレンチ 層位:⑤層　青灰色シルト質細砂 深度：地表下1.4m	試料の種類：生材 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N， 水酸化ナトリウム：１N，塩酸：1.2N）
PLD－17277	試料№２ 地区：№10～11　トレンチ 層位：⑦層　黒灰色シルト 深度：地表下1.7m	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分　106μm 超音波洗浄 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD－17278	試料№３ 地区：№10～11 トレンチ 層位：⑤層　黒灰色シルト 深度：地表下1.2m	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分　106μm 超音波洗浄 酸洗浄（塩酸：1.2N）
PLD－17279	試料№４ 地区：№14～15 トレンチ 層位：⑫層　黒灰色シルト 深度：地表下1.5m	試料の種類：土壌 状態：wet	湿式篩分　106μm 超音波洗浄 酸洗浄（塩酸：1.2N）

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製　1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3．結　　果

表13に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を、第９図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±１σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：INTCAL09）を使用した。なお、１σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表13　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$（‰）	暦年較正用年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代（yrBP±１σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD－17276 試料№１	－25.55±0.21	1774±17	1775±15	233AD(39.5%)259AD 297AD(28.7%)321AD	175AD(1.5%)190AD 212AD(93.9%)337AD
PLD－17277 試料№２	－22.45±0.22	4940±20	4940±20	3760BC(15.0%)3742BC 3715BC(29.7%)3692BC 3686BC(23.5%)3661BC	3769BC(95.4%)3658BC
PLD－17278 試料№３	－21.90±0.20	3682±21	3680±20	2131BC(47.9%)2085BC 2052BC(20.3%)2031BC	2140BC(91.1%)2017BC 1996BC(4.3%)1980BC
PLD－17279 試料№４	－24.95±0.22	5259±23	5260±25	4223BC(8.9%)4209BC 4156BC(16.0%)4133BC 4066BC(21.9%)4037BC 4021BC(21.4%)3995BC	4229BC(12.8%)4200BC 4170BC(22.1%)4127BC 4120BC(5.3%)4096BC 4081BC(55.2%)3985BC

4．考　　察

以下２σ暦年代範囲を基に述べる。土器編年との対応関係については、藤尾（2009）、小林謙一（2008，2009）、小林達雄編（2008）を参照した。

試料№１（PLD－17276）の自然木は、１σ暦年代範囲（確率68.2％）で233－259 cal AD（39.5％）および297－321 cal AD（28.7％）、２σ暦年代範囲（確率95.4％）で175－190 cal AD（1.5％）および

212－337 cal AD（93.9%）となり、2世紀後半～4世紀前半の範囲を示した。これは、弥生時代後期～古墳時代前期にあたる。ただし、部位不明木材の場合、最外年輪部からの年輪分だけ枯死・伐採年代より古い年代となる（古木効果）。

試料№2（PLD－17277）の土壌は、1σ暦年代範囲で3760－3742 cal BC（15.0%）、3715－3692 cal BC（29.7%）、3686－3661 cal BC（23.5%）、2σ暦年代範囲で3769－3658 cal BC（95.4%）となった。これは、縄文時代前期にあたる。試料№3（PLD－17278）の土壌は、1σ暦年代範囲で2131－2085 cal BC（47.9%）および2052－2031 cal BC（20.3%）、2σ暦年代範囲で2140－2017 cal BC（91.1%）および1996－1980 cal BC（4.3%）となった。これは、縄文時代後期にあたる。

試料№4（PLD－17279）の土壌は、1σ暦年代範囲で4223－4209 cal BC（8.9%）、4156－4133 cal BC（16.0%）、4066－4037 cal BC（21.9%）、4021－3995 cal BC（21.4%）、2σ暦年代範囲で4229－4200 cal BC（12.8%）、4170－4127 cal BC（22.1%）、4120－4096 cal BC（5.3%）、4081－3985 cal BC（55.2%）となった。これは、縄文時代前期にあたる。

いずれも層序に矛盾はなかった。測定値は上述の通りだが、土壌試料の場合、堆積環境によっては値に幅が出る可能性があり、注意を要する。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy：The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425－430.

Bronk Ramsey, C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355－363.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：9－54，雄山閣．

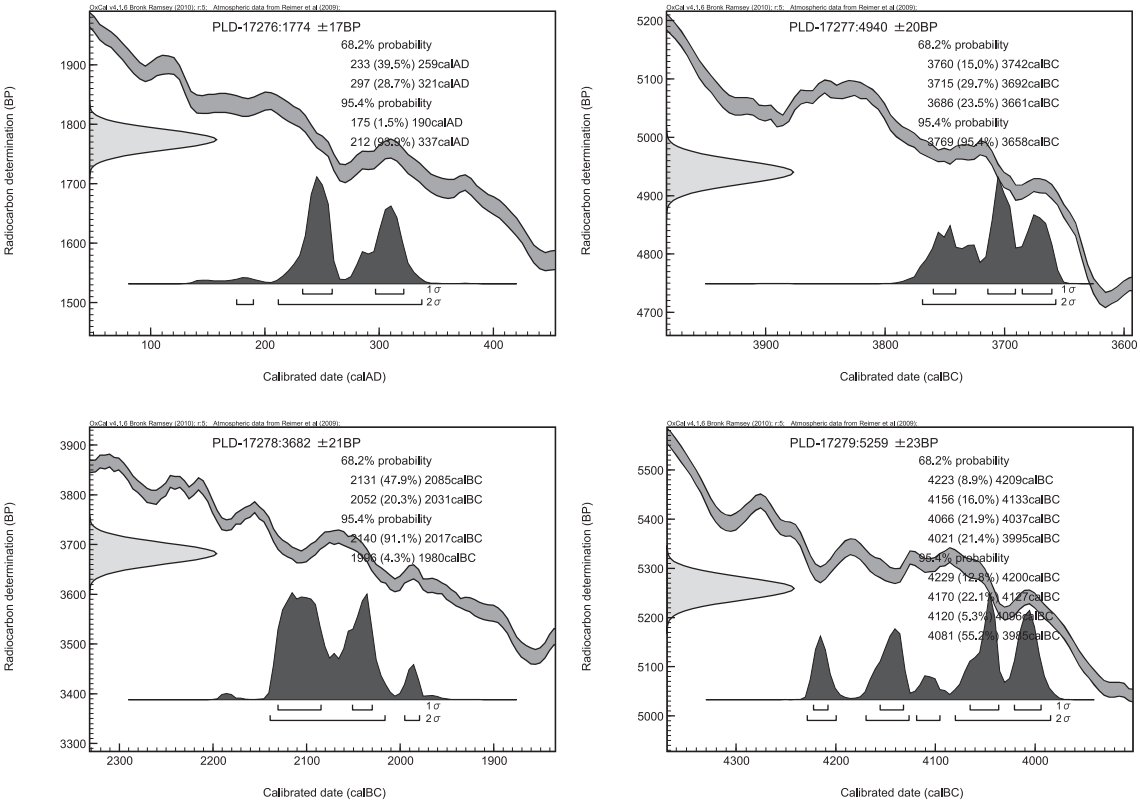
小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2　歴史のものさし―縄文時代研究の編年体系―」：257－269，同成社．

小林謙一（2009）近畿地方以東の地域への拡散．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：55－82，雄山閣．

小林達雄編（2008）総覧縄文土器．1322p，アム・プロモーション．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3－20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.（2009）IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111－1150.


PLD-17276:1774 ±17BP
68.2% probability
233 (39.5%) 259calAD
297 (28.7%) 321calAD
95.4% probability
175 (1.5%) 190calAD
212 (93.9%) 337calAD
PLD-17277:4940 ±20BP
68.2% probability
3760 (15.0%) 3742calBC
3715 (29.7%) 3692calBC
3686 (23.5%) 3661calBC
95.4% probability
3769 (95.4%) 3658calBC
PLD-17278:3682 ±21BP
68.2% probability
2131 (47.9%) 2085calBC
2052 (20.3%) 2031calBC
95.4% probability
2140 (91.1%) 2017calBC
1996 (4.3%) 1980calBC
PLD-17279:5259 ±23BP
68.2% probability
4223 (8.9%) 4209calBC
4156 (16.0%) 4133calBC
4066 (21.9%) 4037calBC
4021 (21.4%) 3995calBC
95.4% probability
4229 (12.6%) 4200calBC
4170 (22.1%) 4127calBC
4120 (5.3%) 4096calBC
4081 (55.2%) 3995calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)
Calibrated date (calBC)
1σ
2σ

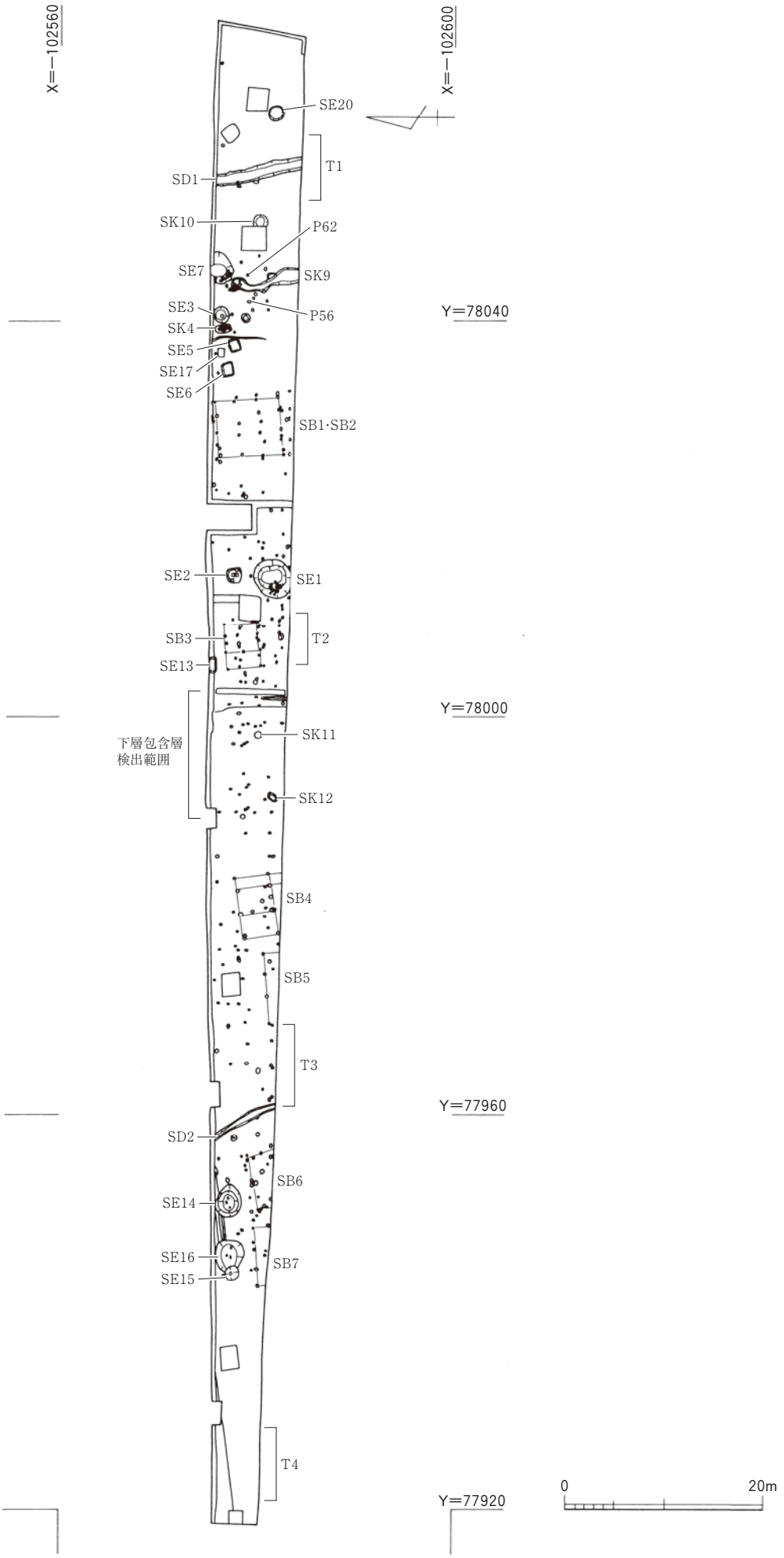
第 9 図　暦年較正結果

図　版

図版1　調査区位置図

中池の坪
上池の坪
七面大天女
東古墳分館
旧河道の範囲
上ケジメの坪
能登の坪
東吹
(東吹) 飛地の坪 1号
今賀の坪
草木の坪
0
100m

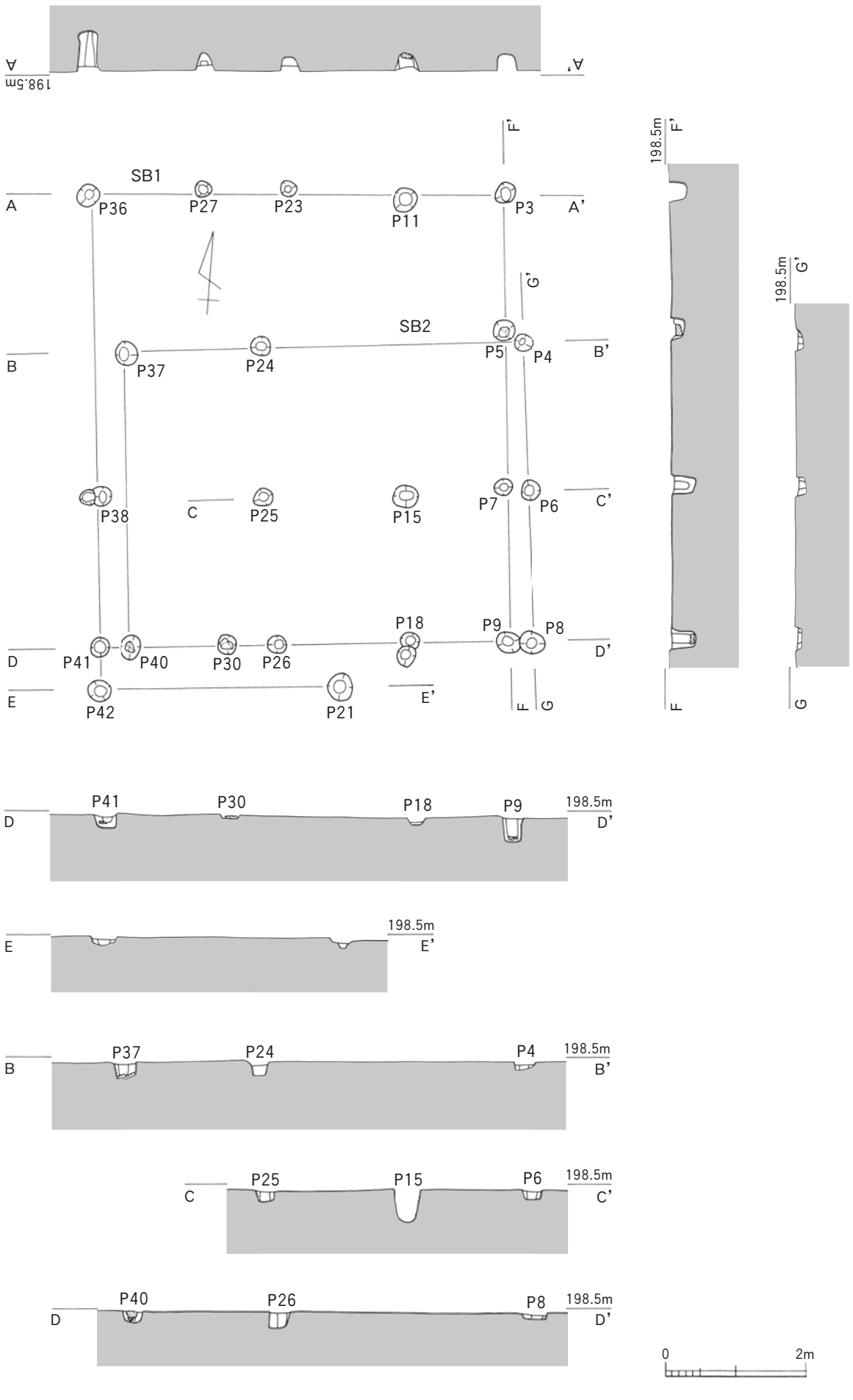
図版2　調査区全体図


X=−102560
X=−102600
SE20
T1
SD1
SK10
P62
SE7
SK9
SE3
P56
SK4
SE5
SE17
SE6
SB1·SB2
SE2
SE1
SB3
T2
SE13
下層包含層
検出範囲
SK11
SK12
SB4
SB5
T3
SD2
SB6
SE14
SE16
SB7
SE15
T4
Y=78040
Y=78000
Y=77960
Y=77920
0
20m

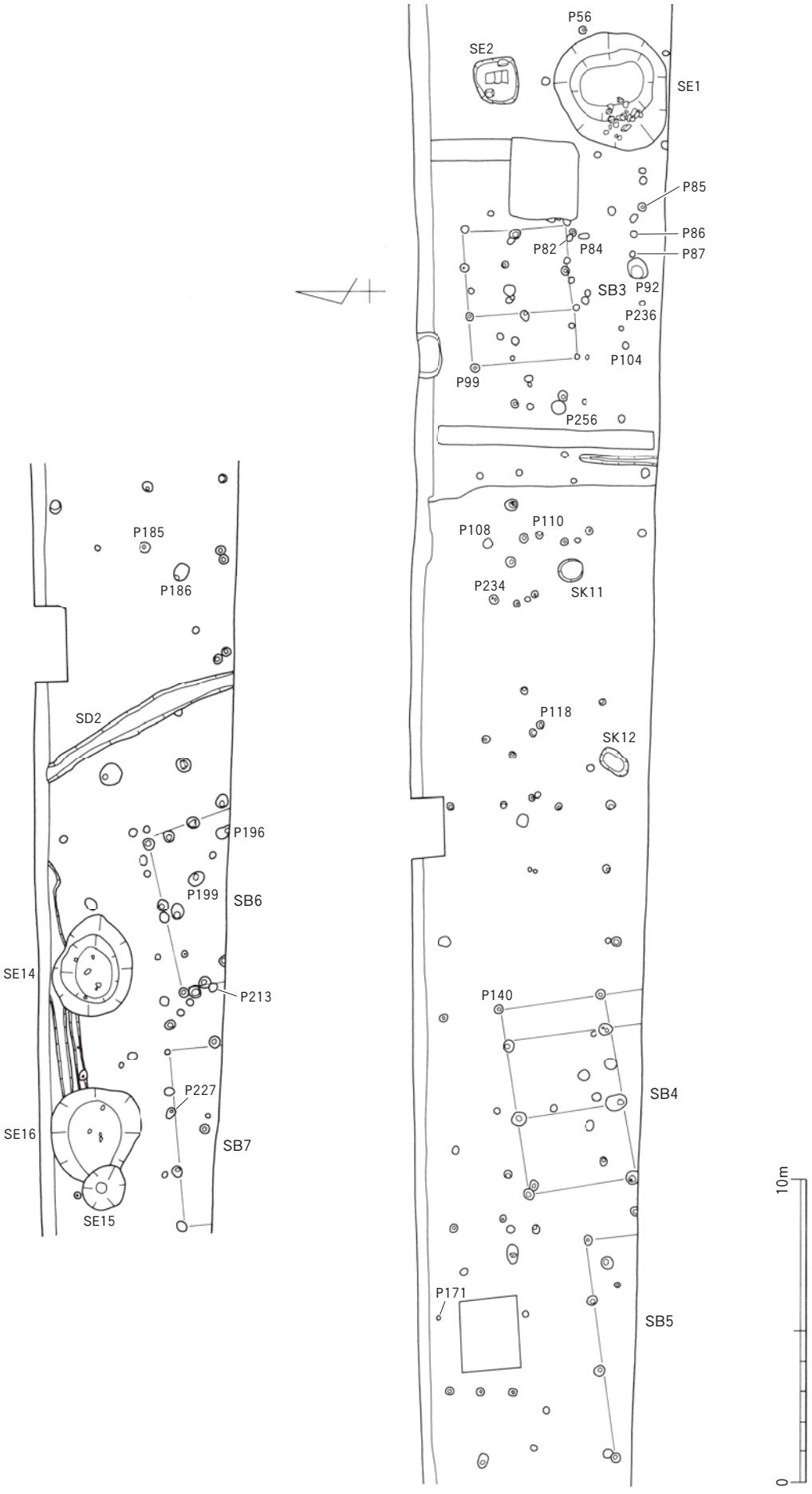
図版3　調査区断面図

1. 耕作土　シルト　砂混り　（床土、中世遺物包含）
2. 暗灰色　シルト　砂若干混入（土器片を若干含む）
3. 黄褐色　シルト　（土器片を若干含む）
4. 黄灰色　シルト
5. 暗黄褐色　細砂質シルト
6. 暗黄褐色　細砂混り シルト
7. 黄褐色　細砂質シルト　（庄内期の土器・炭を多数包含）
8. 黄褐色　中～細砂質シルト　（砂はレンズ状に混入、土器混入／T2）
9. 灰褐色　中～細砂質シルト　（土器・炭少量含む／T2）
10. 暗灰色　砂混り シルト　（T2）
11. 黒灰色　中～細砂質シルト　（土器・炭少量含む／T2）
12. 暗黄灰色　シルト　（T2）
13. 黒灰色　中～細砂混り シルト　（土器・炭少量含む／T2）
14. 暗黄灰色　シルト　細砂混り　（T3）
15. 暗灰色　シルト　（T3／土壌サンプルNo2）
16. 黒灰色　シルト　（腐食層・水性植物混入／T3）
17. 灰色　シルト　（T3／土壌サンプルNo3））
18. 黒灰色　シルト混り細砂　（T4）
19. 灰色　砂質シルト混り細砂（T4）
20. 暗灰色　シルト混り細砂　（T4）
21. 黒灰色　シルト混り細砂　（腐食層・植物遺体混入／T4）
22. 褐灰色　シルト混り細砂　（T4）
23. 黒灰色　シルト　（腐食層・植物遺体混入／T4）
24. 灰色　シルト　（T4）
25. 黒灰色　シルト混り細砂　（腐食層・植物遺体混入／T4）
26. 褐灰色　（腐食層・植物遺体混入／T4／
27. 黒灰色　シルト　土壌サンプルNo4）
28. 橙灰色　細砂質シルト
29. 橙灰色　シルト
30. 橙灰色　細砂質シルト
31. 黄褐色　シルト
32. 暗灰色　（暗赤灰）礫砂混り シルト　（中世溝埋土）
33. 黄灰色　シルト質細砂　（細砂がレンズ状に堆積・流水状の堆積）
34. 黄褐色　シルト
35. 黄灰色　シルト質中砂
36. 褐灰色　シルト質中細砂
37. 褐灰色　シルト　細砂混り
38. 暗灰褐色　細砂質シルト
39. 灰色　シルト質細砂
40. 黄灰色　シルト
41. 青灰色　シルト質細砂　（土壌サンプルNo1／T1）
42. 青灰色　シルト質細砂　（植物遺体混入／T1）
43. 黄灰色　シルト　（近世～現代水路埋土）
44. 黄灰色　細砂混り シルト　（近世～現代水路埋土）
45. 黄褐色

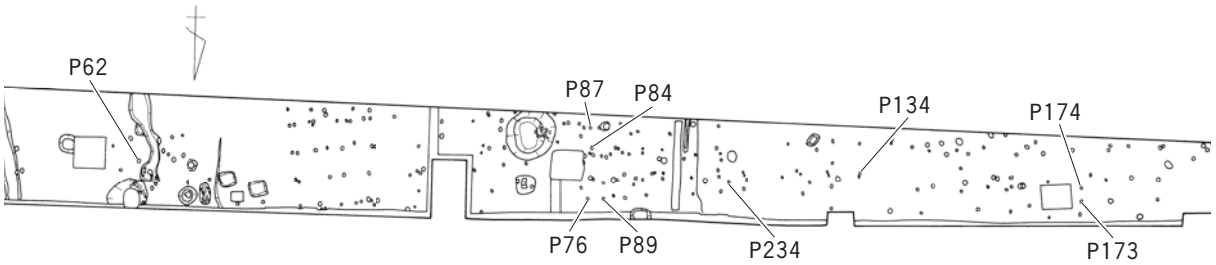
図版4 SB1・SB2 平面図・断面図

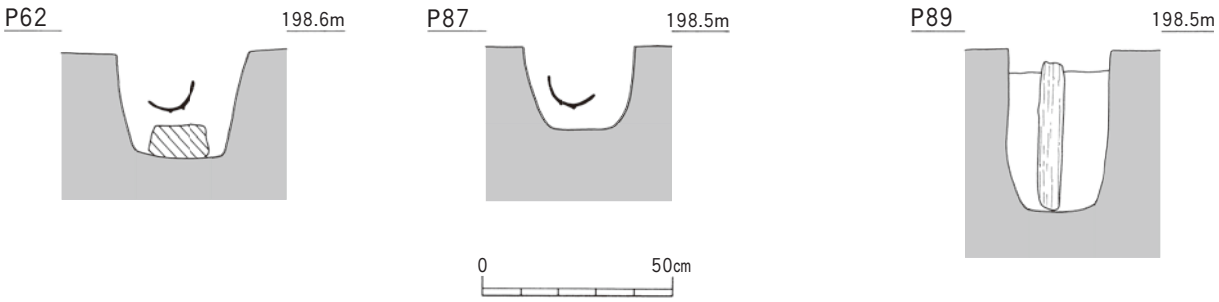


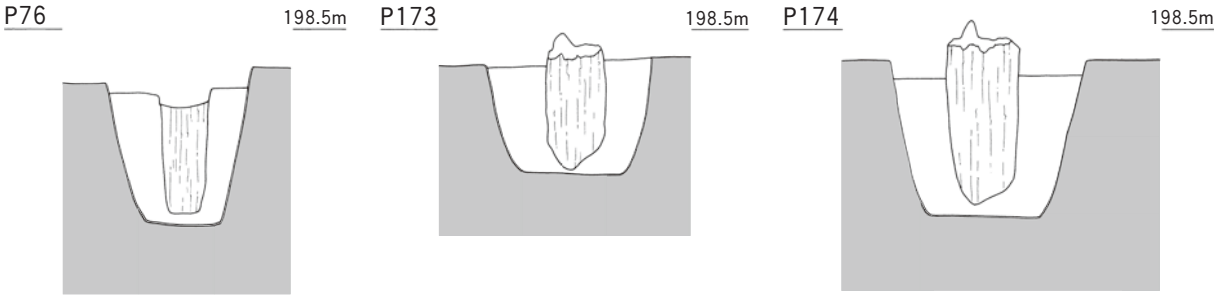
図版5　掘立柱建物　平面図

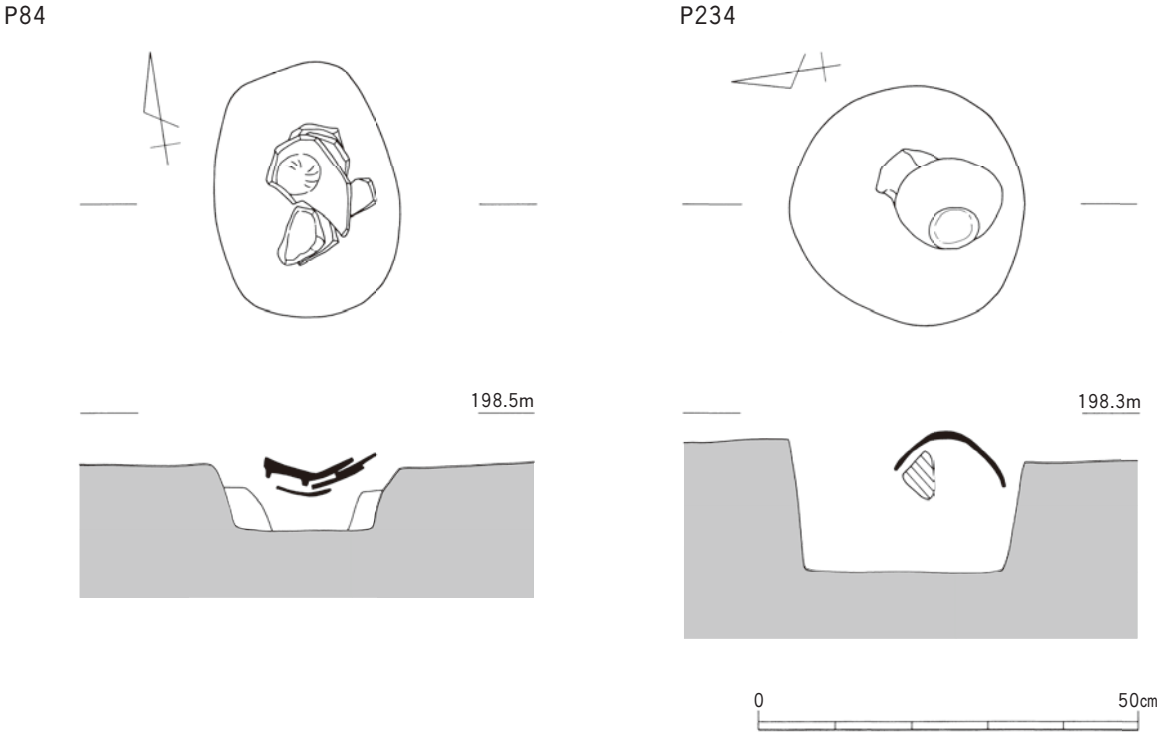


図版6　柱穴　平面図・断面図



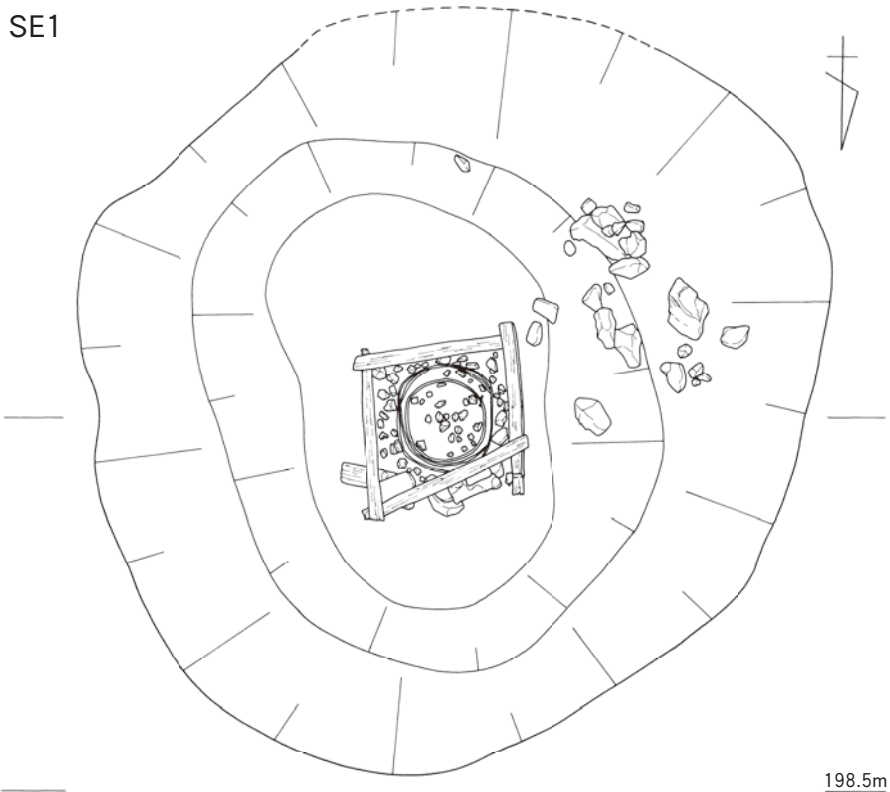


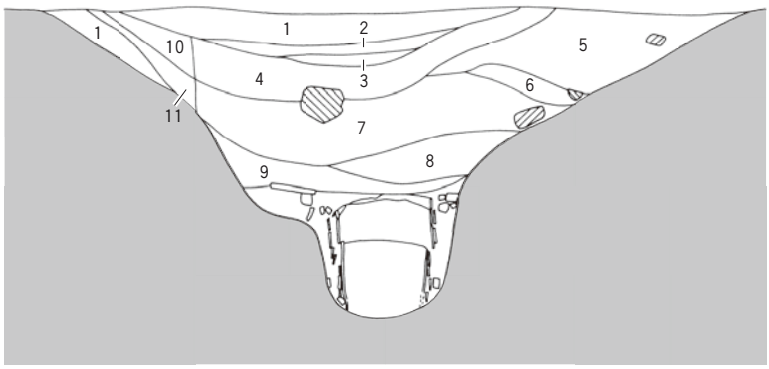




図版7　SE1・SE2　平面図・断面図

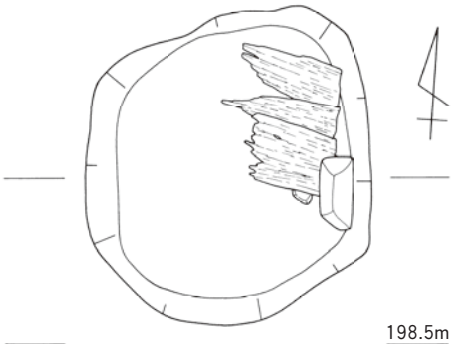
SE1

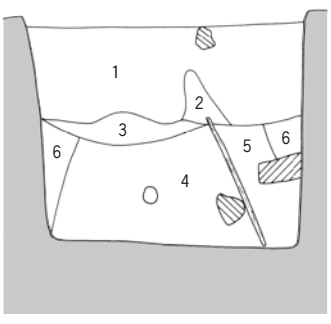




1. 10YR5／2　灰黄褐色　極細砂
2. 10YR5／6　黄褐色　極細砂～細砂
3. 10YR5／4　にぶい黄褐色　極細砂
4. 2.5Y5／2　暗灰黄色　シルト質極細砂
5. 10YR5／1　褐灰色　極細砂（マンガン少量含む）
6. 10YR5／2　灰黄褐色　シルト質極細砂
7. 2.5Y4／1　黄灰色　シルト質極細砂
8. 2.5Y4／2　暗灰黄色　シルト質極細砂
9. 5Y4／1　灰色　シルト質極細砂
10. 10YR5／2　灰黄褐色　極細砂～細砂
11. 10YR5／1　褐灰色　極細砂

SE2

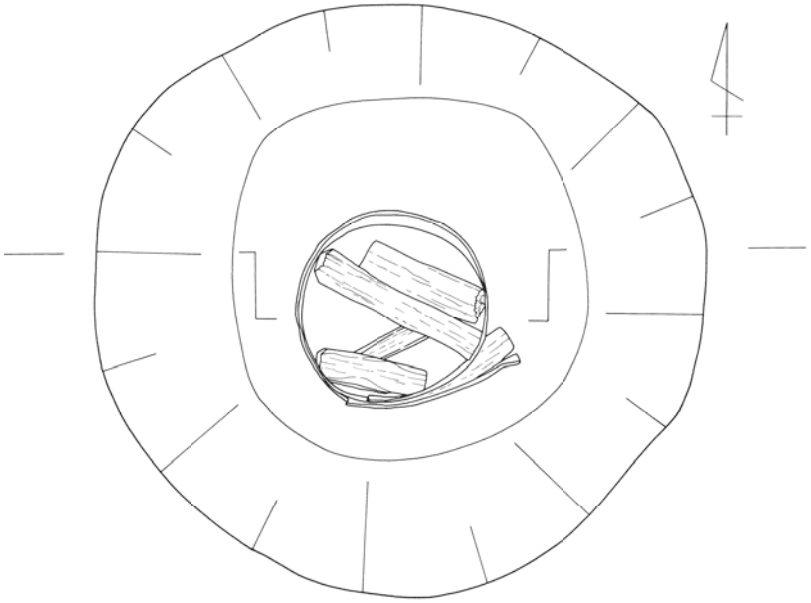




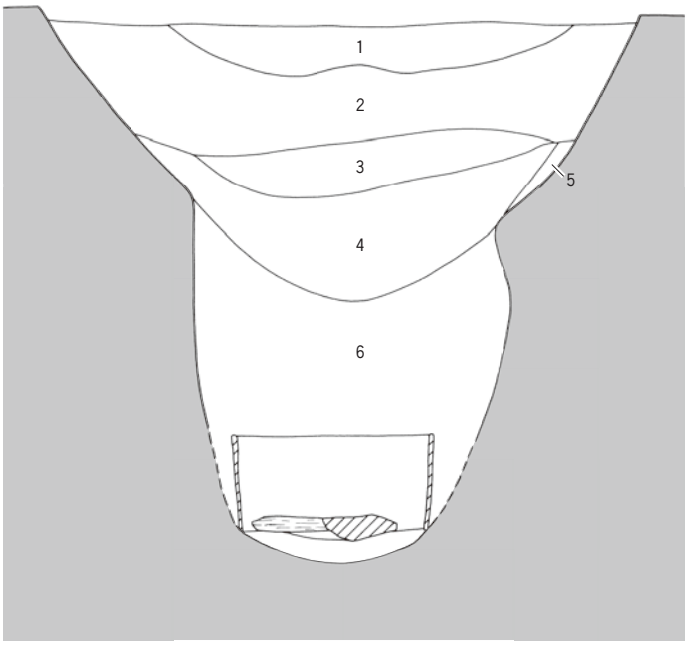
1. 10YR5／1　褐灰色　極細砂（粗砂を含む・埋土）
2. 5Y5／1　灰色　極細砂（枠板の痕跡）
3. 2.5Y4／1　黄灰色　シルト質極細砂
4. 5Y4／1　黄灰色　シルト質極細砂（炭を含む・枠内堆積土）
5. 5Y4／1　黄灰色　極細砂（掘方埋土）
6. 10YR4／1　褐色　極細砂（地上崩落土）

図版8　SE3　平面図・断面図

SE3



198.7m

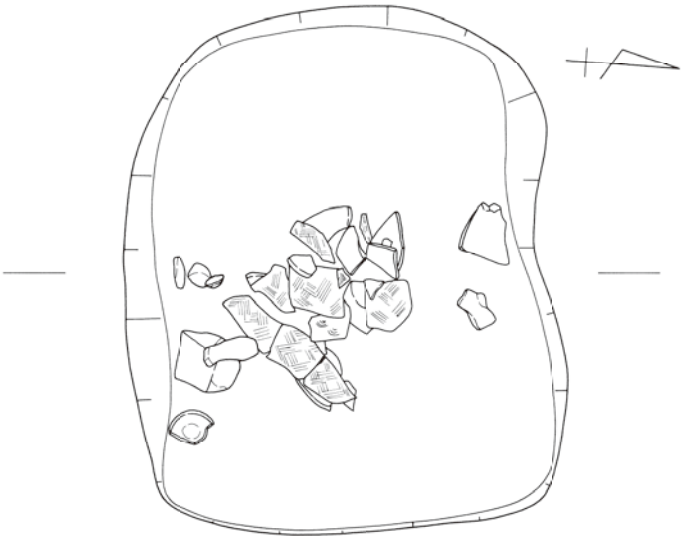


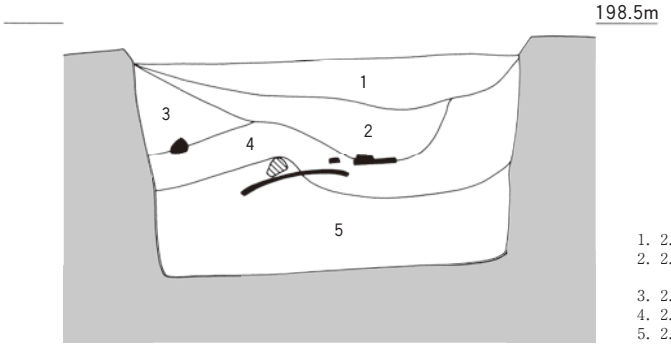
1. 10YR4／2　灰黄褐色　極細砂
2. 5YR4／3　にぶい黄褐色　シルト質極細砂（遺物を多く含む・山土）
3. 10YR4／4　褐色　極細砂～細砂
4. 5Y4／1　灰色　シルト質極細砂
5. 5Y5／1　灰色　シルト質極細砂
6. 10Y4／1　灰色　シルト

0　1m

図版9　SE5・SE6　平面図・断面図

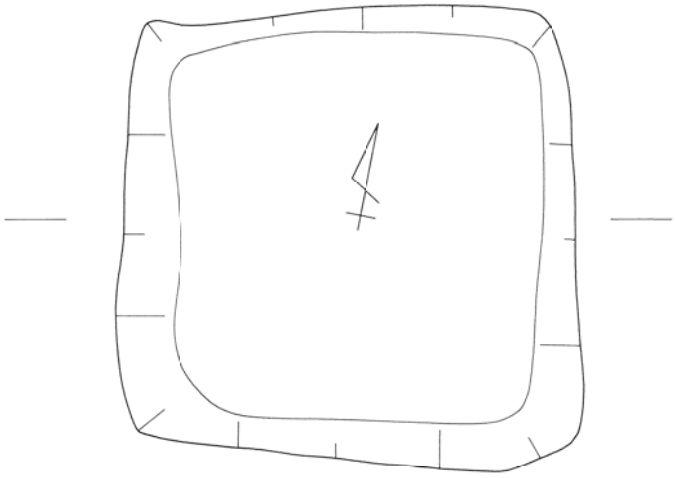
SE5

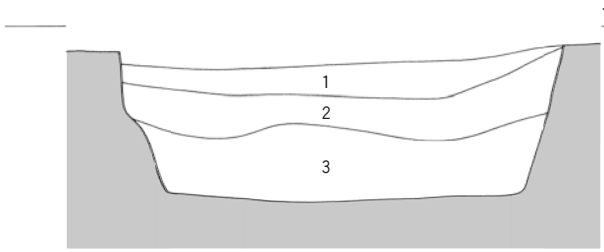




1. 2.5Y5／1　黄灰色　極細砂
2. 2.5Y6／1　黄灰色　極細砂
（粗砂を含む・マンガン多く含む）
3. 2.5Y5／1　黄灰色　極細砂（粗砂を含む）
4. 2.5Y6／1　黄灰色　シルト質極細砂（粗砂を含む）
5. 2.5Y5／1　黄灰色　シルト質極細砂（粗砂を含む）

SE6

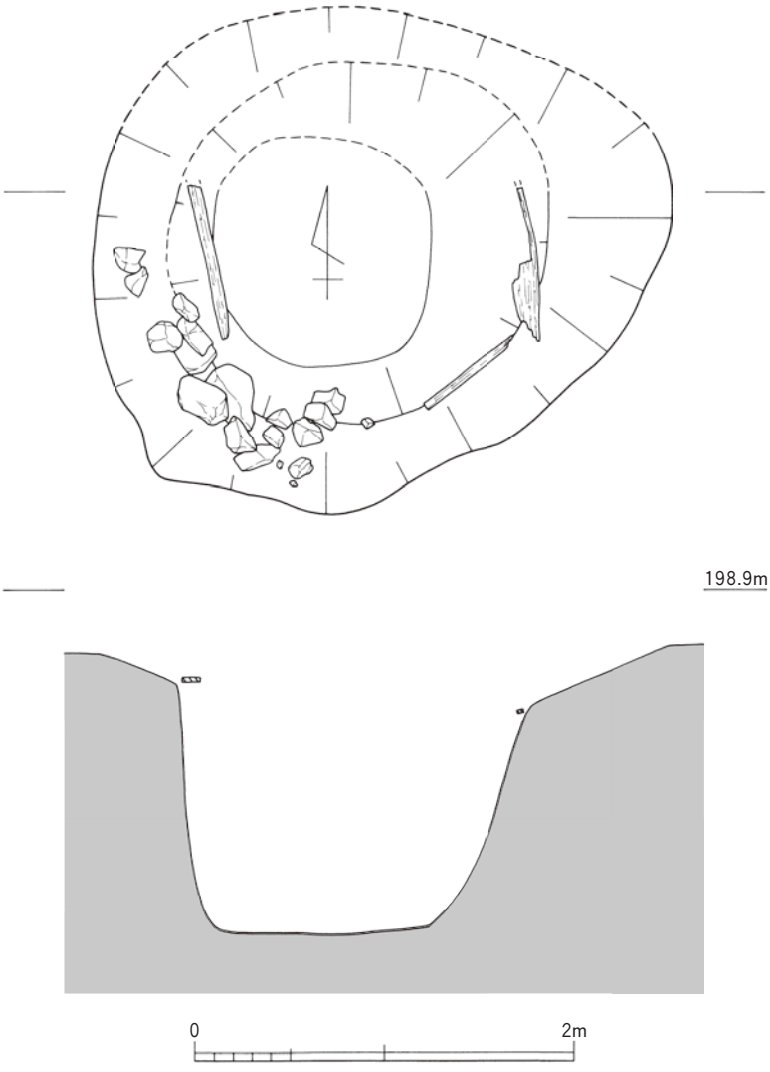




1. 10YR4／6　褐色　極細砂
2. 10YR5／2　灰黄褐色　シルト質極細砂
3. 10YR4／4　褐色　シルト質極細砂

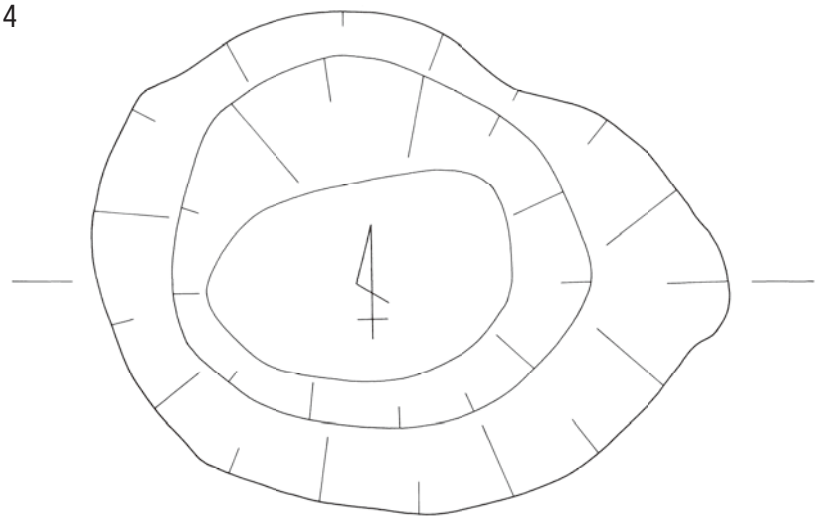
図版10　SE7　平面図・断面図

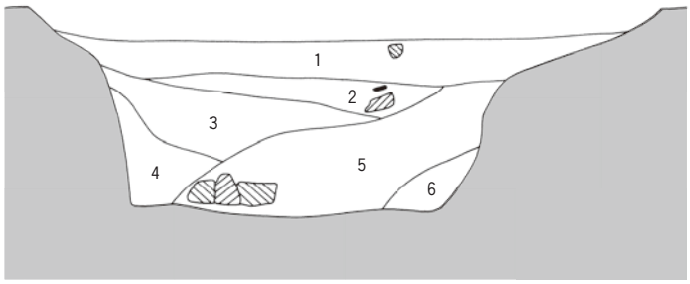
SE7



図版11　SE14〜SE16　平面図・断面図

SE14

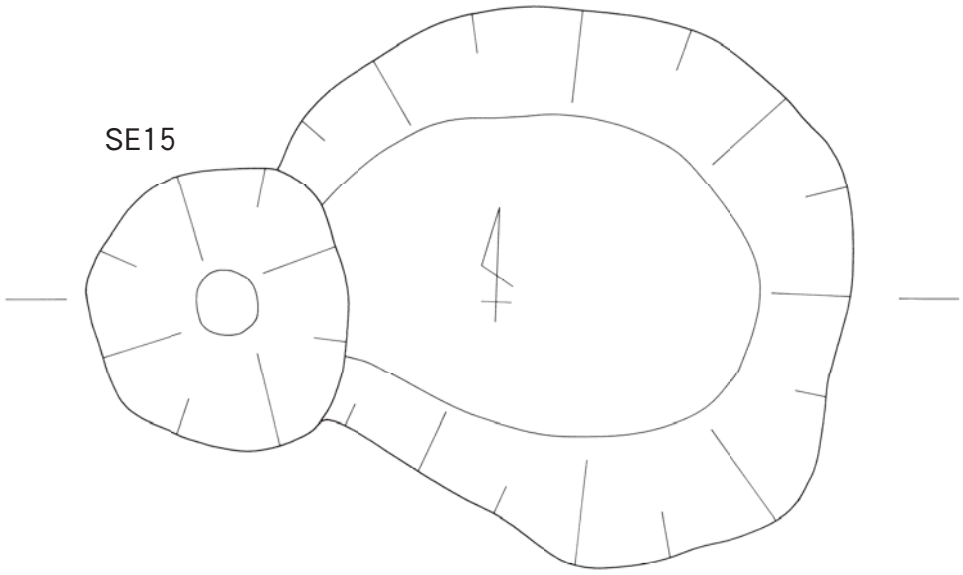


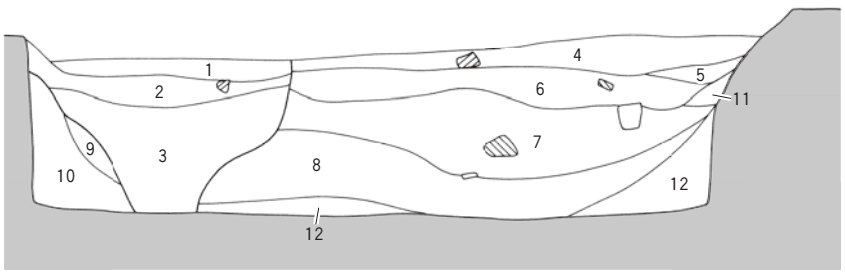


1. 10YR4／2　灰黄褐色　極細砂（細砂・大礫・土器を含む）
2. 10YR4／1　褐色　シルト質極細砂（炭・粗砂・小礫を含む）
3. 2.5Y4／1　黄灰色　シルト質極細砂（炭を含む）
4. 2.5Y4／1　黄灰色　シルト（炭を少量含む）
5. 7.5YR4／2　灰褐色　シルト質極細砂（粗砂を含む）
6. 2.5Y5／1　黄灰色　シルト質極細砂（粗砂を含む）

SE16

SE15

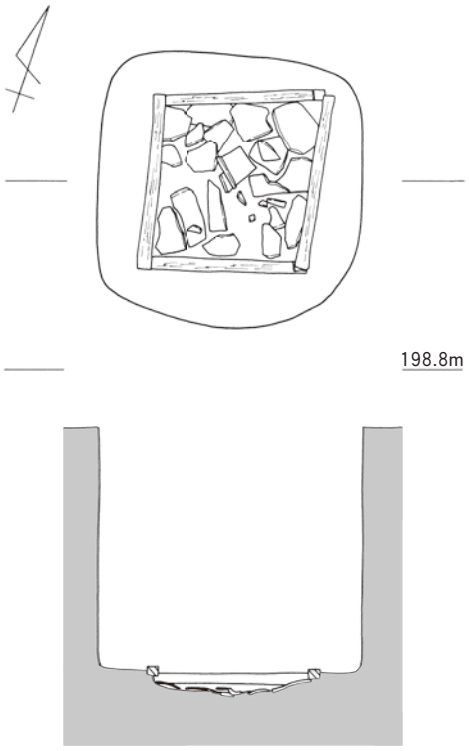




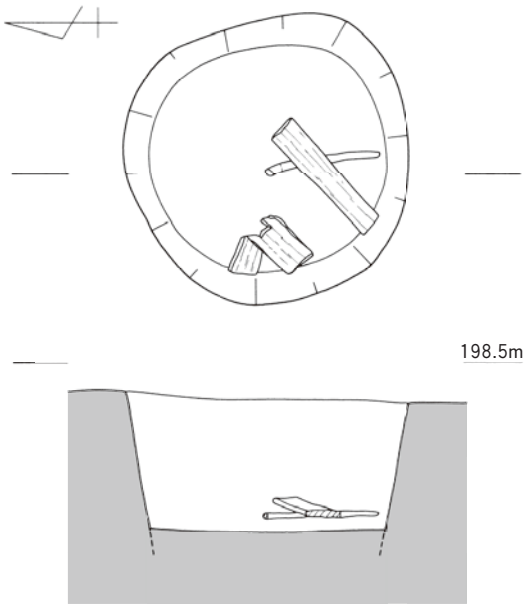
1. 10YR4／3　にぶい黄褐色　極細砂
2. 10YR4／2　灰黄褐色　シルト質極細砂（炭を少量含む）
3. 2.5Y4／1　黄灰色　シルト質極細砂（炭を少量含む）
4. 10YR4／4　褐色　極細砂（粗砂を含む）
5. 10YR4／1　褐灰色　シルト質極細砂（細砂を含む）
6. 2.5Y5／1　黄灰色　シルト質極細砂
7. 5Y4／1　灰色　シルト質極細砂（炭を少量含む）
8. 7.5Y4／2　灰オリーブ　シルト質極細砂（細砂〜粗砂を含む）
9. 10Y4／1　灰色　シルト質極細砂（細砂を含む）
10. 10Y4／1　灰色　シルト
11. 10YR4／2　灰黄褐色　極細砂〜細砂（粗砂を含む・遺構肩部崩落土）
12. 7.5Y4／1　灰色　シルト質極細砂

図版12　SE17・SE20 平面図・断面図

SE17

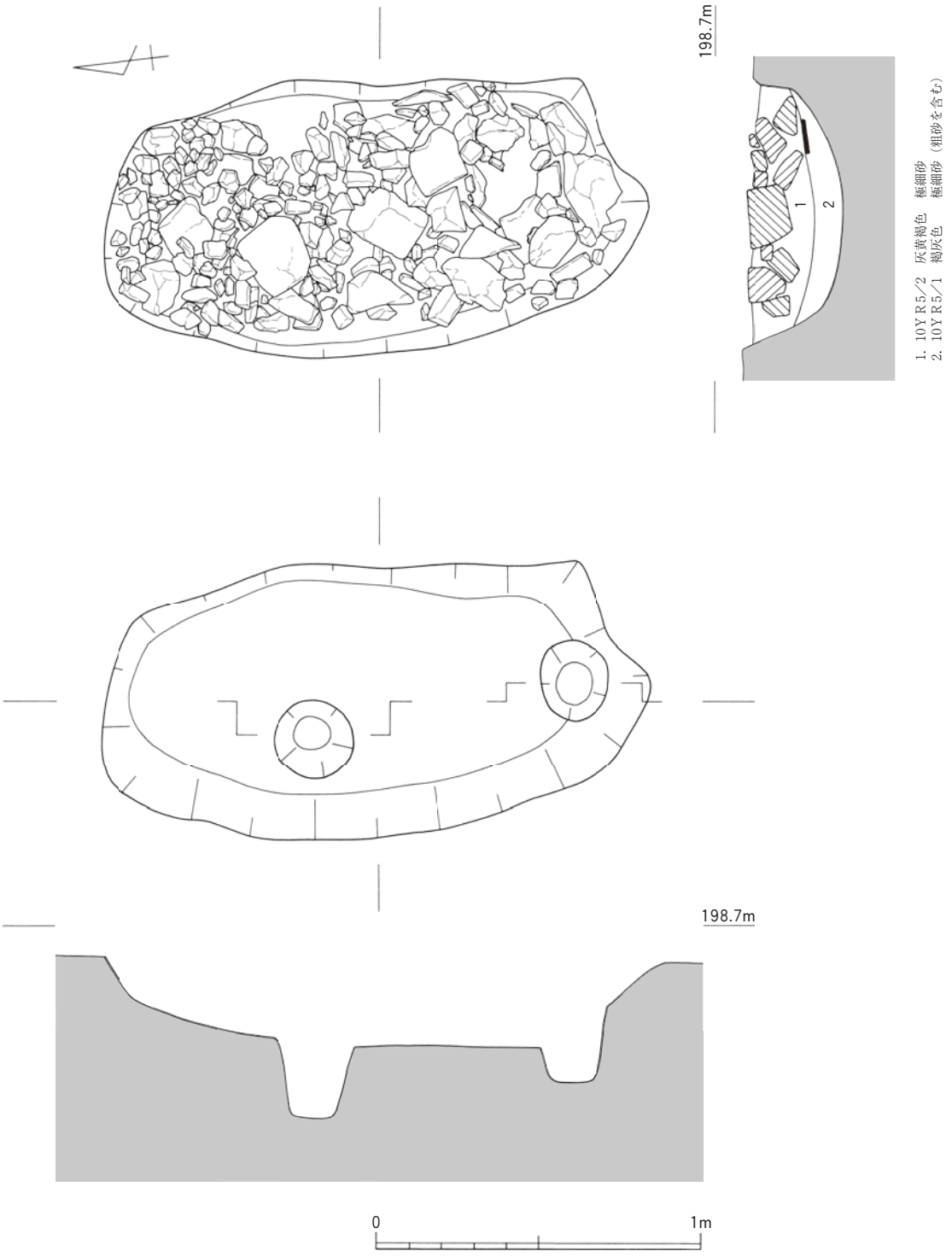


SE20



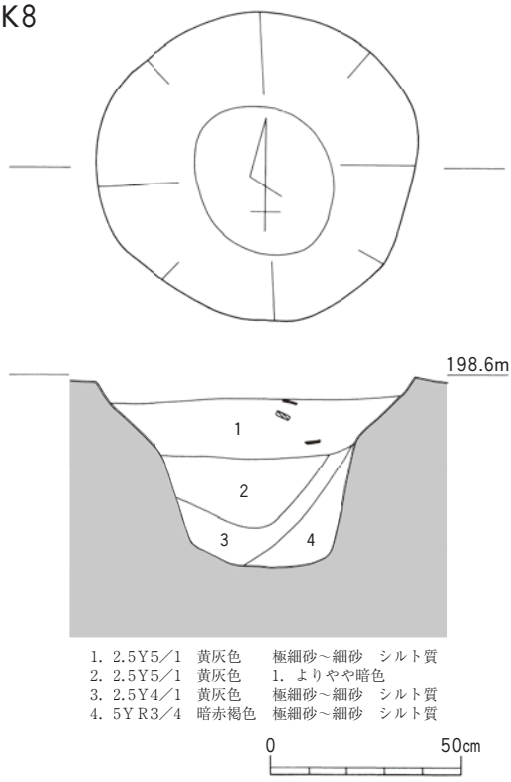
図版13　SK4　平面図・断面図

SK4



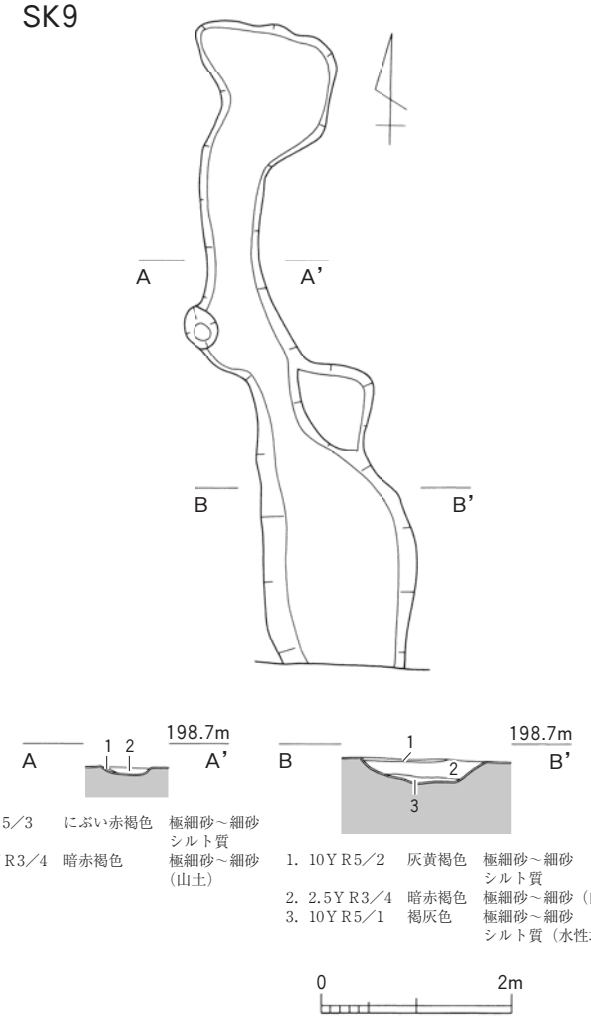
図版14　土坑　平面図・断面図

SK8



1. 2.5Y5／1　黄灰色　極細砂～細砂　シルト質
2. 2.5Y5／1　黄灰色　1. よりやや暗色
3. 2.5Y4／1　黄灰色　極細砂～細砂　シルト質
4. 5YR3／4　暗赤褐色　極細砂～細砂　シルト質

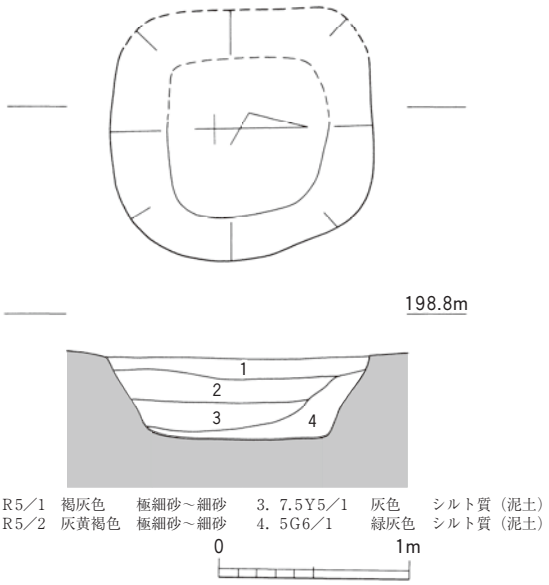
SK9



1. 5YR5／3　にぶい赤褐色　極細砂～細砂　シルト質
2. 2.5YR3／4　暗赤褐色　極細砂～細砂（山土）

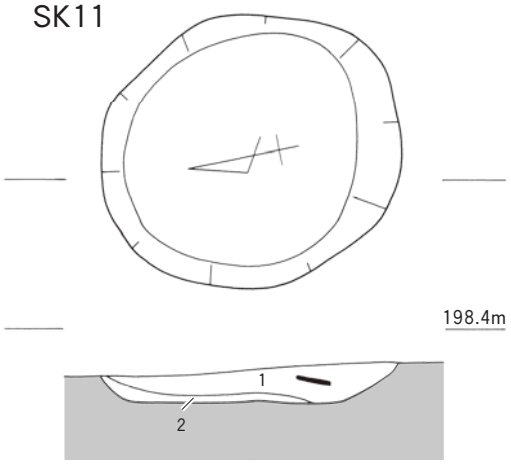
1. 10YR5／2　灰黄褐色　極細砂～細砂　シルト質
2. 2.5YR3／4　暗赤褐色　極細砂～細砂（山土）
3. 10YR5／1　褐灰色　極細砂～細砂　シルト質（水性堆積）

SK10



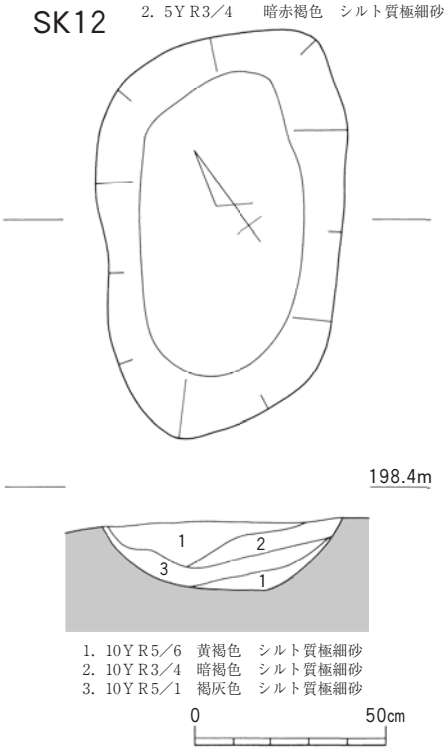
1. 10YR5／1　褐灰色　極細砂～細砂
2. 10YR5／2　灰黄褐色　極細砂～細砂
3. 7.5Y5／1　灰色　シルト質（泥土）
4. 5G6／1　緑灰色　シルト質（泥土）

SK11



1. 7.5YR4／1　褐灰色　シルト質極細砂
2. 5YR3／4　暗赤褐色　シルト質極細砂

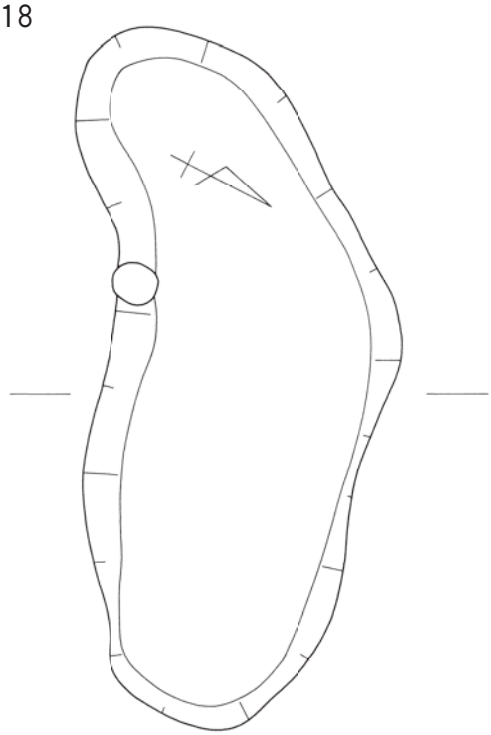
SK12

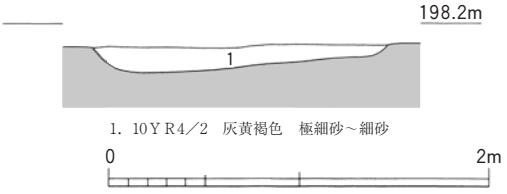


1. 10YR5／6　黄褐色　シルト質極細砂
2. 10YR3／4　暗褐色　シルト質極細砂
3. 10YR5／1　褐灰色　シルト質極細砂

図版15　溝・土坑　平面図・断面図

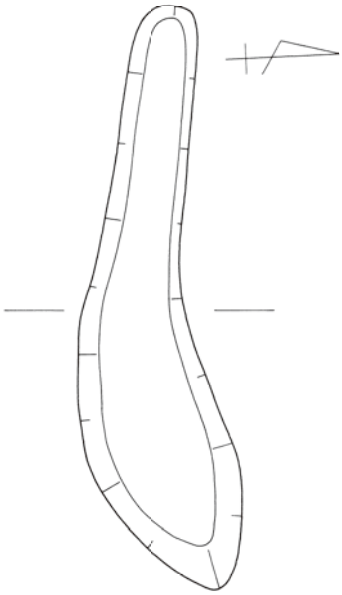
SK18

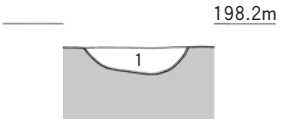




1. 10Y R4／2　灰黄褐色　極細砂～細砂

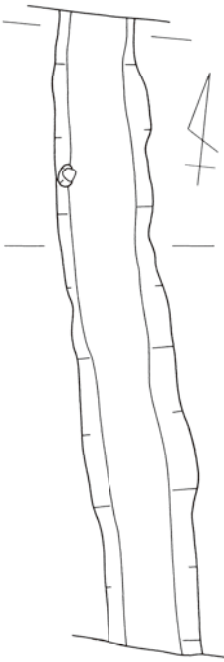
SK19

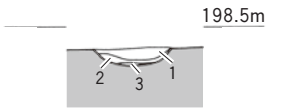




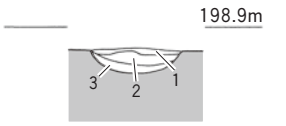
1. 10Y R3／4　暗褐色　極細砂～細砂

SD1



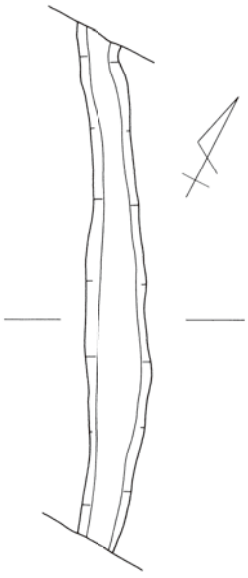


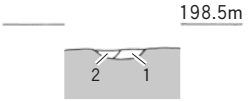
1. 10Y R5／2　灰黄褐色　極細砂～細砂
2. 10Y R5／2　灰黄褐色　シルト質細砂
3. 10Y R5／1　褐灰色　シルト質細砂



1. 7.5Y R4／2　灰褐色　極細砂
2. 7.5Y R5／2　灰褐色　極細砂
3. 10Y R4／1　褐灰色　極細砂

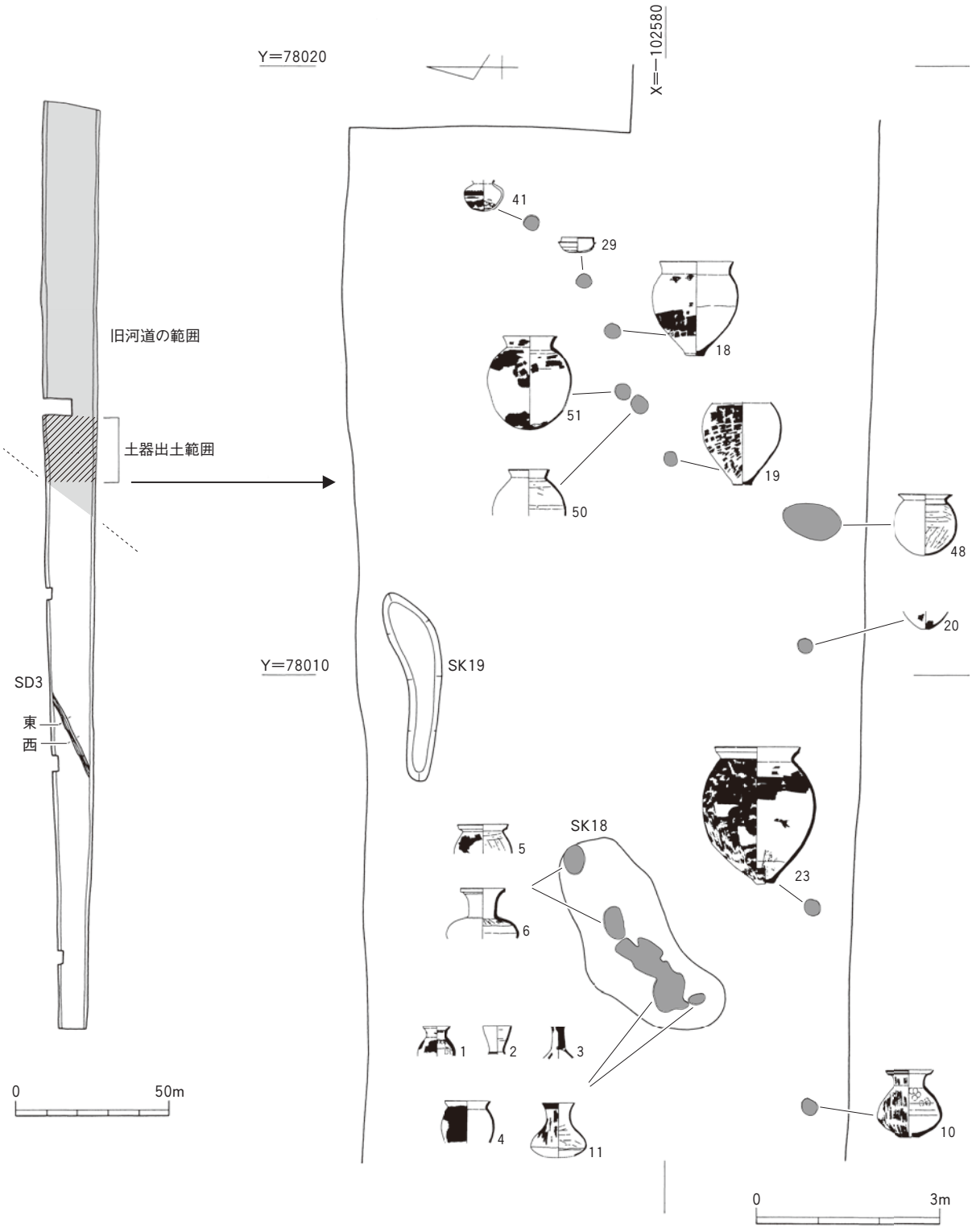
SD2

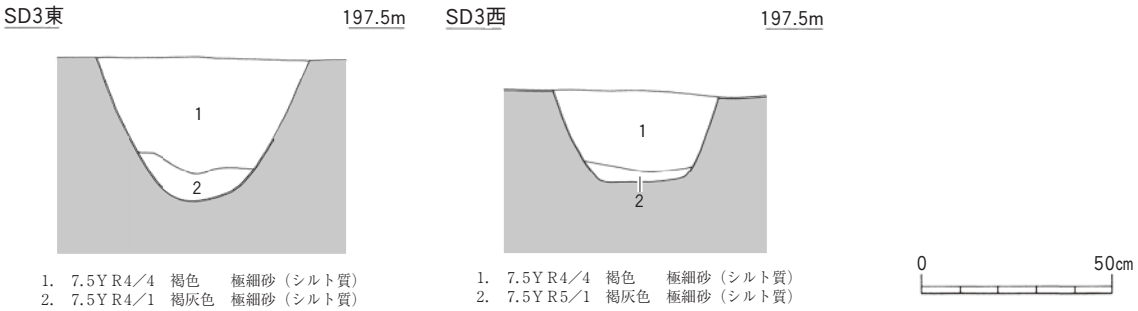




1. 2.5Y4／2　暗灰黄色　極細砂
2. 2.5Y4／3　オリーブ褐色　シルト質極細砂

図版16　下層遺構　平面図・断面図

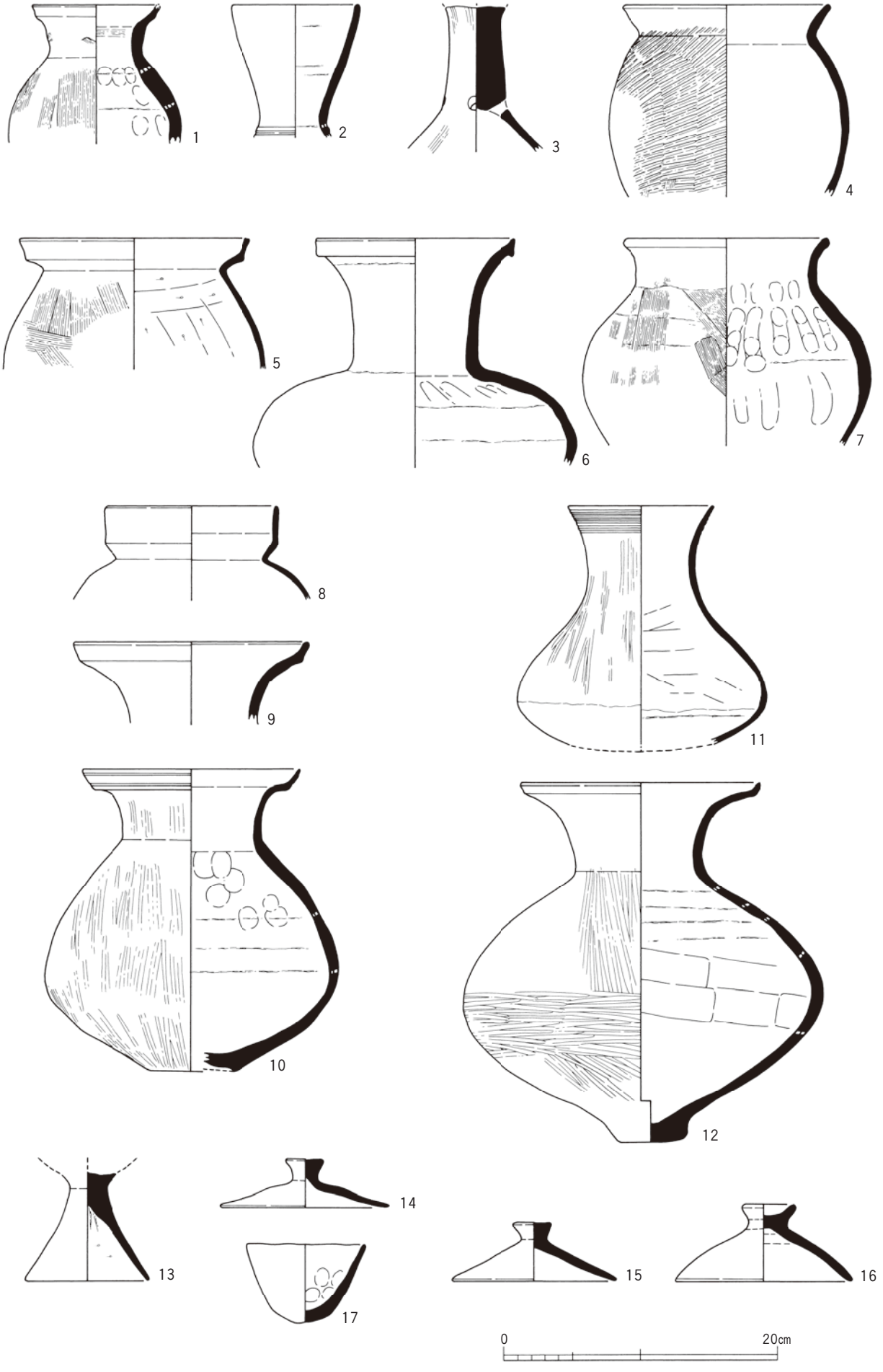




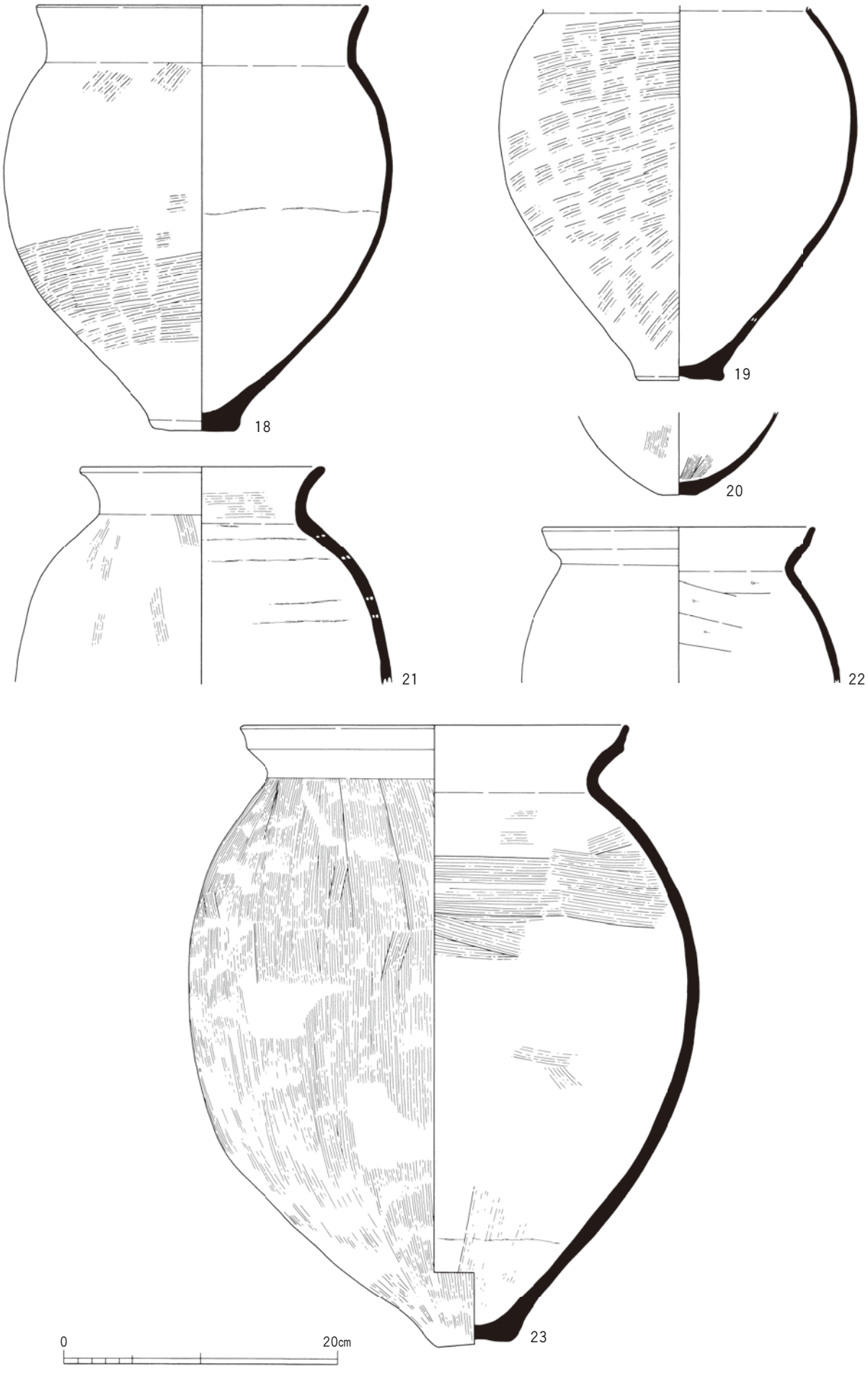
1.　7.5YR4／4　褐色　　極細砂（シルト質）
2.　7.5YR4／1　褐灰色　極細砂（シルト質）

1.　7.5YR4／4　褐色　　極細砂（シルト質）
2.　7.5YR5／1　褐灰色　極細砂（シルト質）

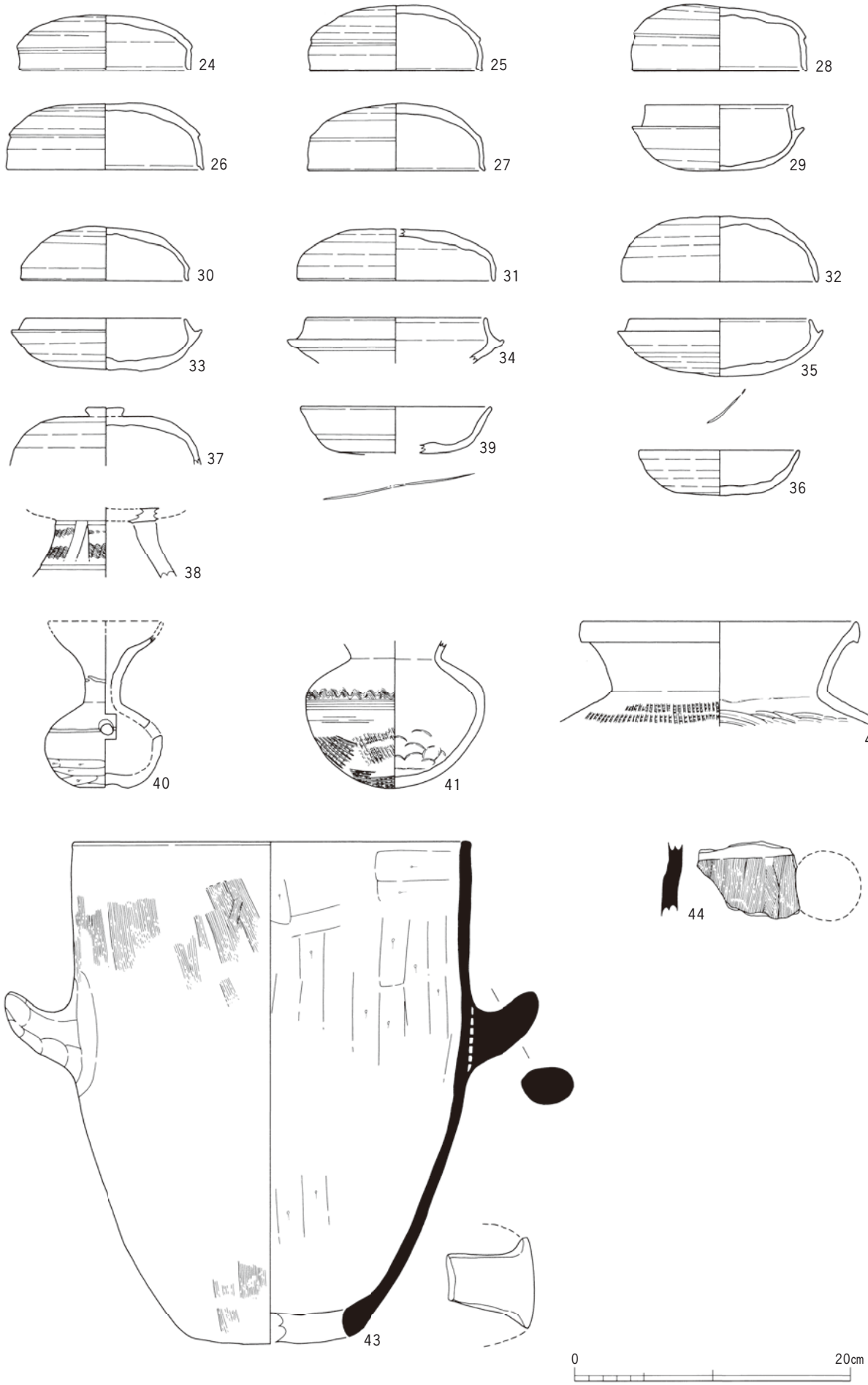
図版17　出土遺物　弥生～古墳1



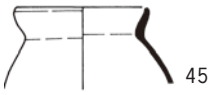
図版18　出土遺物　弥生～古墳2

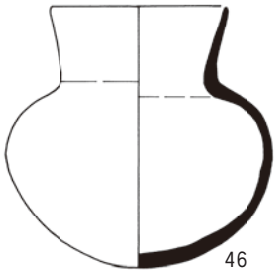


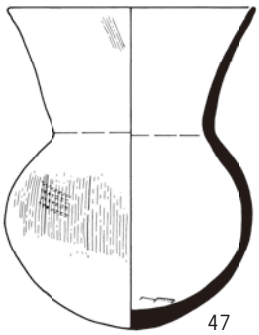
図版19　出土遺物　弥生～古墳3

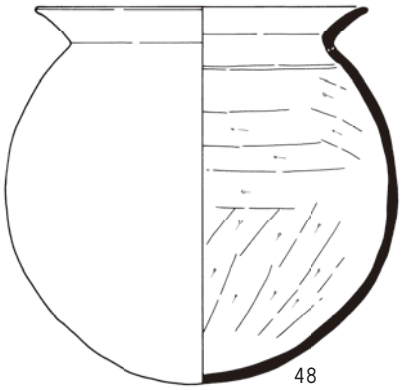


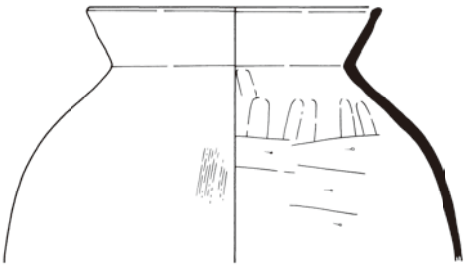
図版20　出土遺物　弥生～古墳4

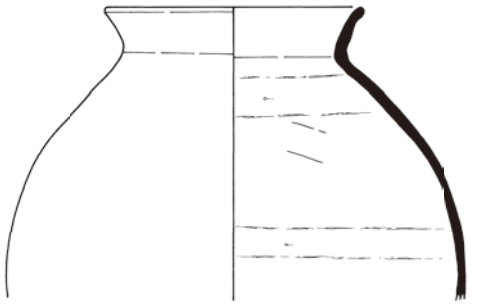

45

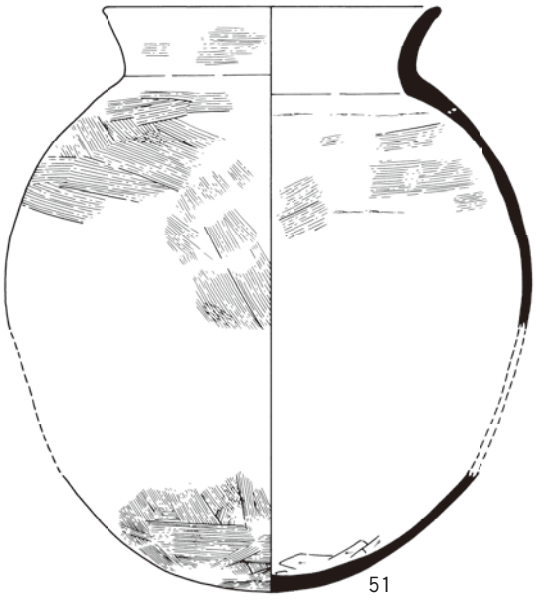

46

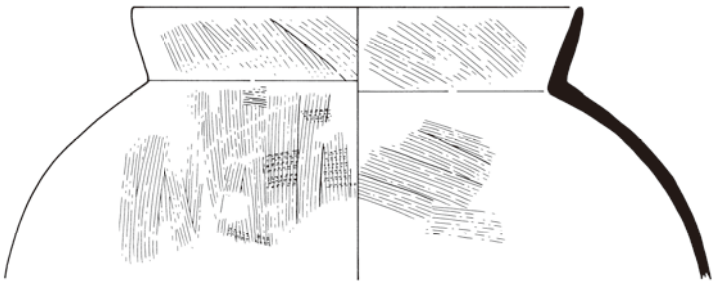

47


48

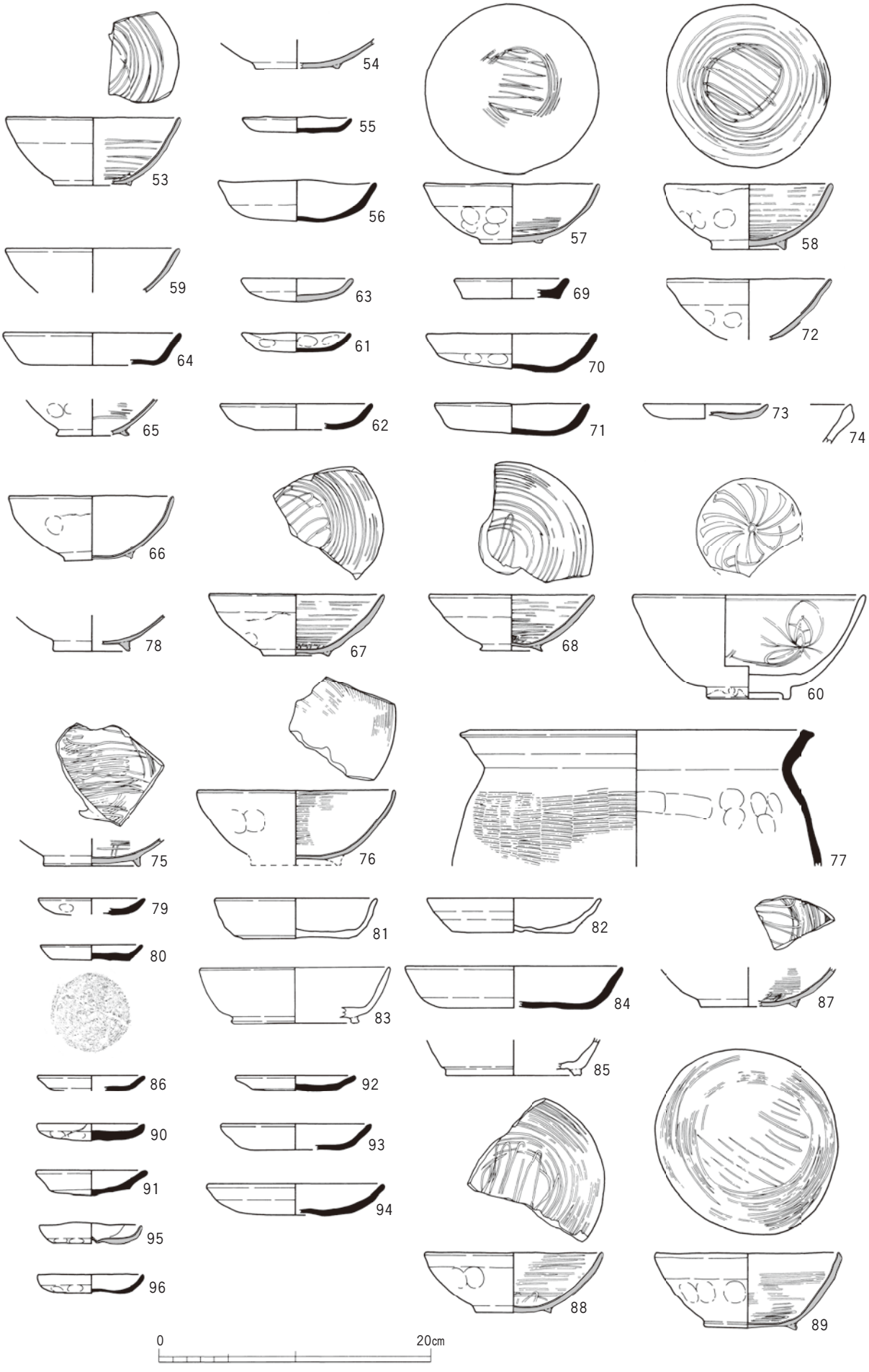

49


50

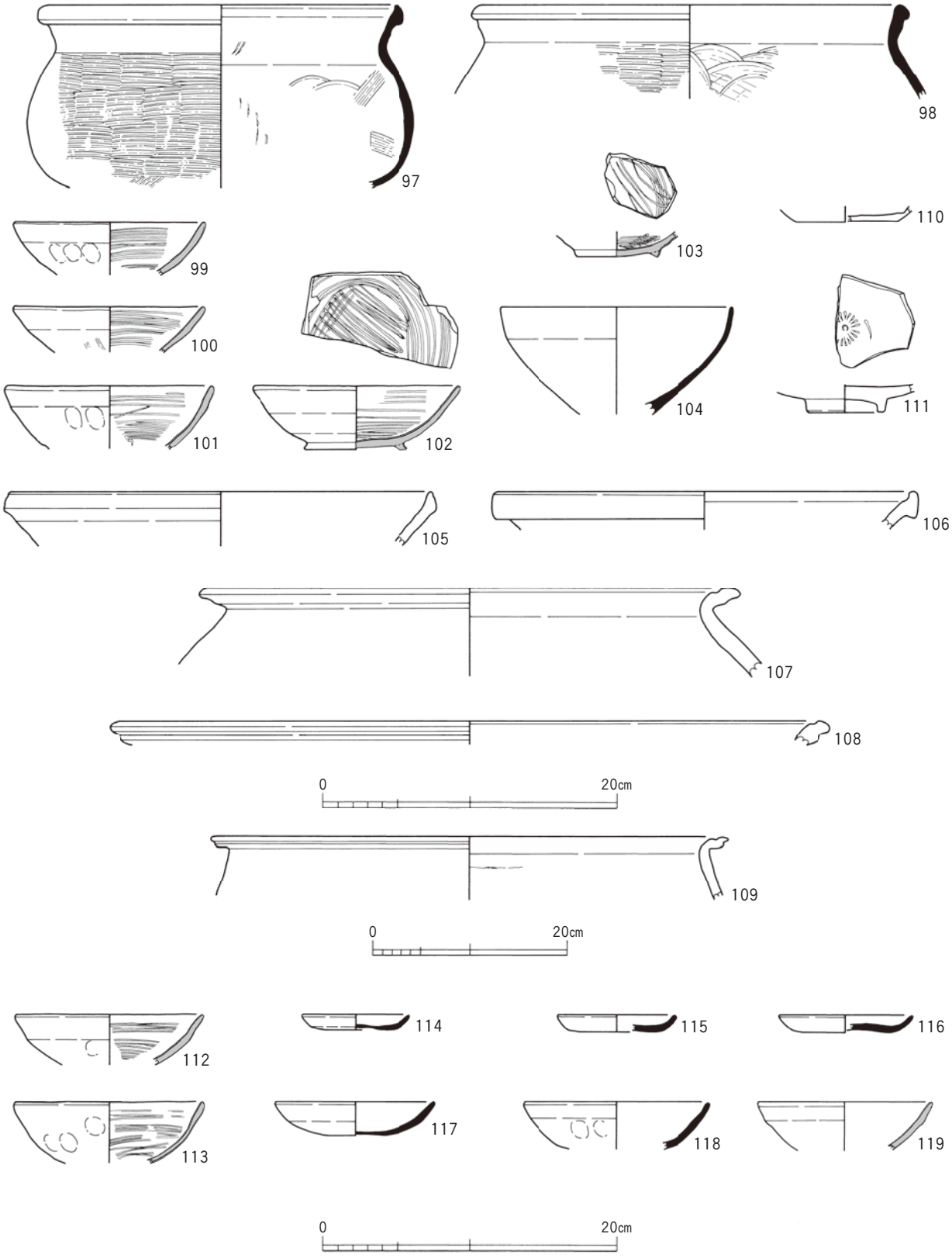

51


52

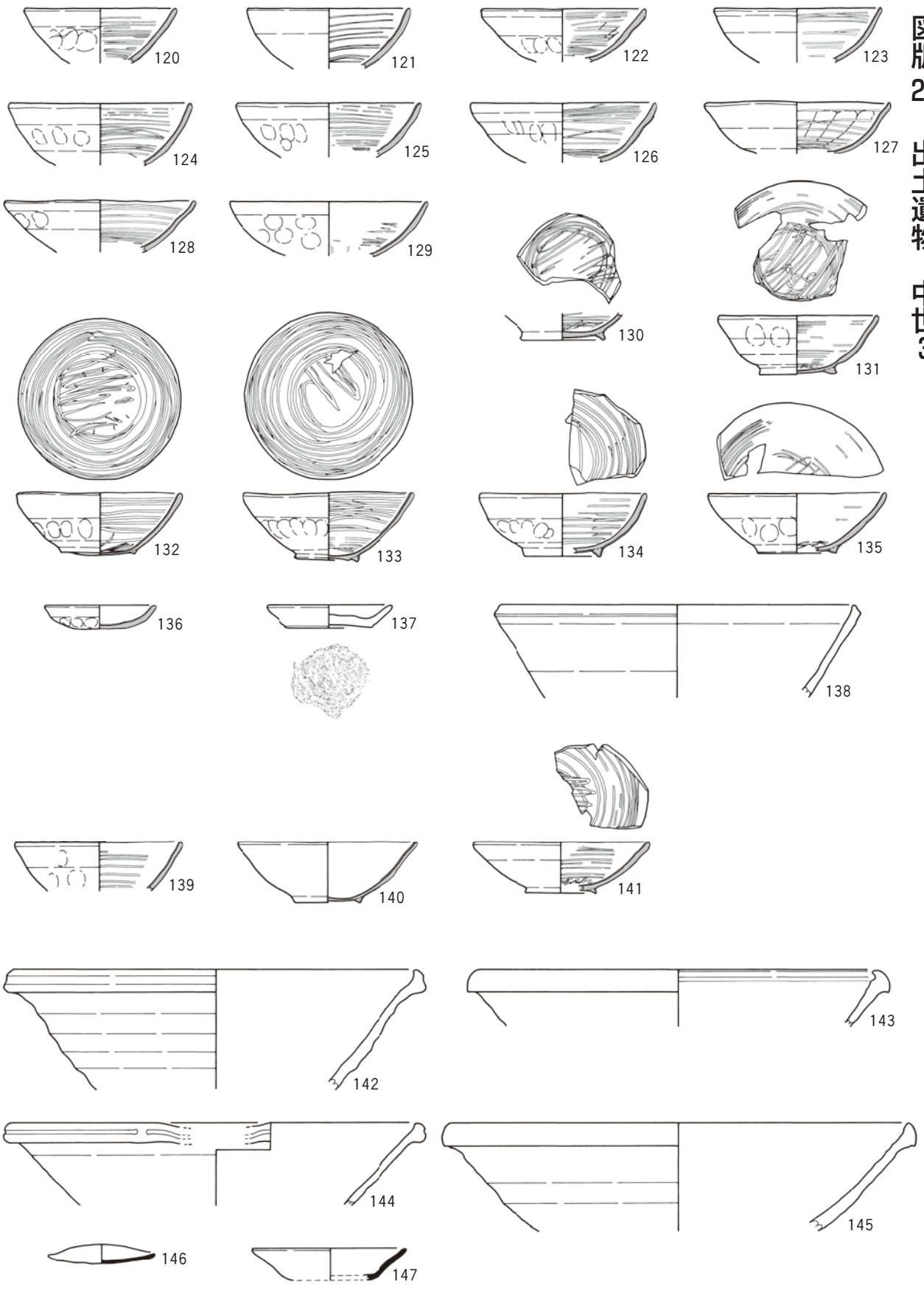
図版21　出土遺物　中世1



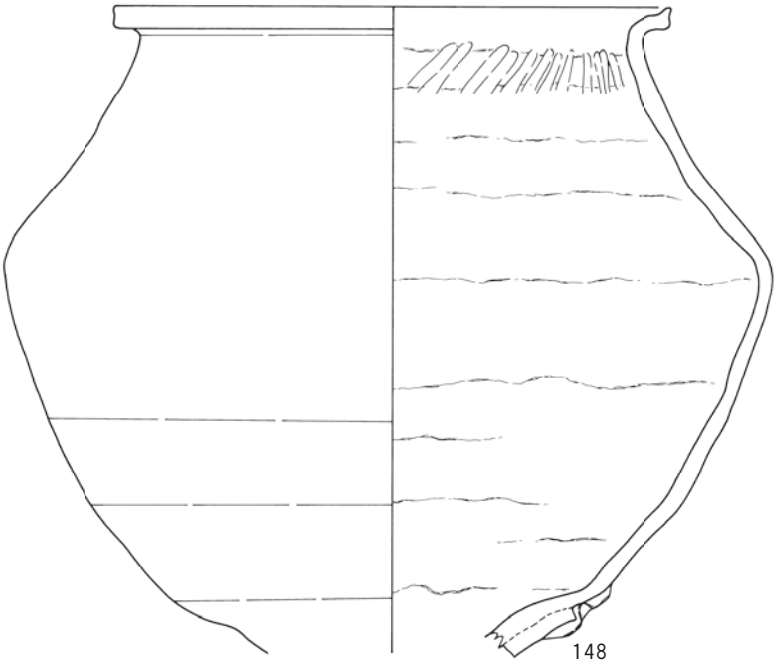
図版22　出土遺物　中世2

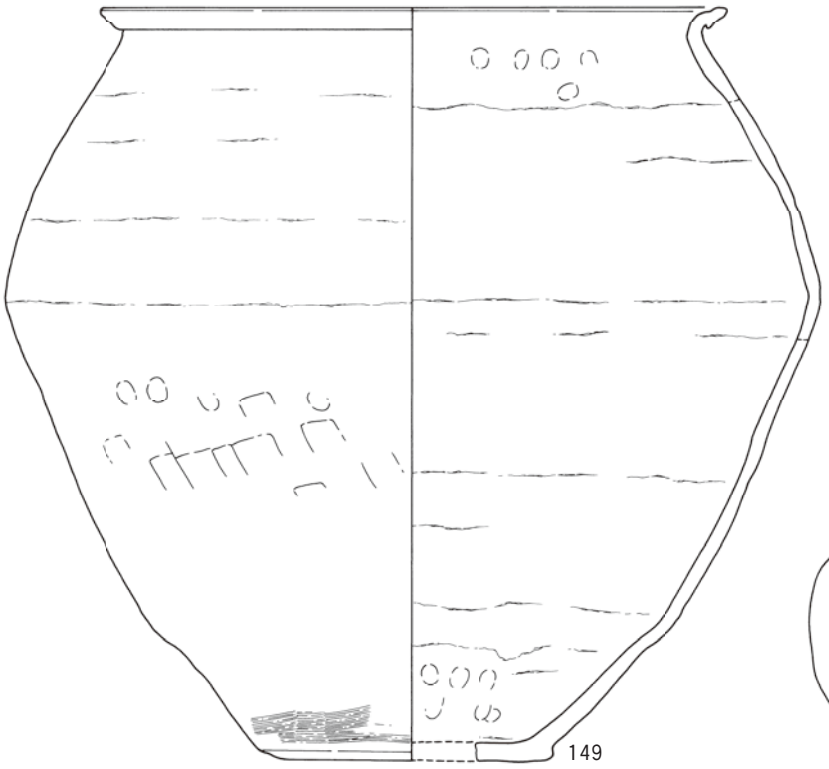


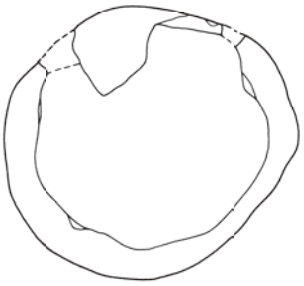
図版23　出土遺物　中世3

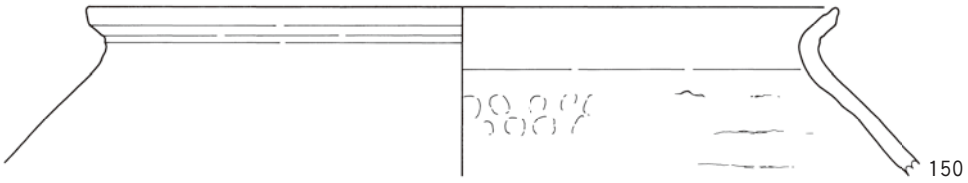


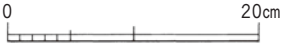
図版24　出土遺物　中世4



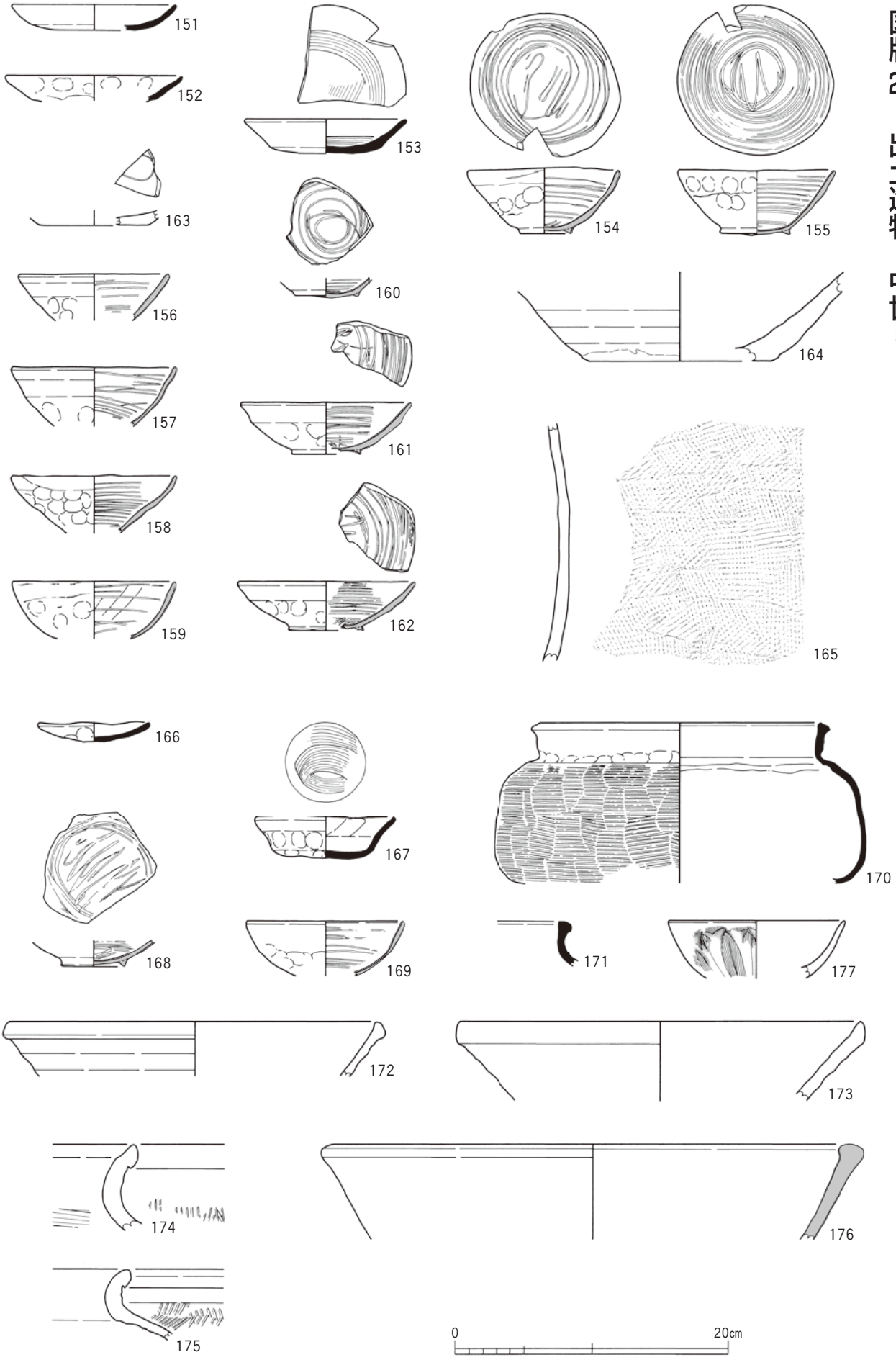




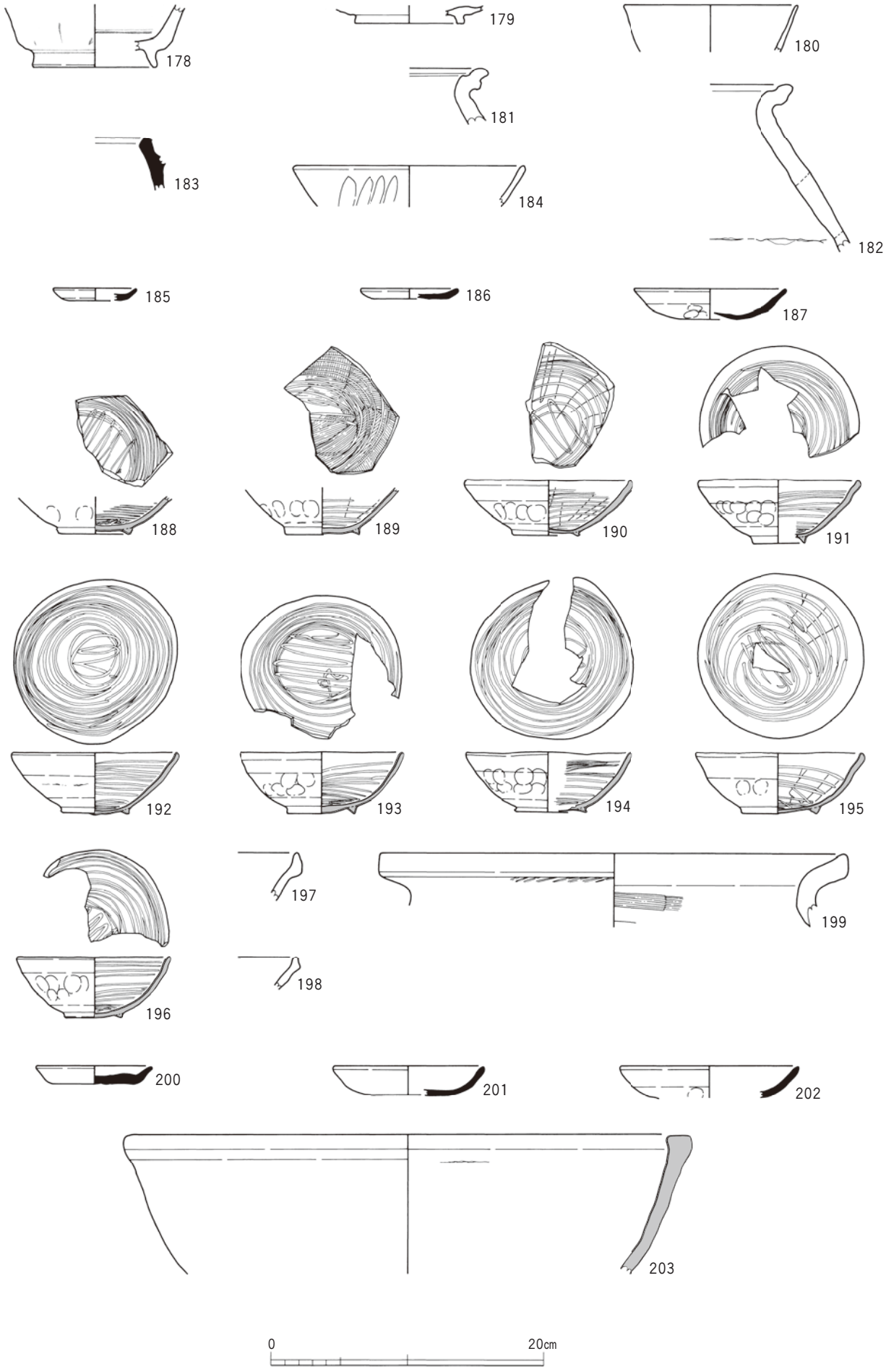




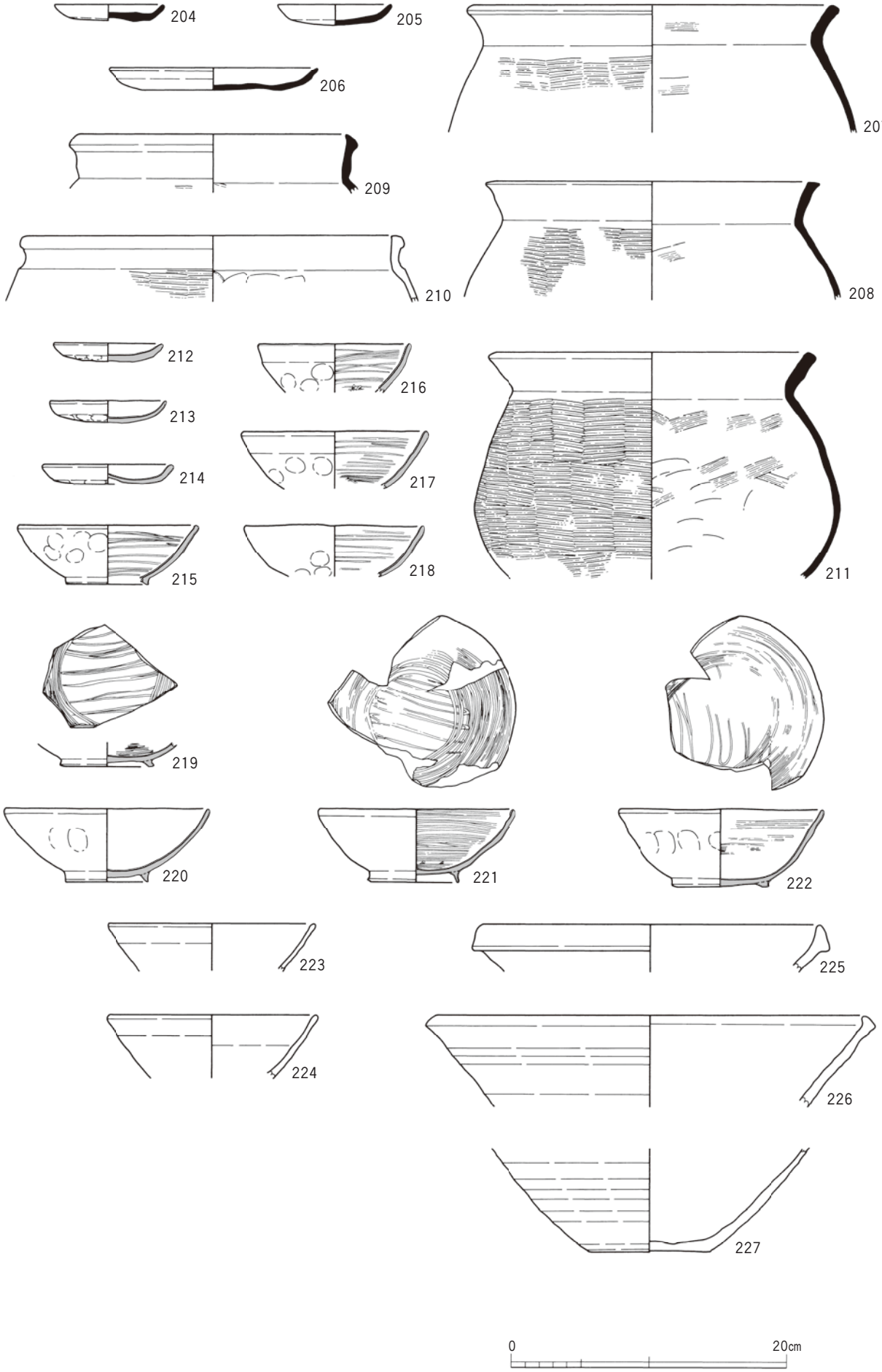
図版25　出土遺物　中世5



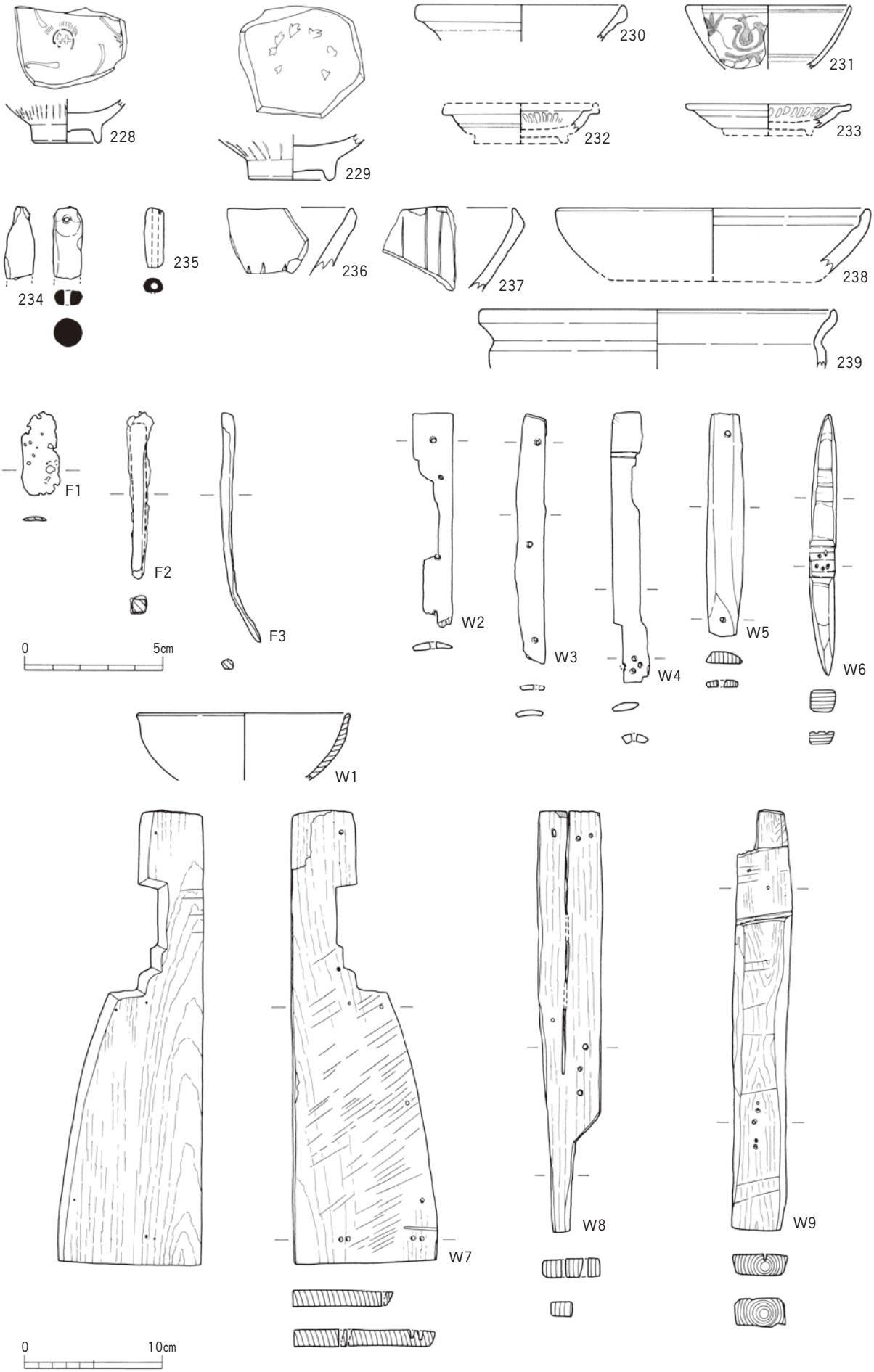
図版26　出土遺物　中世6



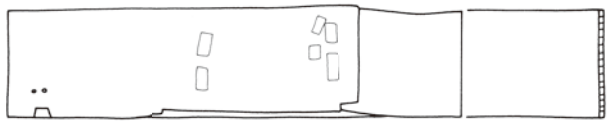
図版27　出土遺物　中世7



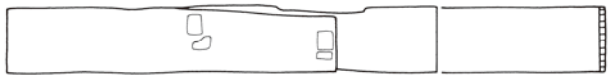
図版28　出土遺物　中世8・木製品1

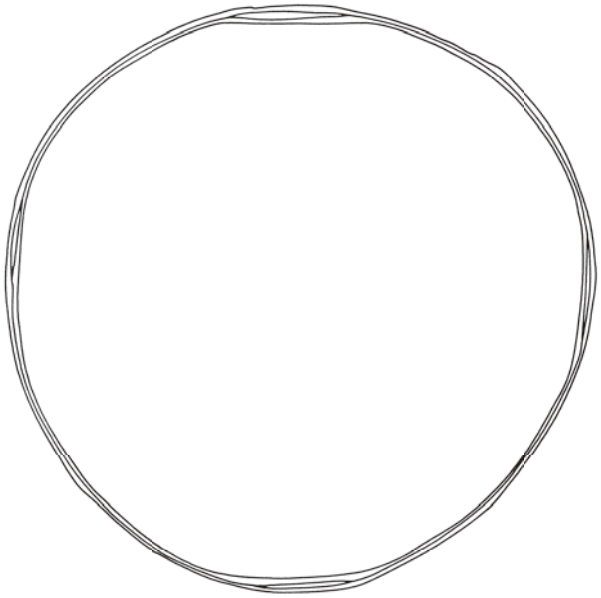


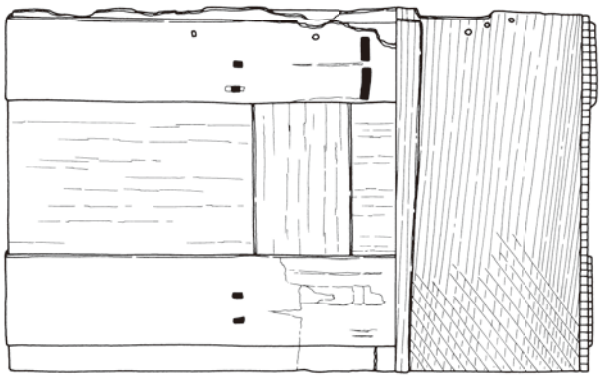
図版29　出土遺物　木製品2

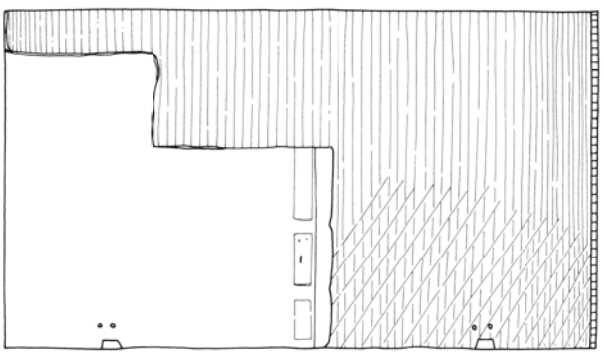

W10

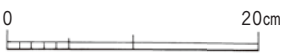
W11


W12

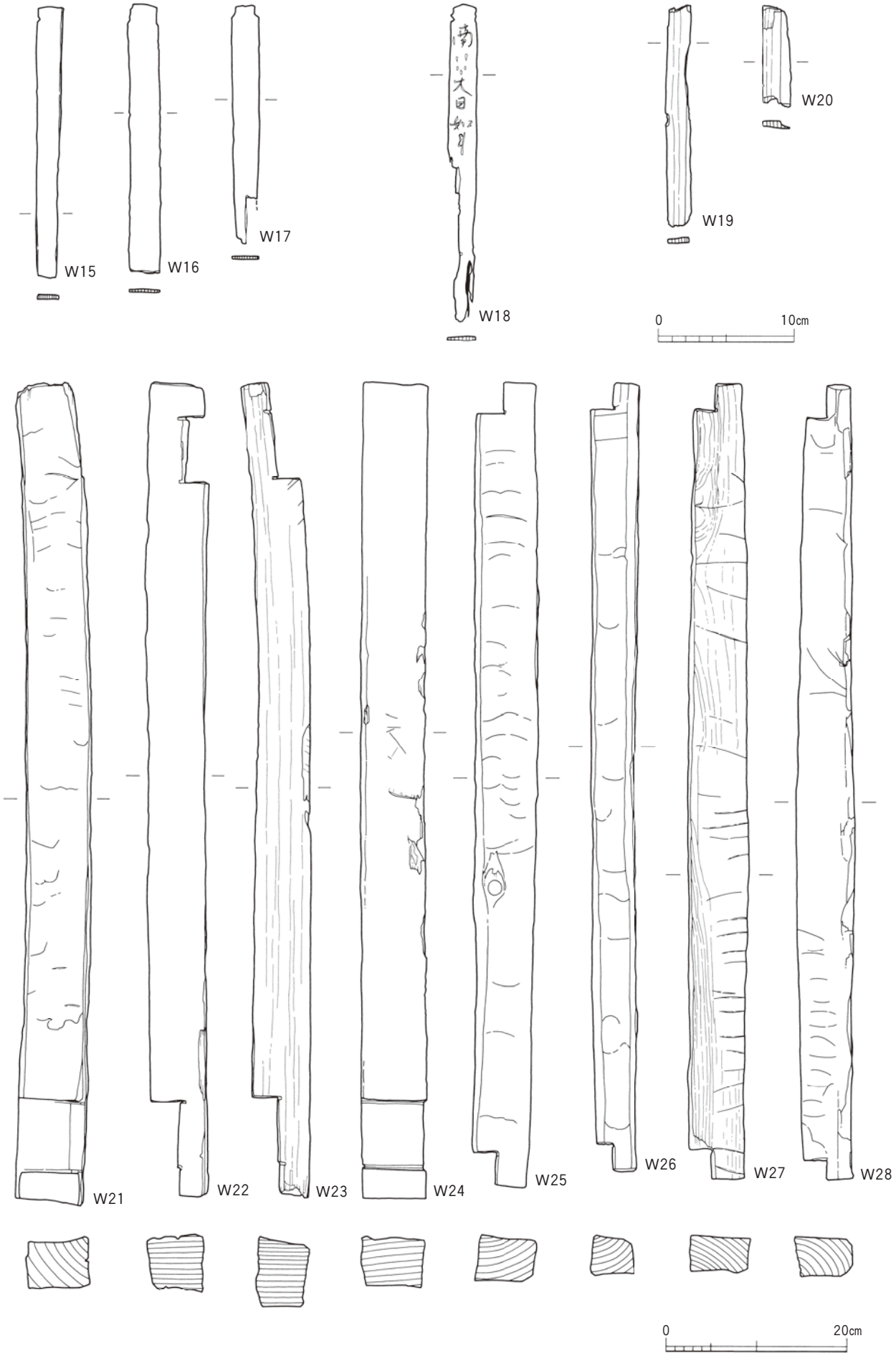



W13

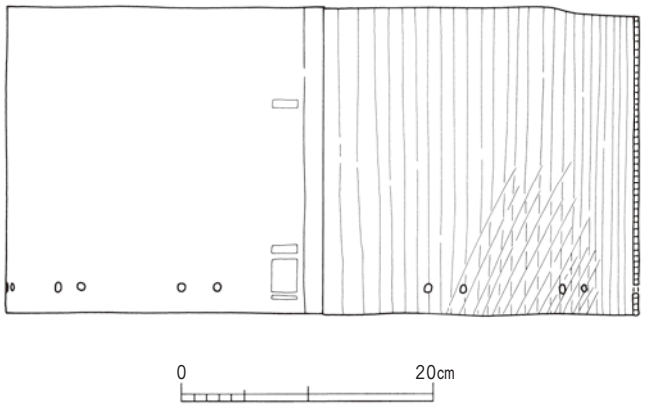

W14

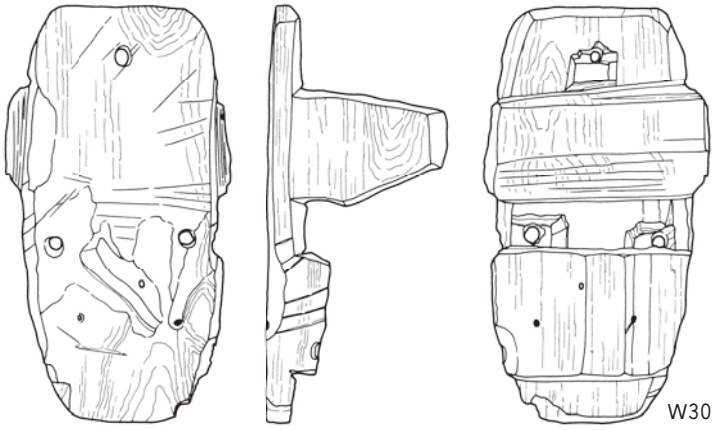


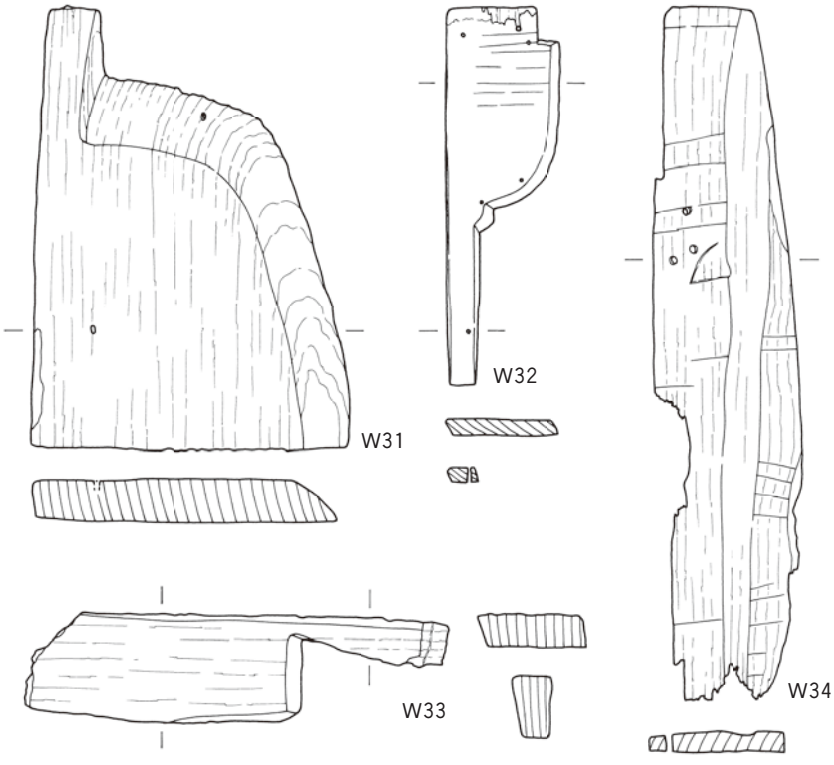
図版30　出土遺物　木製品3

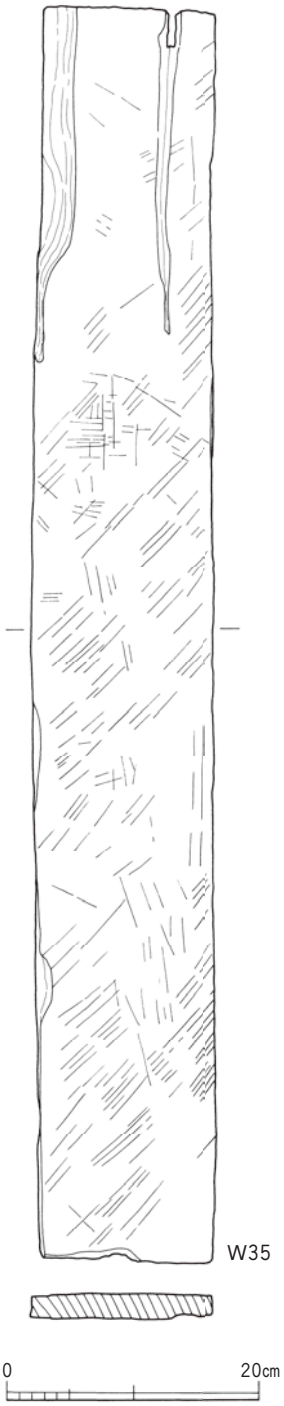


図版31　出土遺物　木製品4

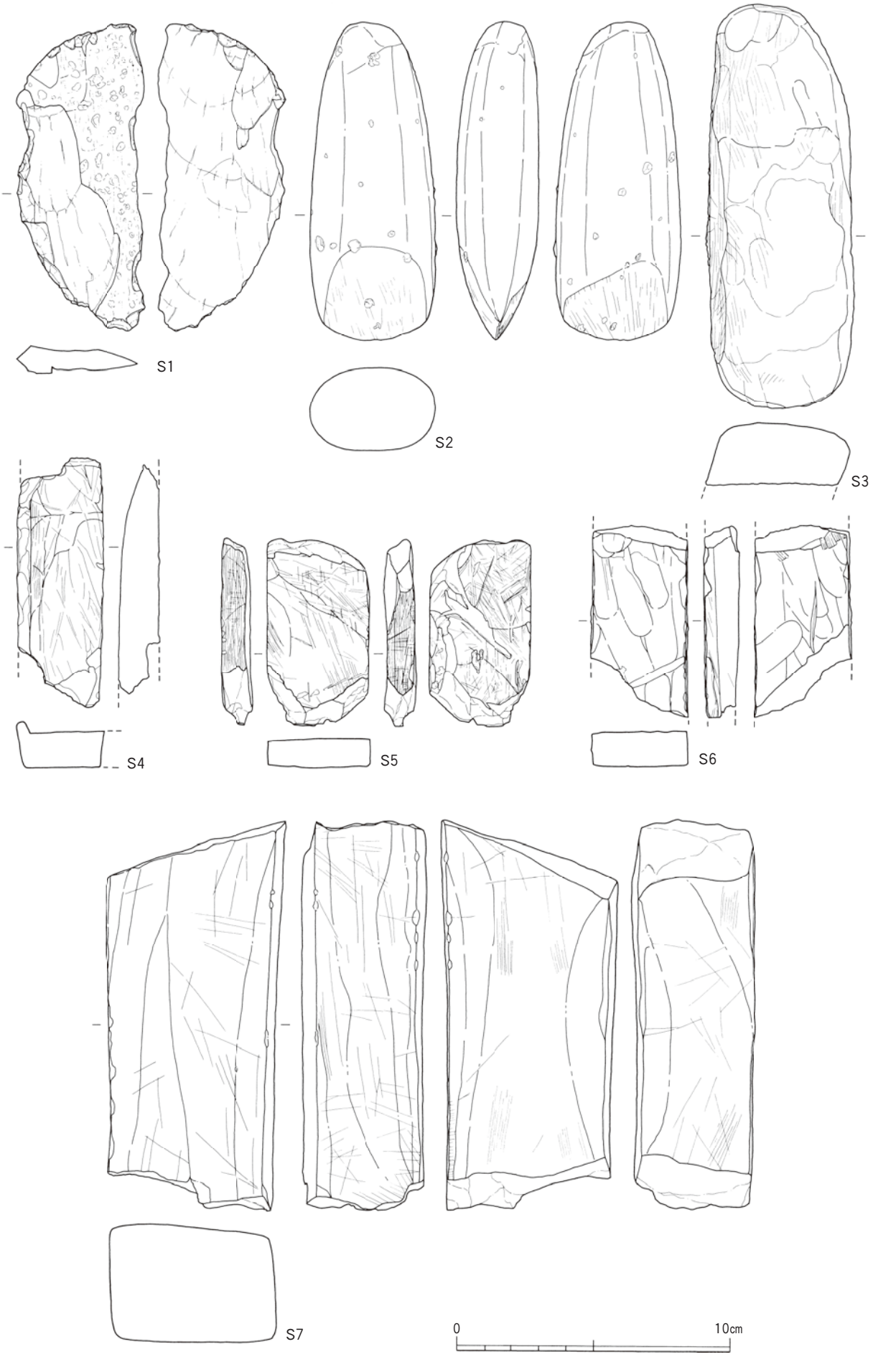






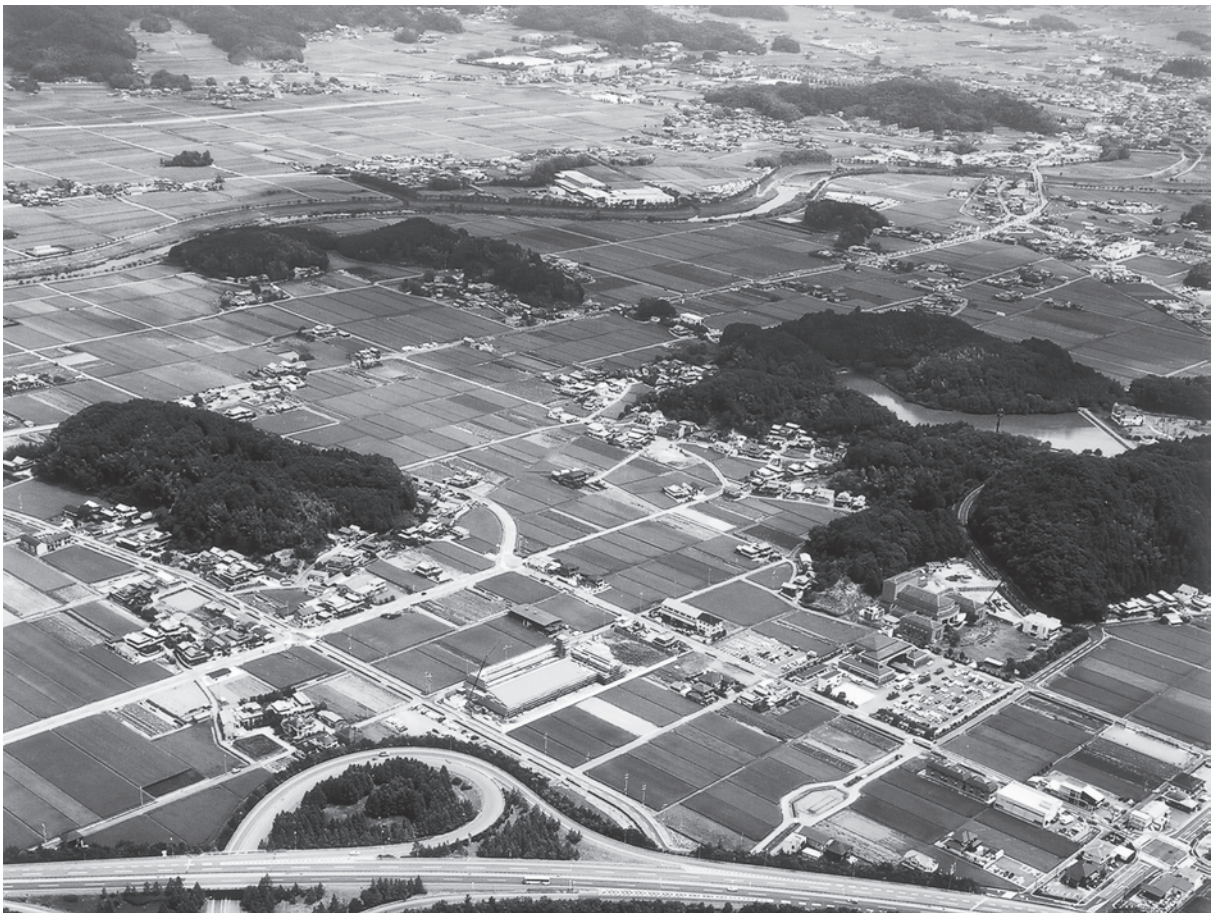


図版32　出土遺物　石製品



写 真 図 版

写真図版1　遺跡遠景



近畿自動車道舞鶴線篠山Ｉ.Ｃ上空から（南西から）

遺跡上空（南から）

写真図版2　遺跡全景

遺跡全景（真上から）

東から

西から

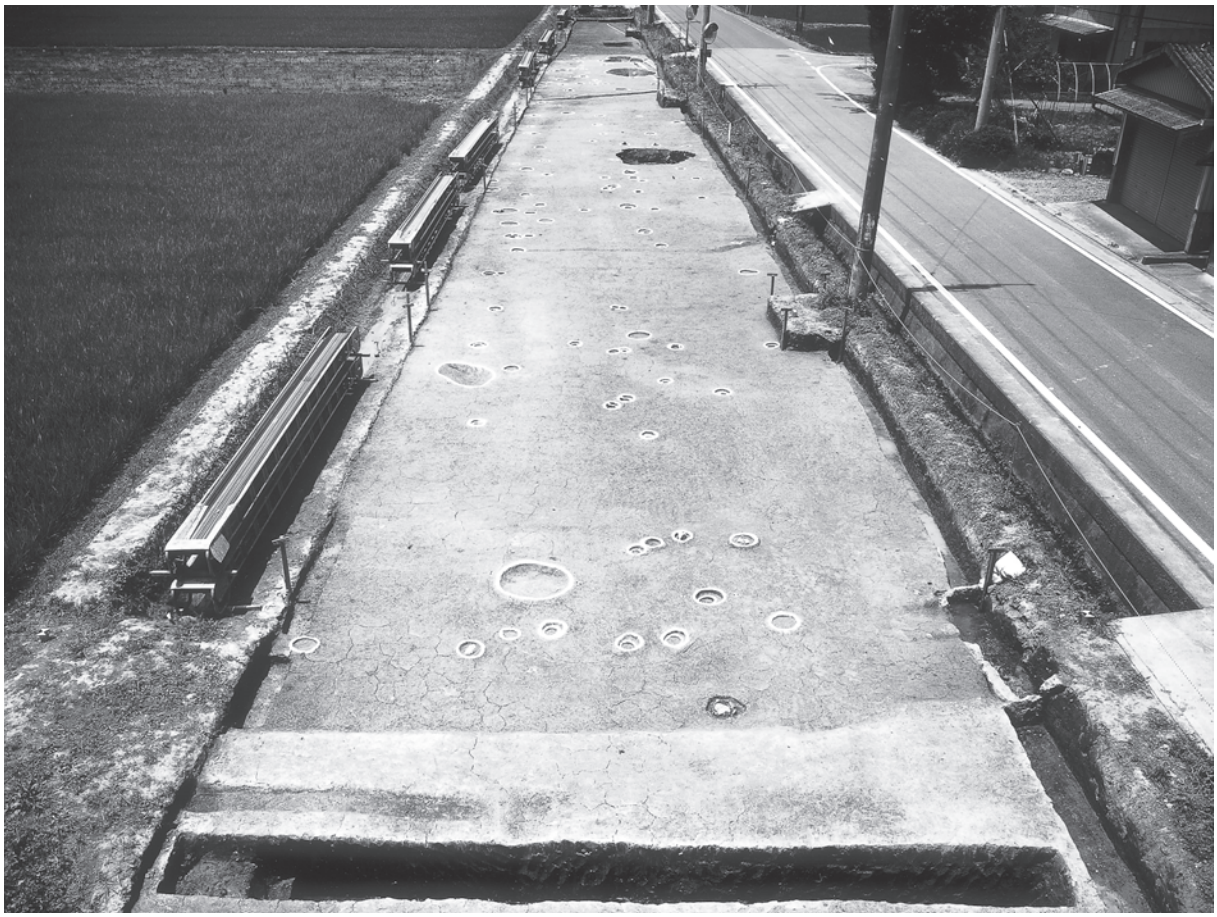
写真図版4　第1面　調査区全景

東から

西から

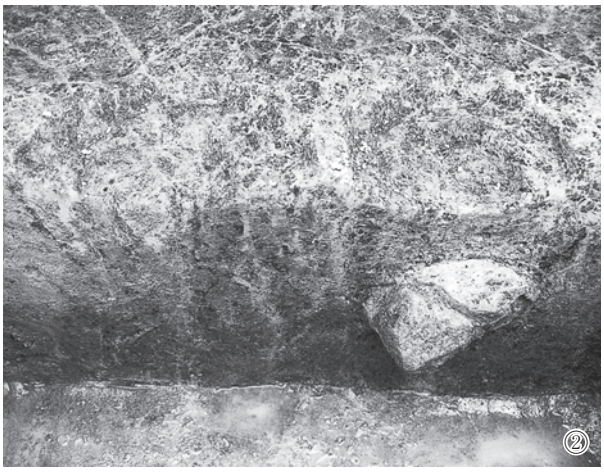
写真図版5　第1面　掘立柱建物・柱穴

SB1・SB2（東から）



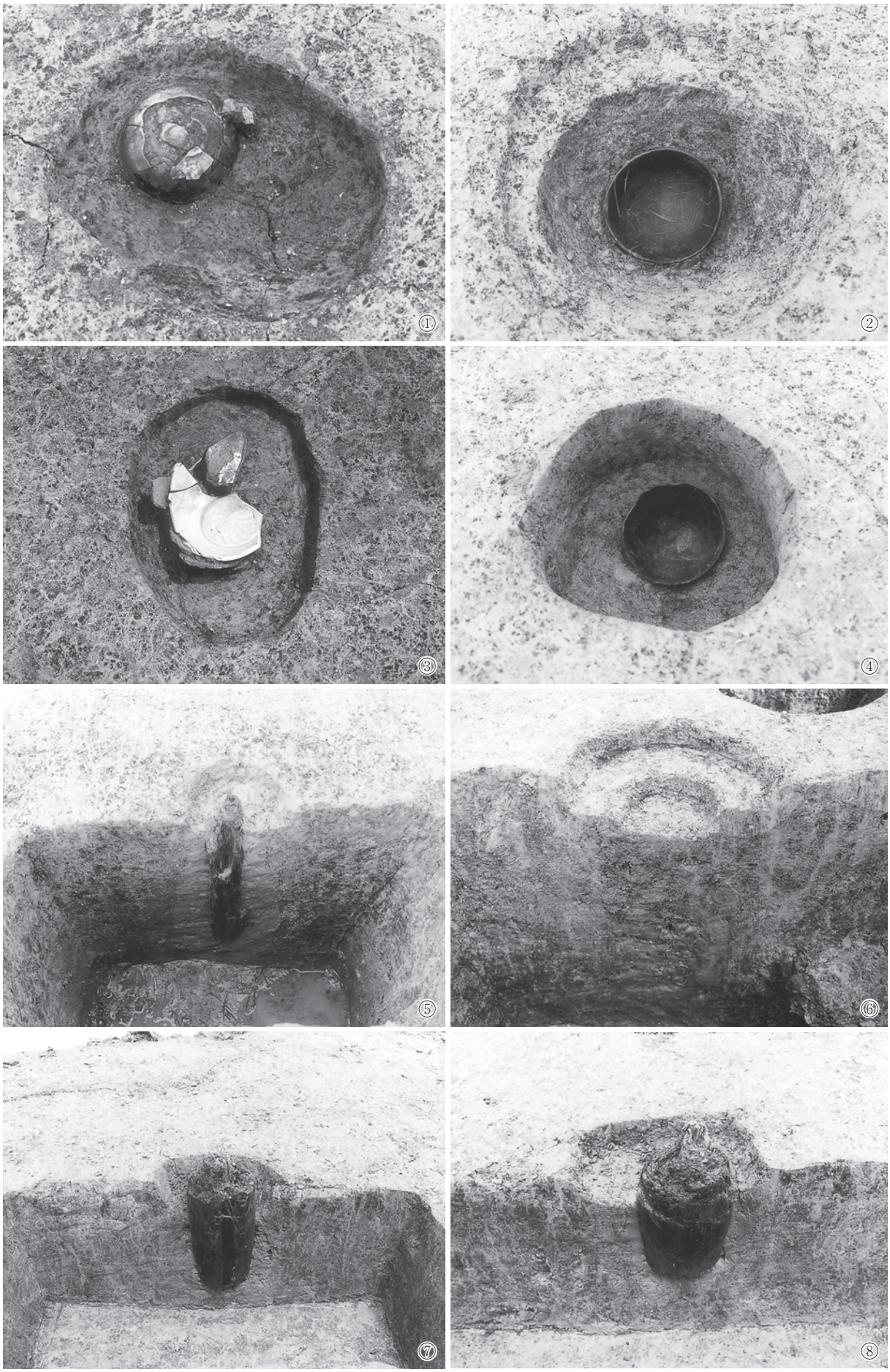
調査区西側柱穴群（東から）

写真図版6　第1面　BS1柱穴断面



①P17（北から）　②P21・P22（北から）
③P25（南から）　④P37（南から）
⑤P40・P41（南から）

写真図版7　第1面　柱穴断面



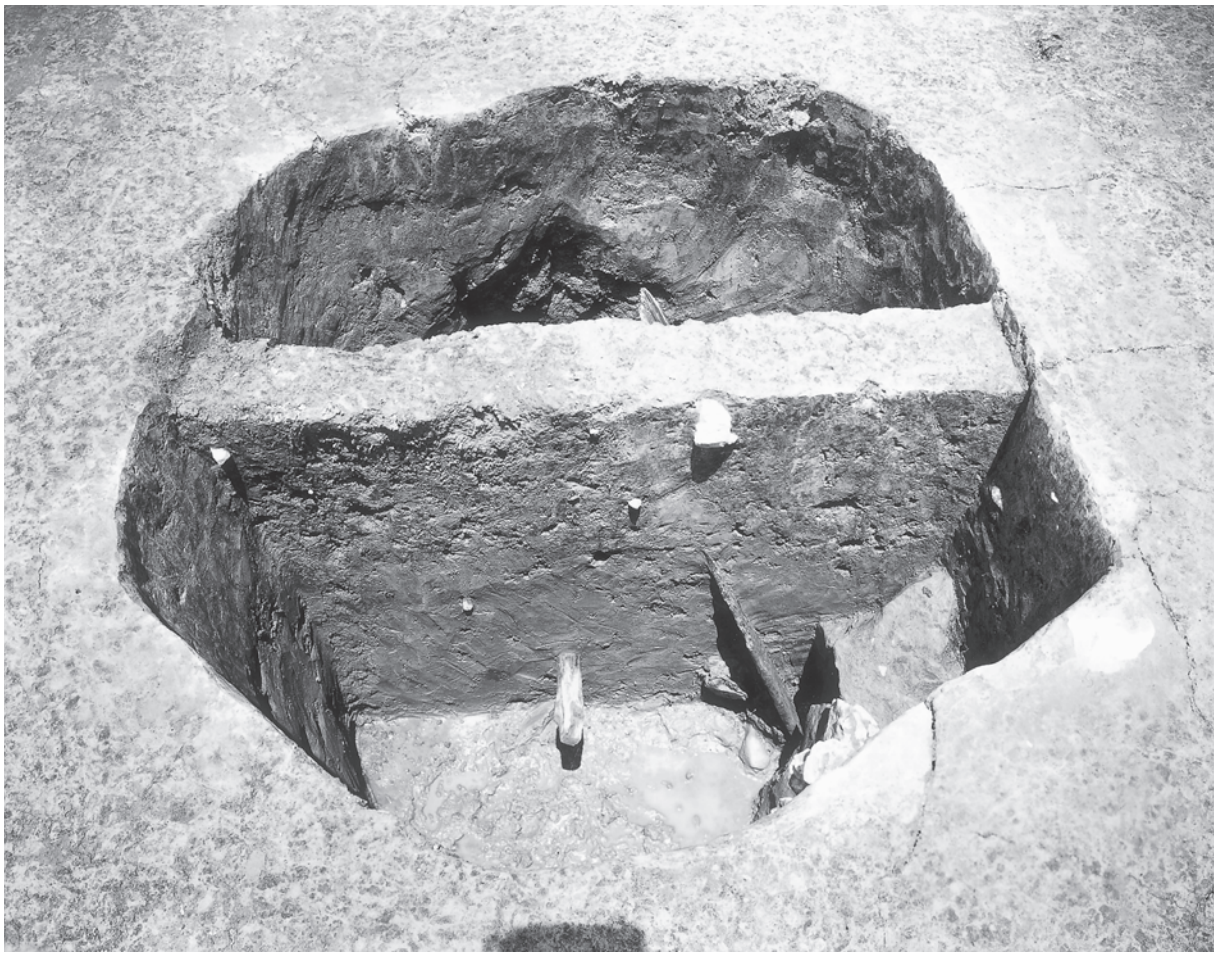
①P234（北東から）　②P62（北東から）　③P84（北から）　④P87（北東から）
⑤P89（南から）　⑥P76（南から）　⑦P174（西から）　⑧P173（西から）

SE１・SE２（西から）

SE１（北から）

SE 1 水溜（北から）

水溜曲物（北から）



SE 2 断面（南から）

井戸群東側検出状況（東から）

井戸群東側検出状況（南西から）

SE 3 （南から）

SE 3 水溜（南から）

写真図版12　第1面　井戸5

SE 7（南から）

SE 5（南から）

SE 5 断面

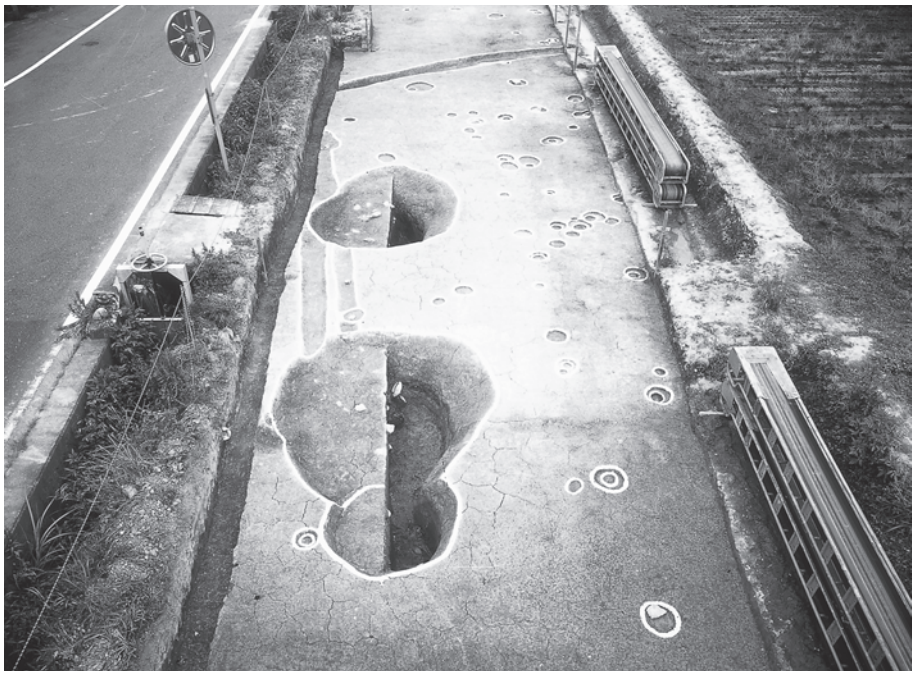
SE17（東から）

SE17水溜（東から）

写真図版14　第1面　井戸7

①SE 6 断面（南から）　②SK10断面（南から）　③SE20（東から）　④SK 4 （南から）

写真図版15　第1面　井戸8

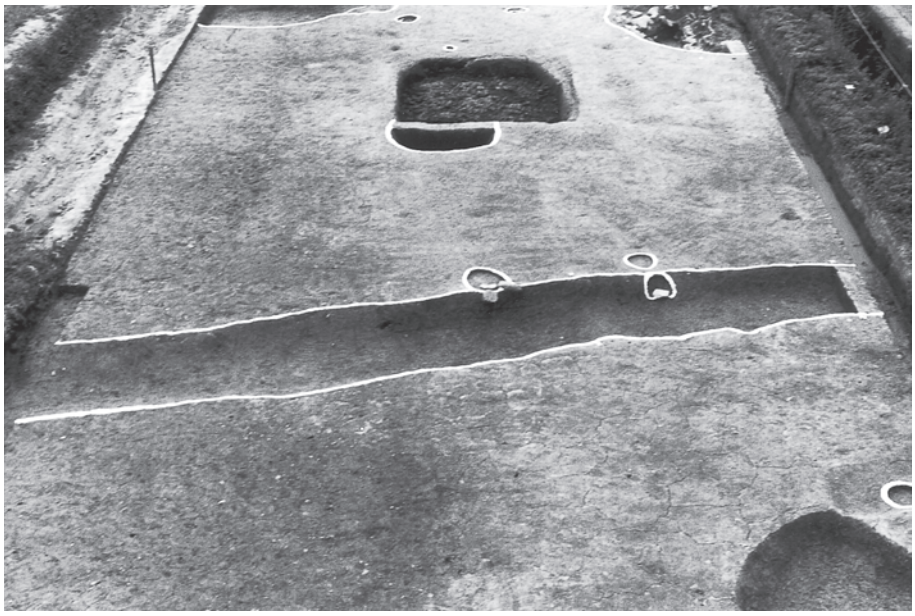


SE14～SE16（西から）

SE14断面（南から）

SE15・SE16断面（南から）

写真図版16　第1面　溝

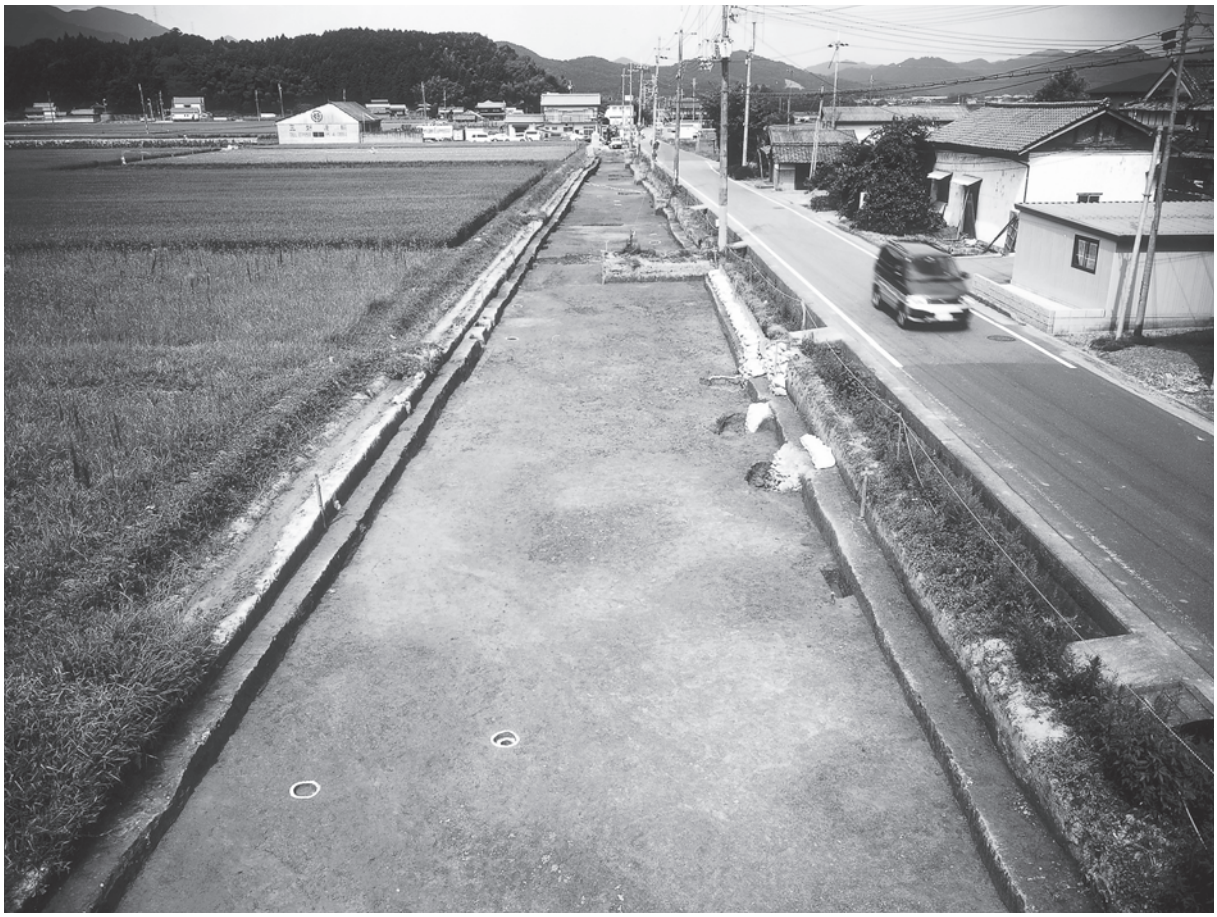


SD 1（東から）

SD 1（南から）

SK 9（南から）

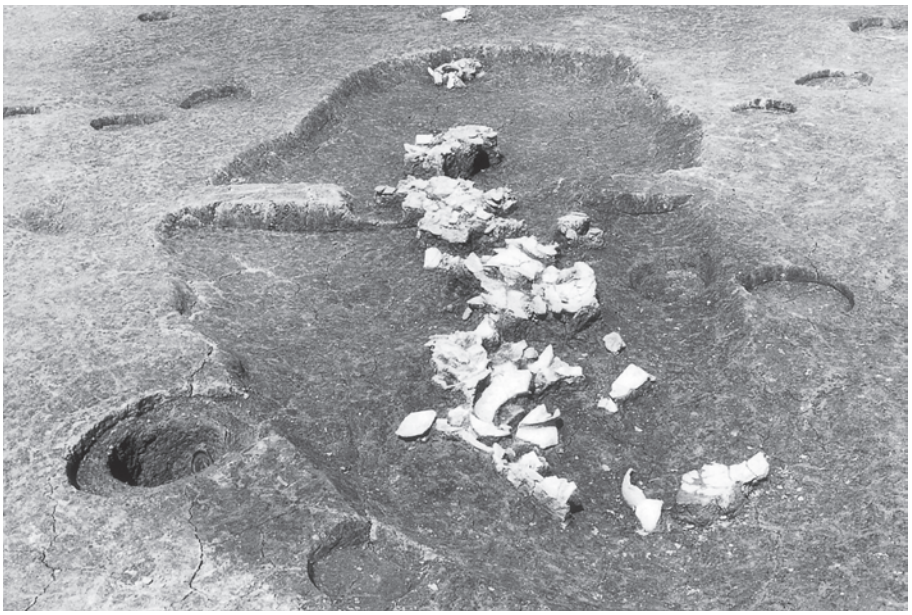
写真図版17　第2面　調査区全景



東から

西から

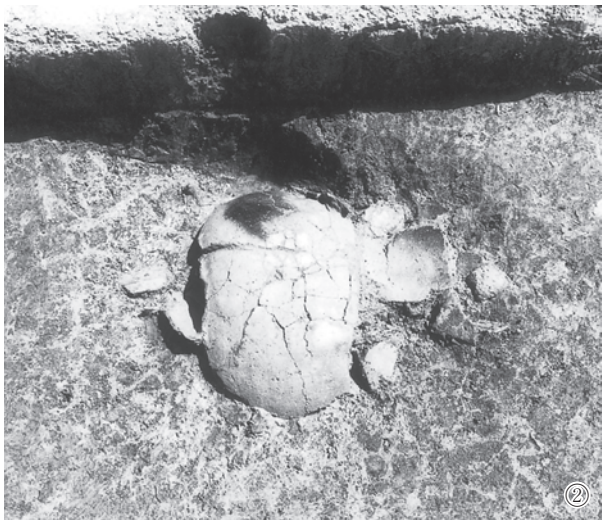
SK18（南から）

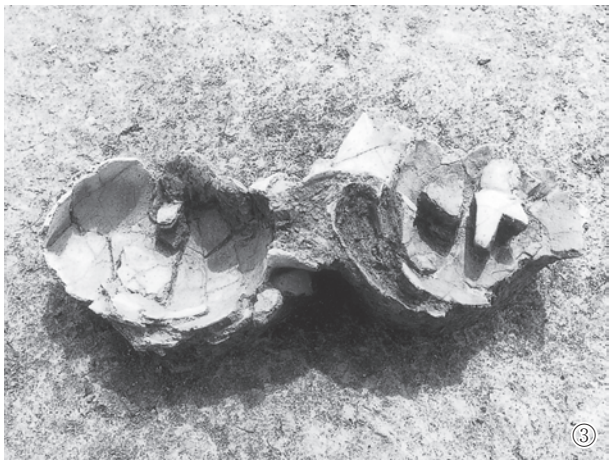


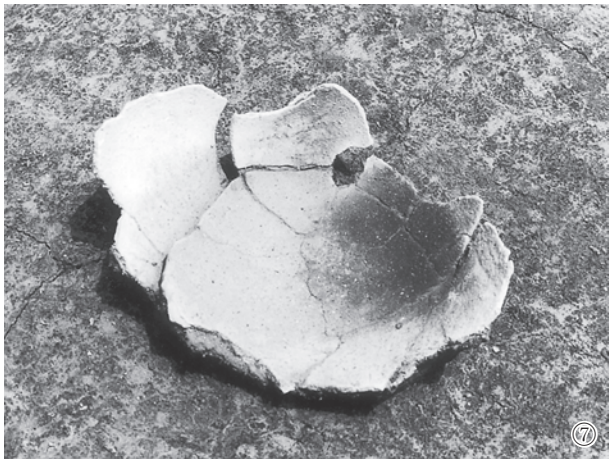
SK18（東から）

須恵器杯29出土状況（東から）

須恵器壺41出土状況（東から）







①弥生土器甕19出土状況（北から）
②弥生土器甕18出土状況（北から）
③弥生土器甕23出土状況（北から）
④弥生土器壺10出土状況（北から）
⑤弥生土器甕20出土状況（北から）
⑥土師器甕48出土状況（東から）
⑦土師器甕50･51出土状況（東から）

SD３（東から）

SD３断面西（南から）

SD３断面東（西から）

10

12

11

15

16

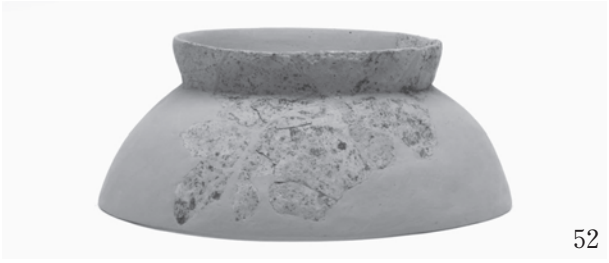
17

写真図版22　弥生～古墳時代　出土遺物2

50

4

22


52

18

48

51

19

32

24

27

26

28

25

35

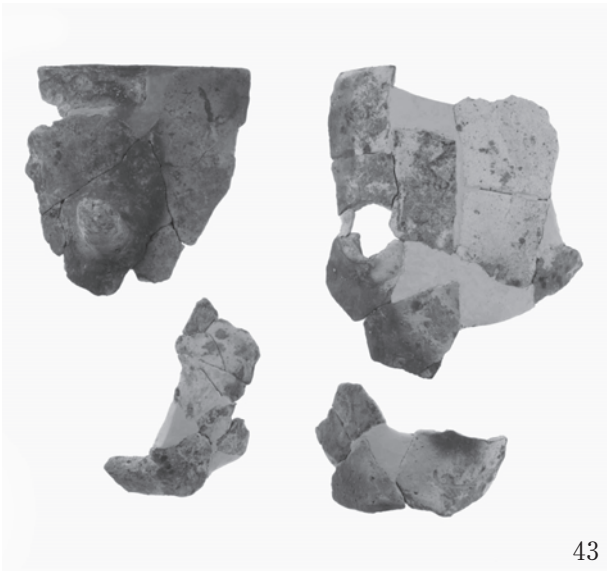
33

29

21

46

47


43

23

40

6

41

55

56

70

71

80

84

91

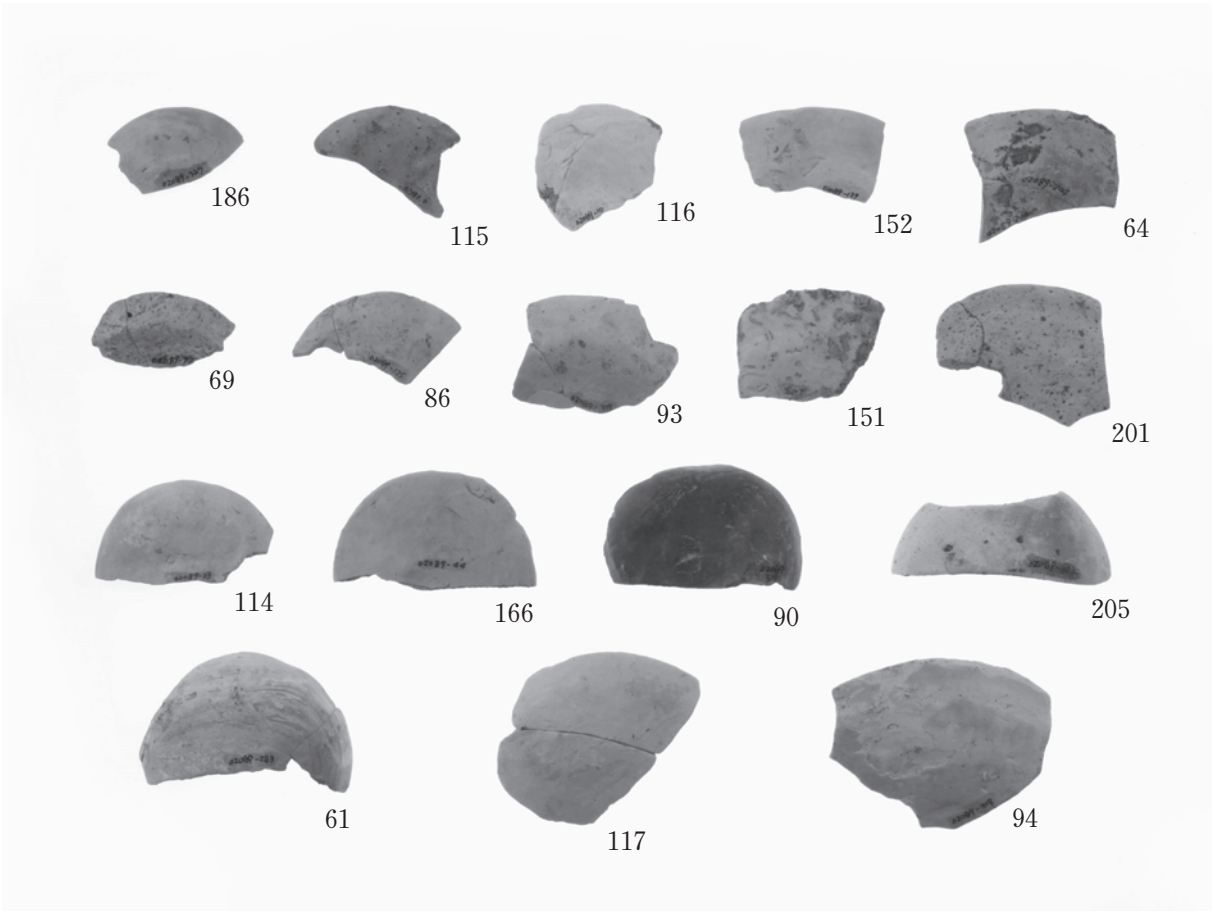
96

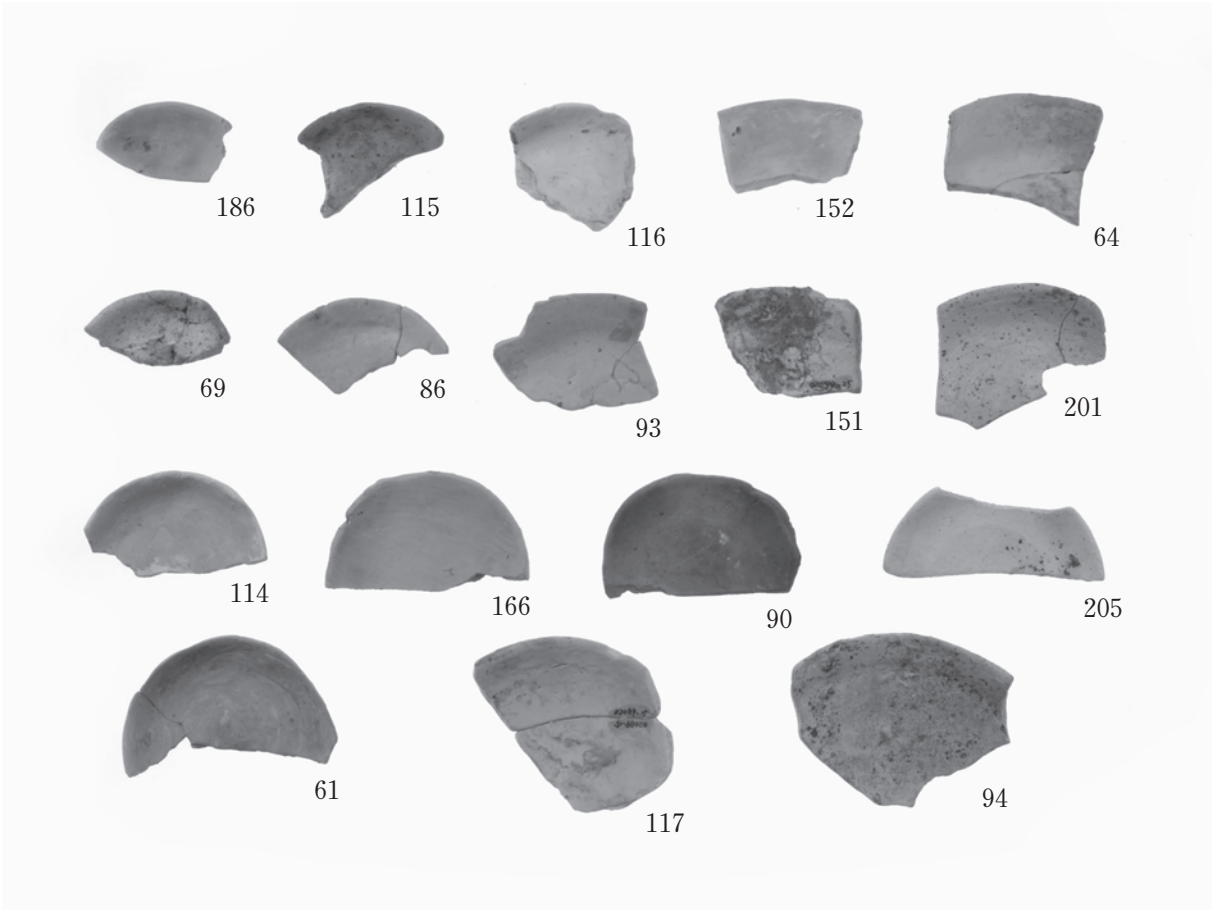
146

204

153

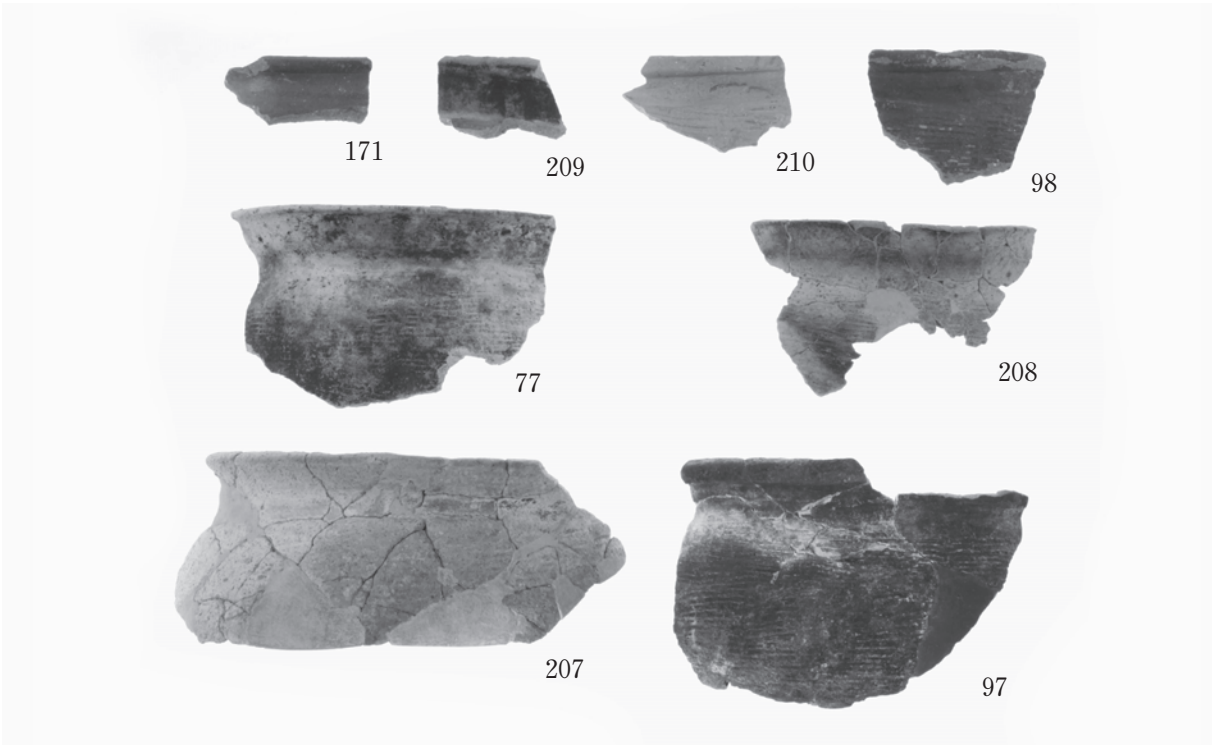
167

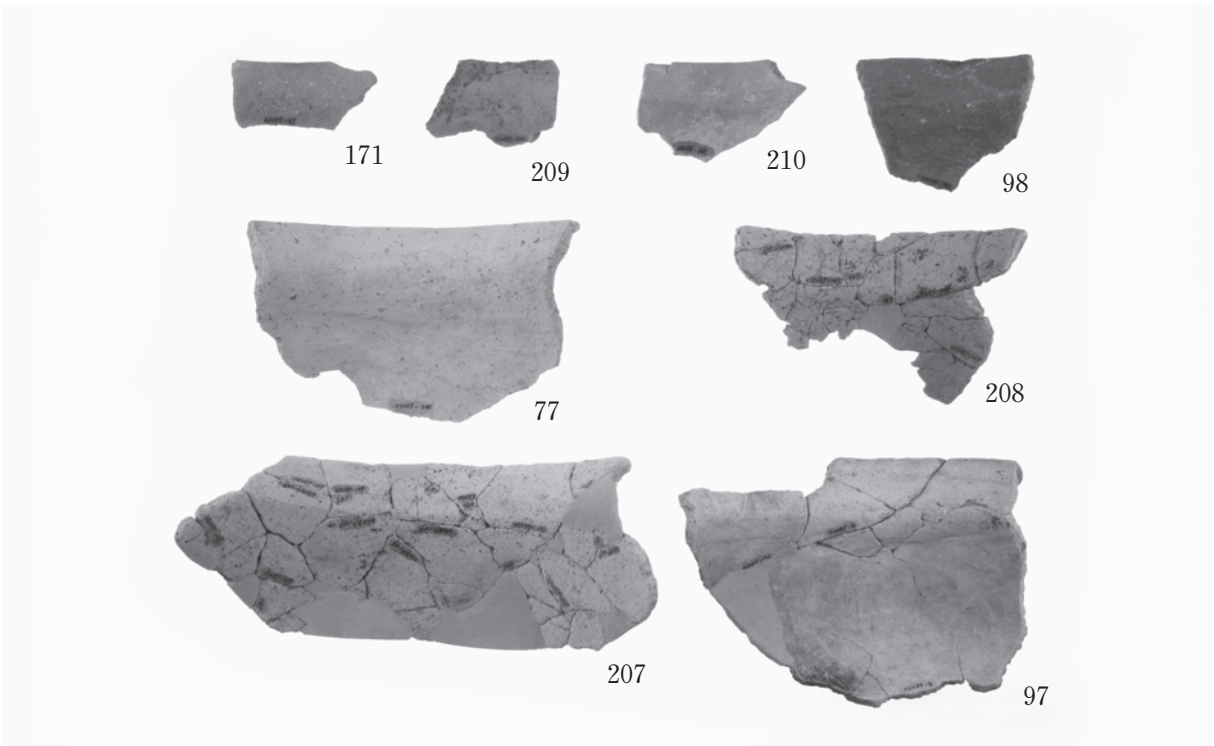

186
115
116
152
64
69
86
93
151
201
114
166
90
205
61
117
94


186
115
116
152
64
69
86
93
151
201
114
166
90
205
61
117
94

211

170


171
209
210
98
77
208
207
97


171
209
210
98
77
208
207
97

57

66

135

58

222

155

191

194

89

195

132

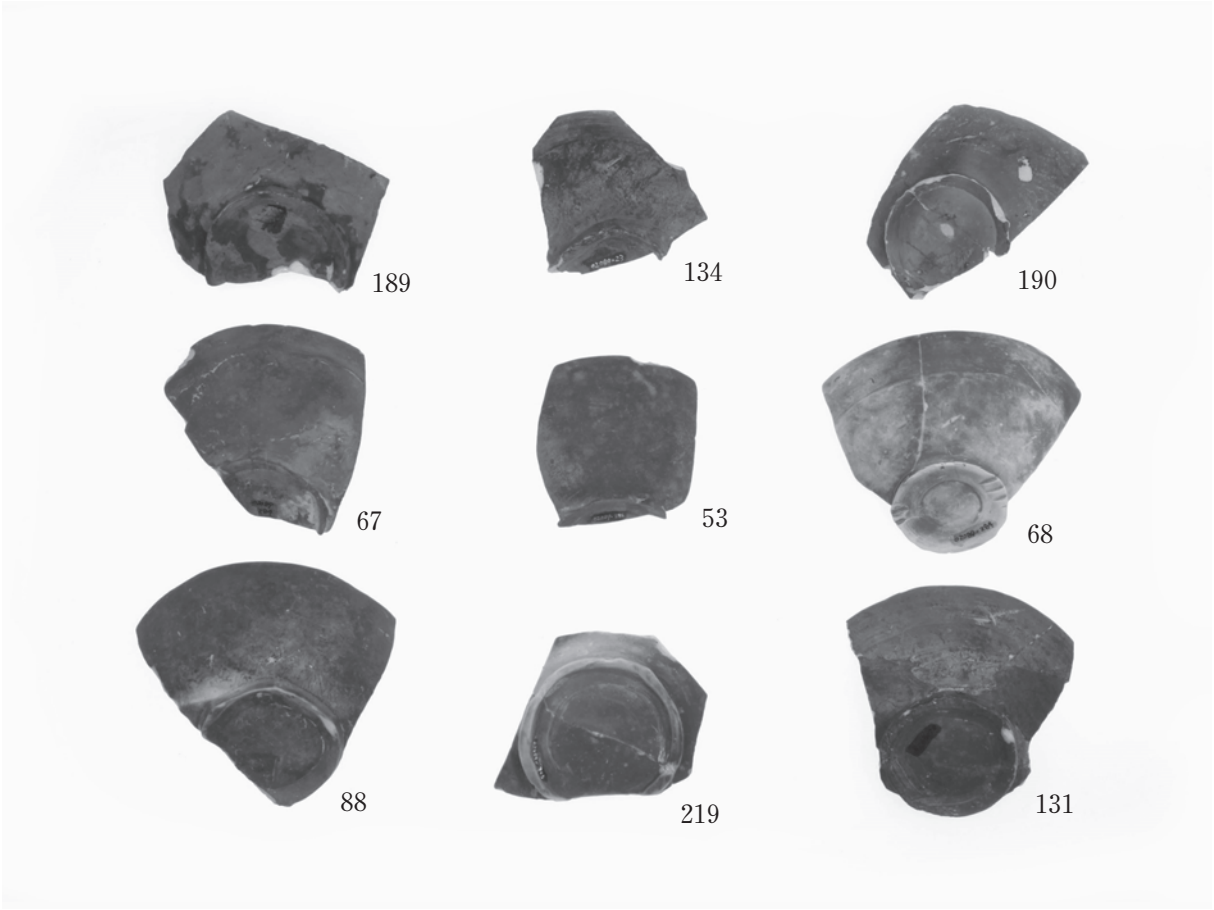
133

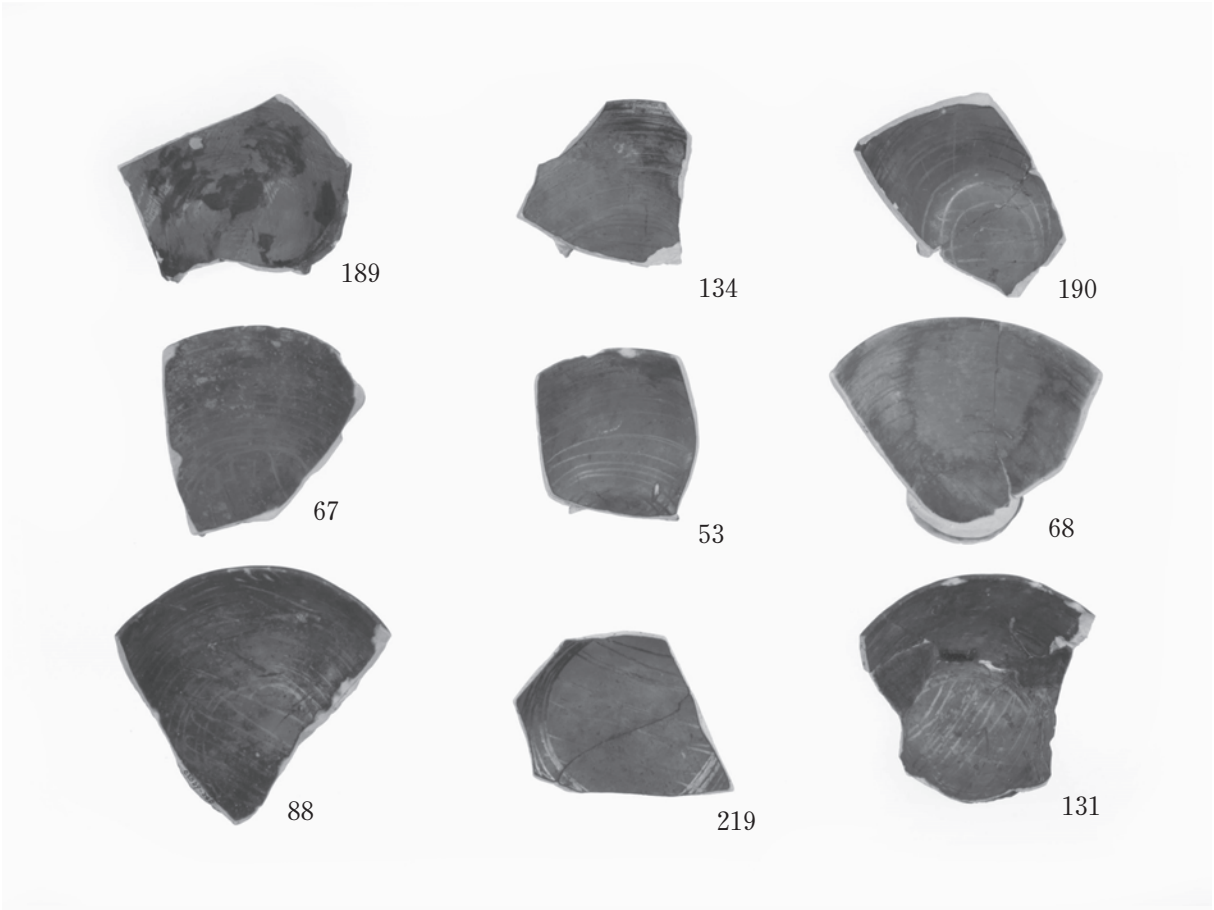
154

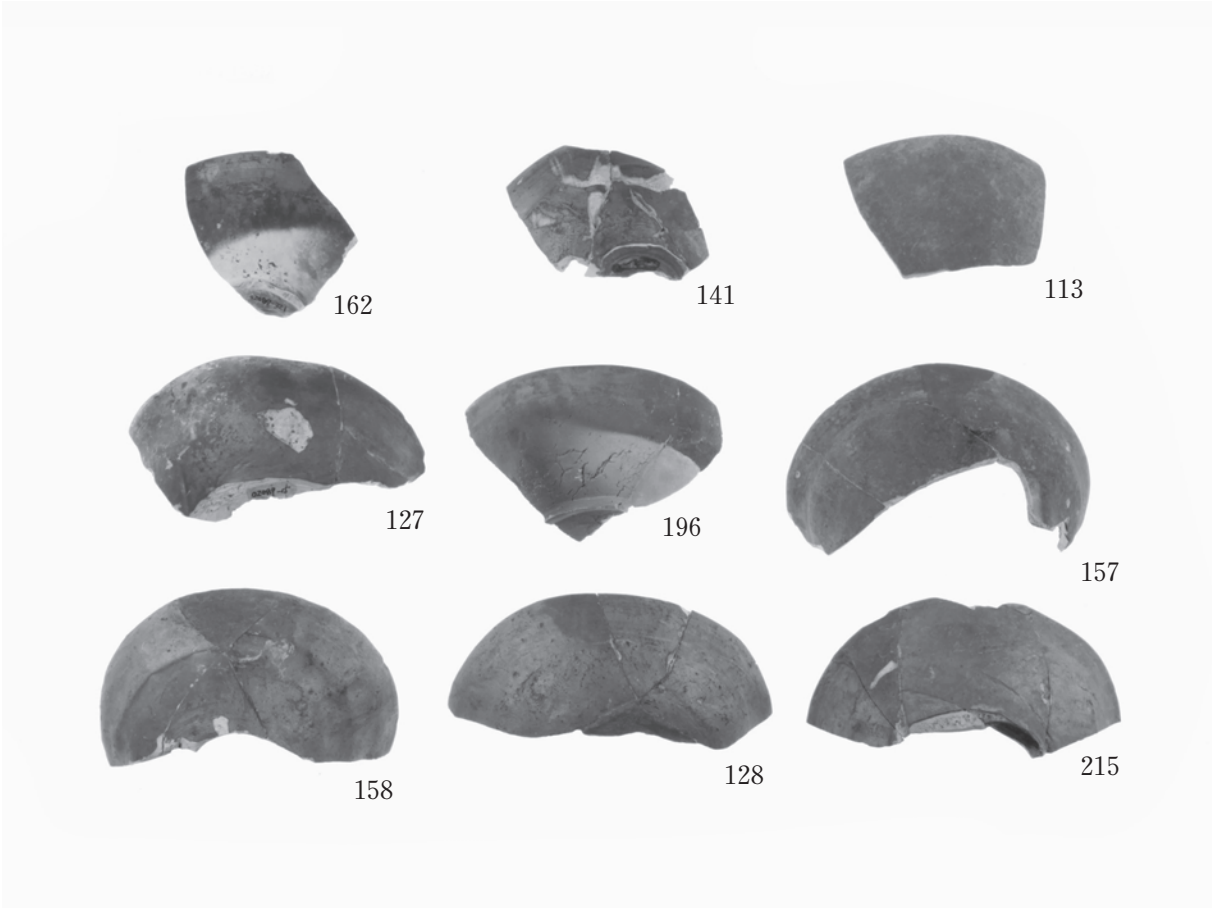
192

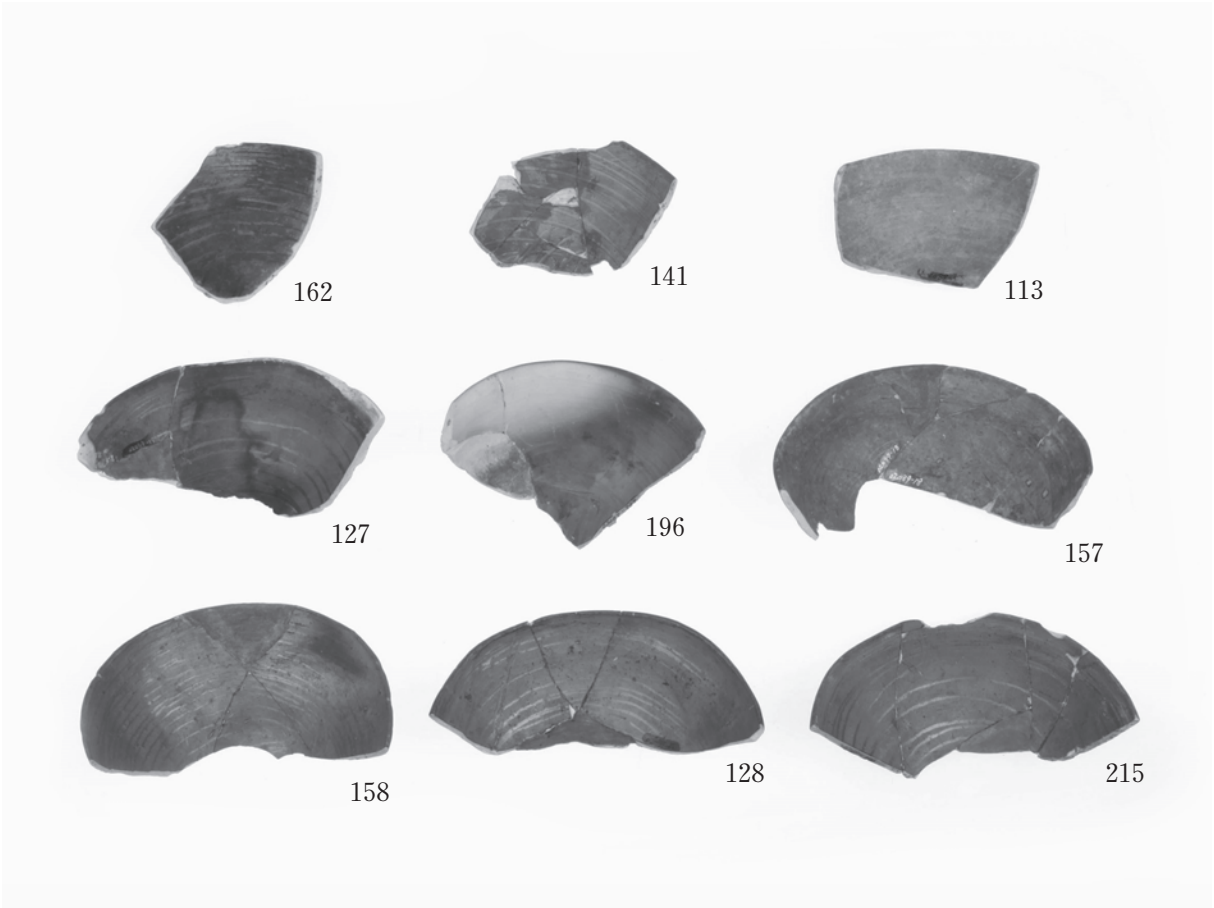
221

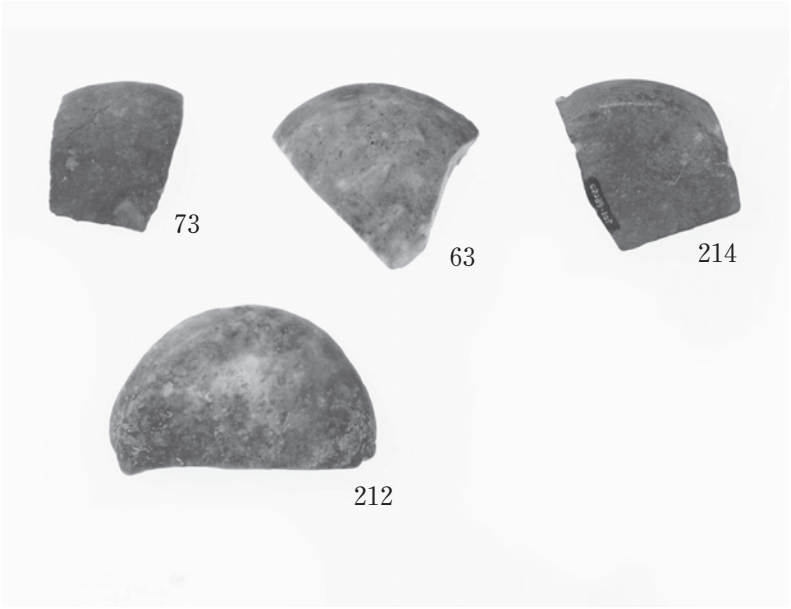
193

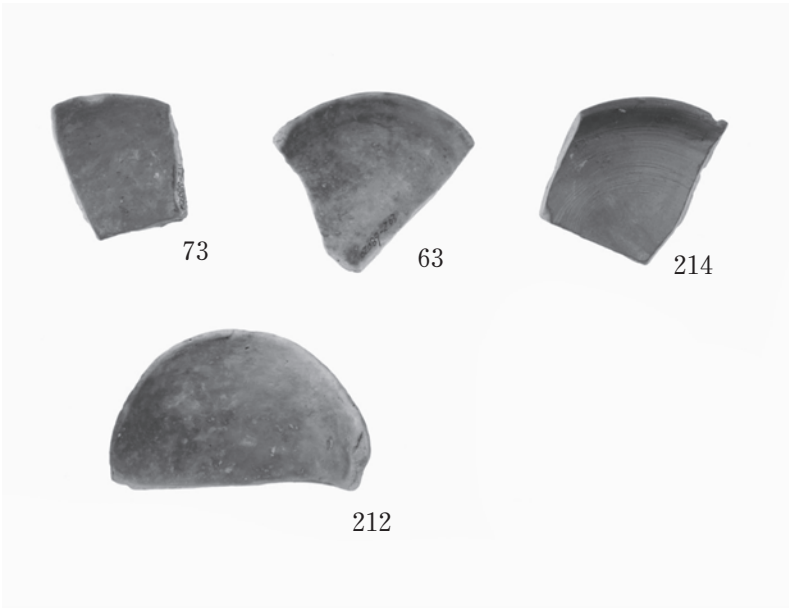

189
134
190
67
53
68
88
219
131


189
134
190
67
53
68
88
219
131


162
141
113
127
196
157
158
128
215


162
141
113
127
196
157
158
128
215

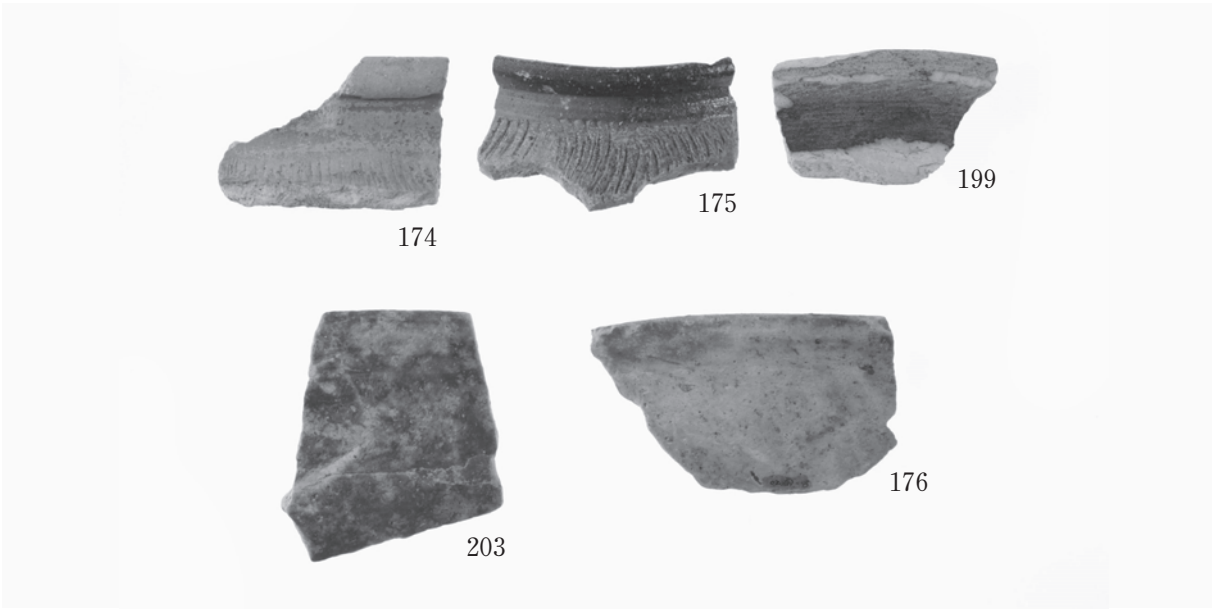


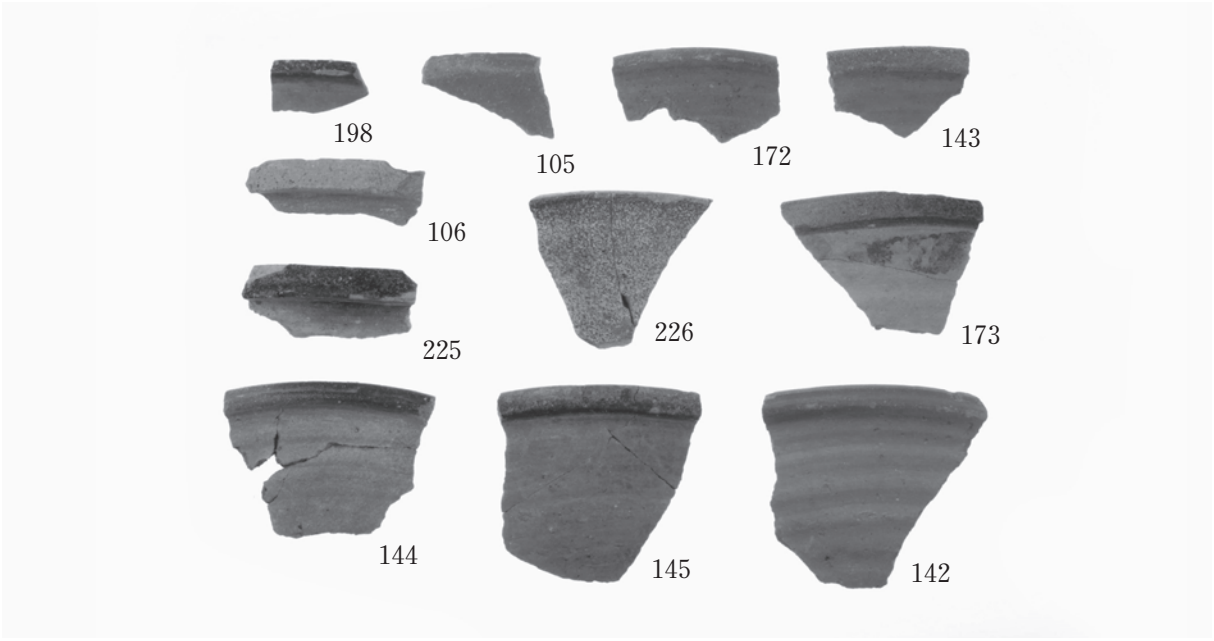


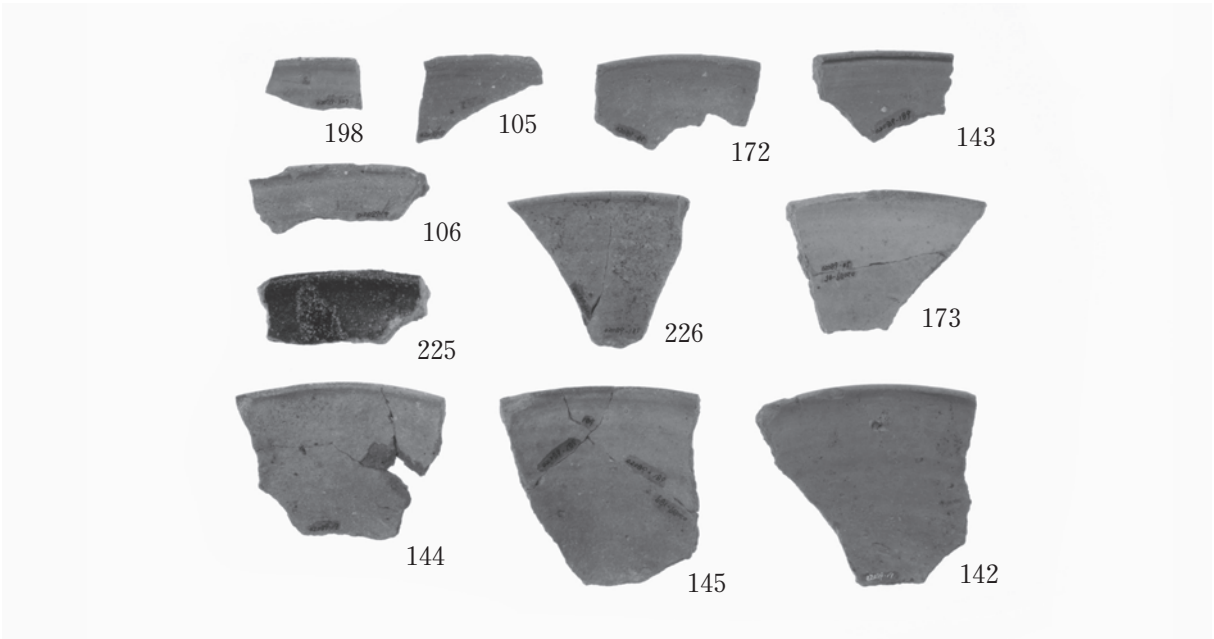
95

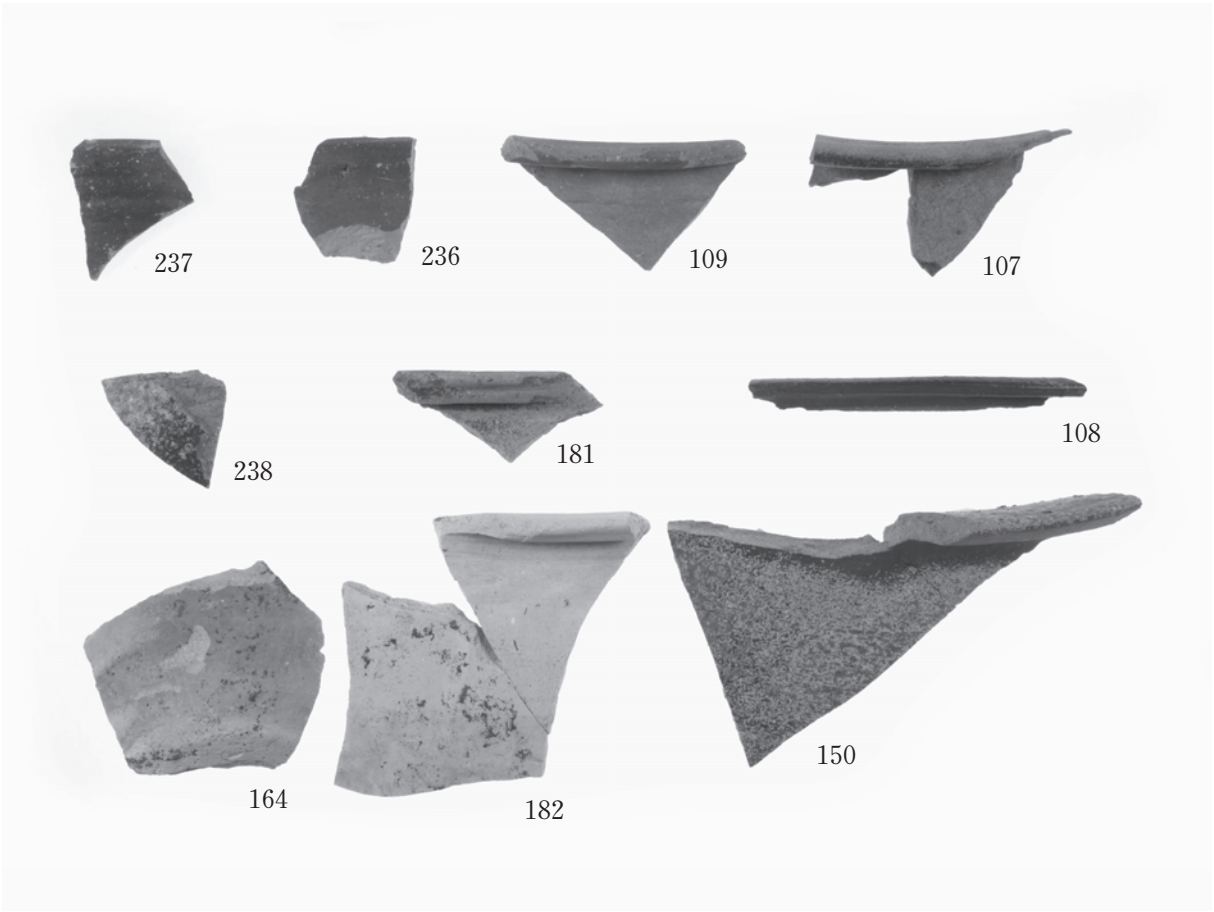
136

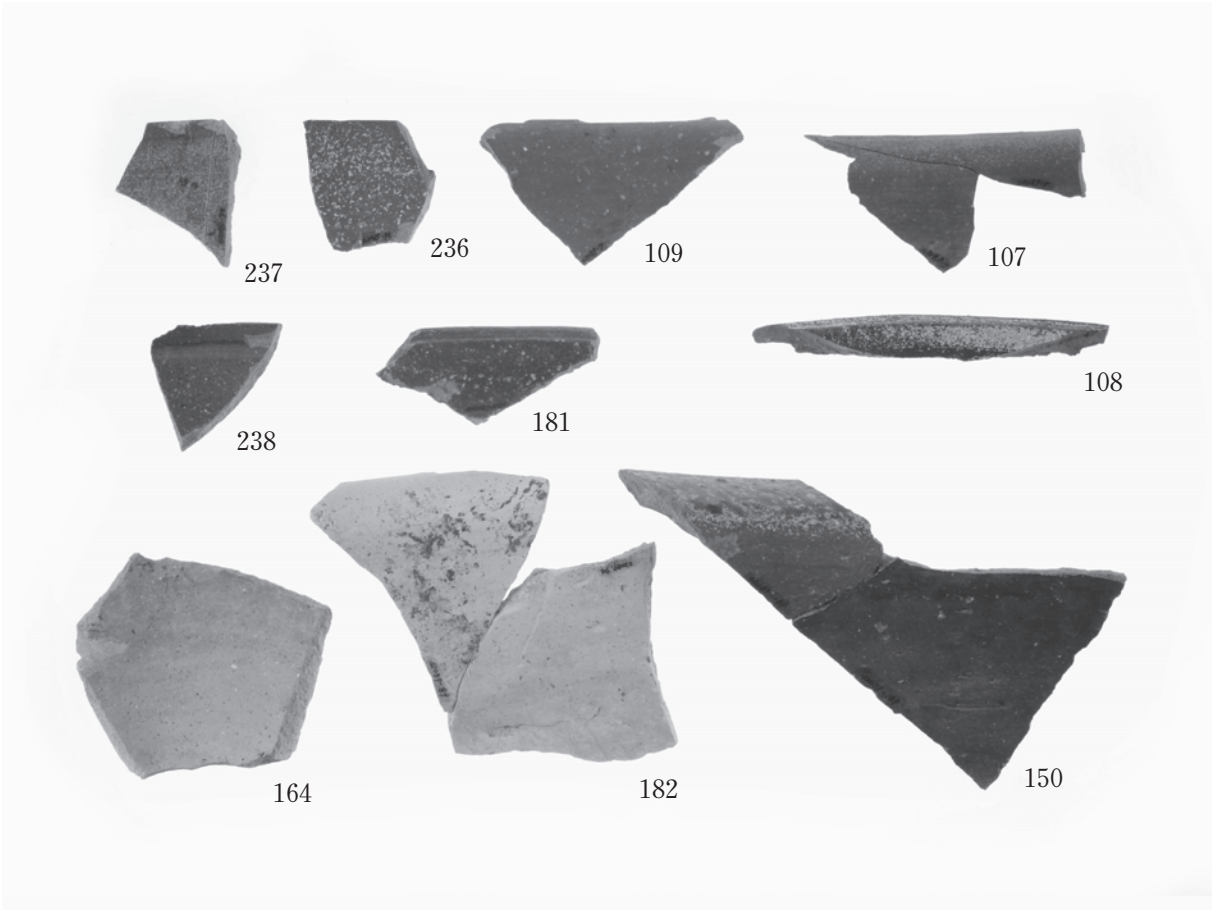
213


174
175
199
203
176

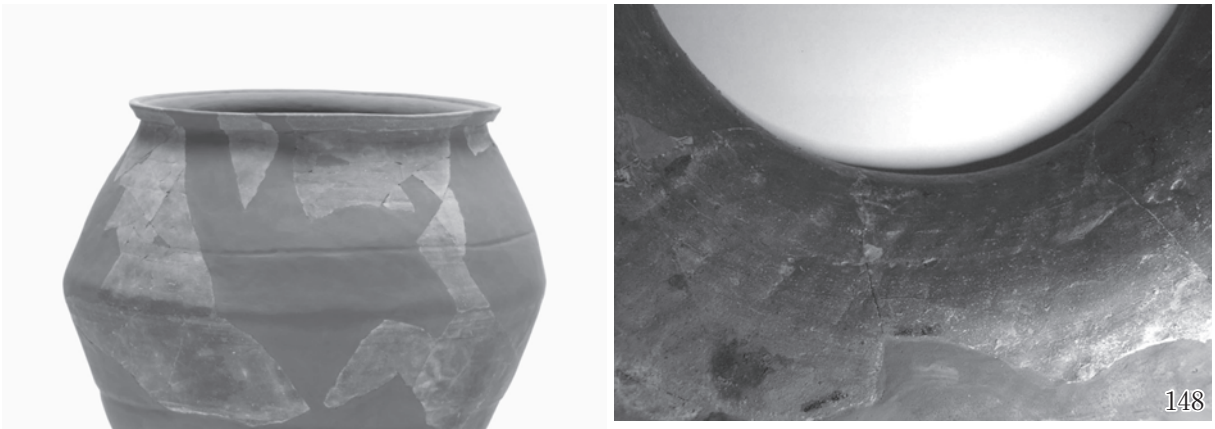

198
105
172
143
106
225
226
173
144
145
142


198
105
172
143
106
225
226
173
144
145
142

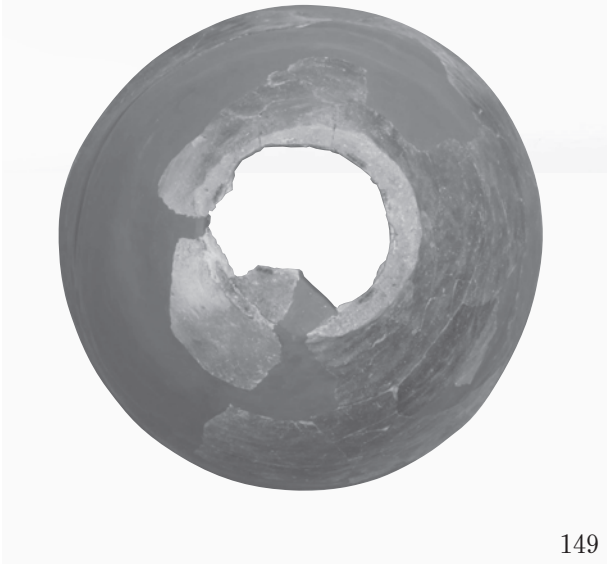

237
236
109
107
238
181
108
164
182
150


237
236
109
107
238
181
108
164
182
150

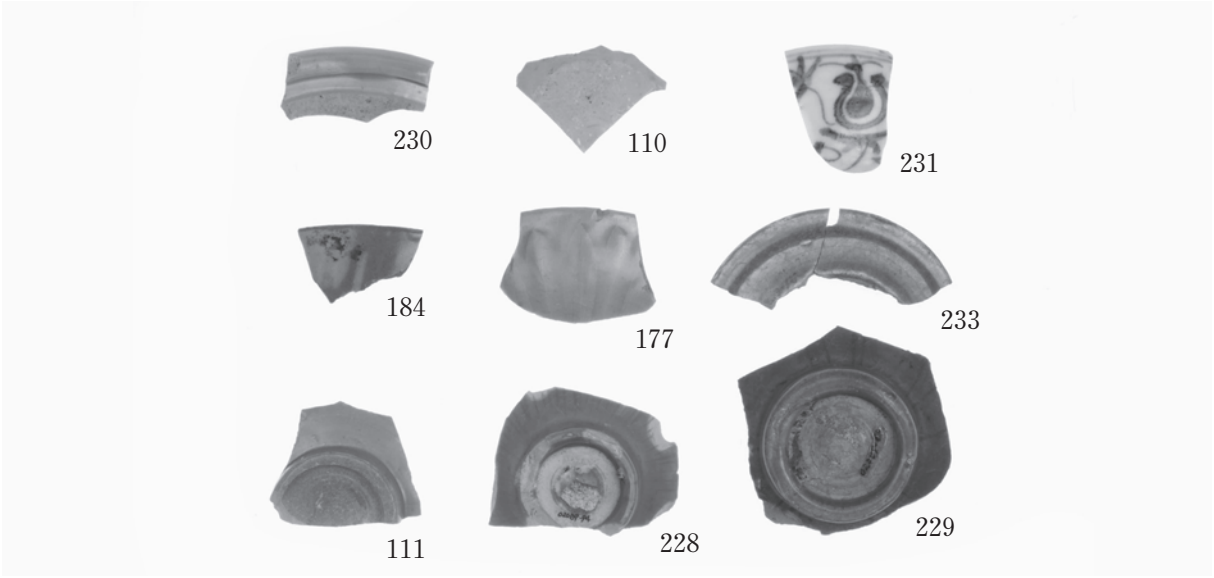
148

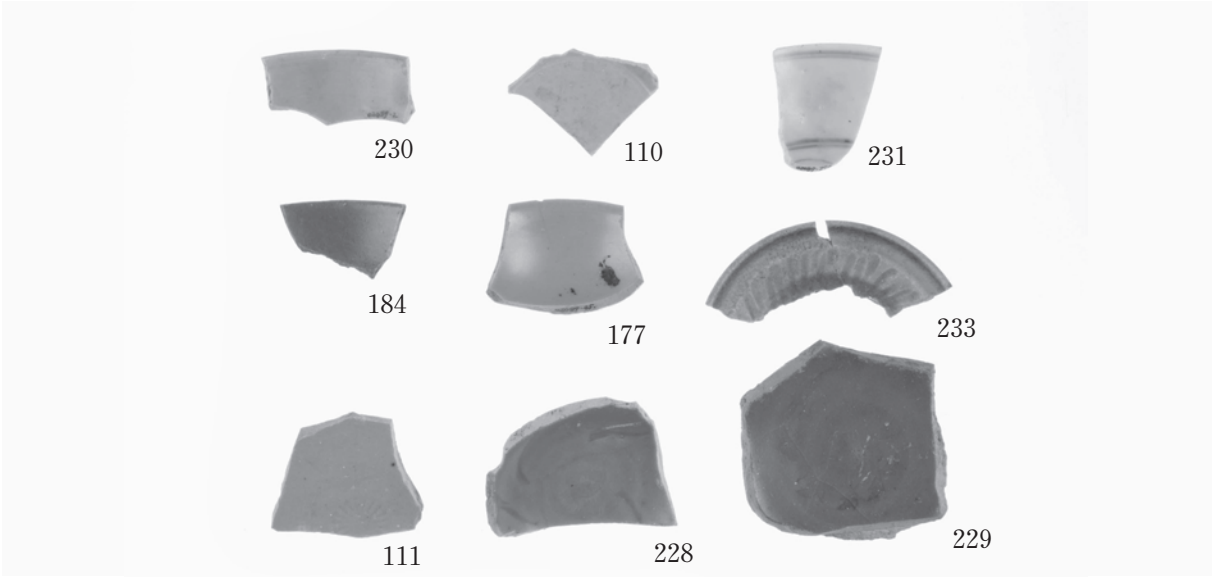


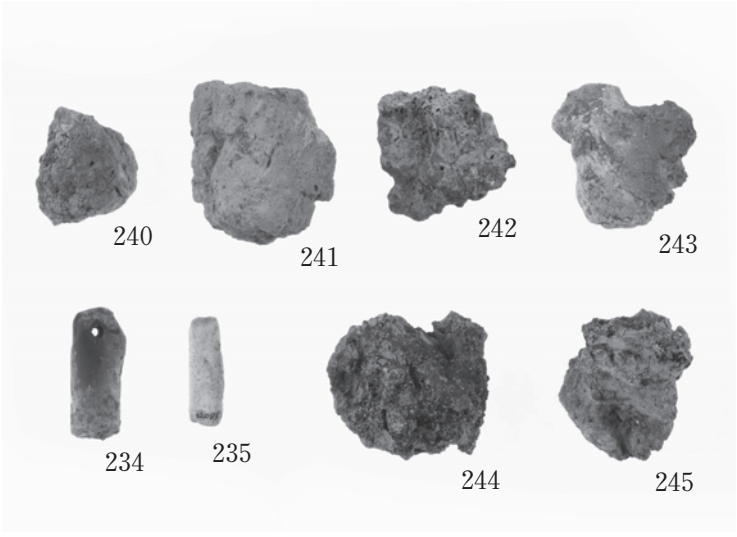
148



149


230
110
231
184
177
233
111
228
229


230
110
231
184
177
233
111
228
229


240
241
242
243
234
235
244
245

W10

W11

W12

W14

W10～W14

W13

W29

W30

W18

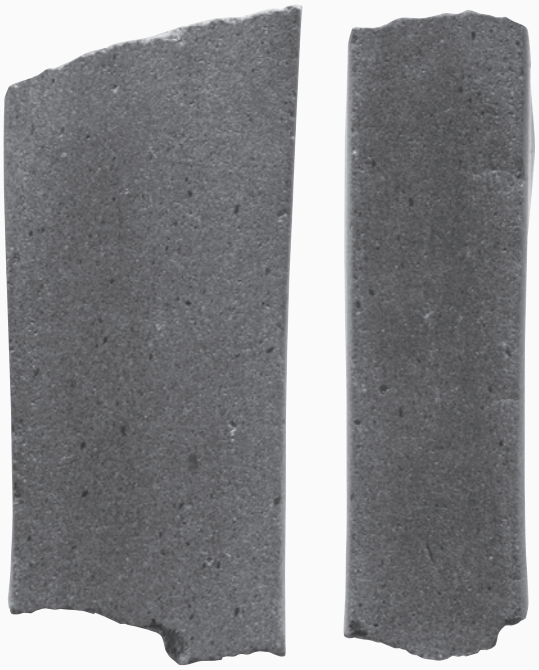
W21　W22　W23　W24

W24

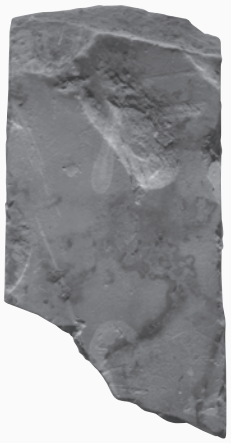
S2

S3

S4



S7



S6

S5

S8

S1

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ひがしこさいせき
書　　名	東古佐遺跡
副 書 名	
シ リ ー ズ 名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第428冊
編 著 者 名	山上雅弘・池田征弘
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館
所　在　地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　Tel 079-437-5589
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　Tel 078-341-7711
発 行 年 月 日	2012（平成24）年３月21日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
東 古 佐 遺 跡	篠山市 東吹・網掛	28204	2002089	34° 54′ 26～ 43″	135° 22′ 5～ 17″	平成14年 5月24日～8月9日	1,089㎡	(主)西脇篠山線 道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
東 古 佐 遺 跡	集落遺跡	弥生～古墳時代 奈良時代 中世	掘立柱建物・柱穴・溝・土坑・墓	土師器皿・鍋・甕、瓦器椀・皿、黒色土器椀・須恵器捏鉢・丹波焼甕・青磁碗・白磁碗・曲物・下駄・漆椀・石鍋	

＊緯度・経度は平成14年４月１日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告書　第428冊

東古佐遺跡発掘調査報告書

主要地方道西脇篠山線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

平成24年(2012) 3 月21日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
電話 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
電話 078-341-7711

印　刷　船場印刷株式会社
〒670-0994　姫路市定元町4－2
電話 079-296-3535